

支那を観る

森悦五郎著



0000286000

0000286-000

604-520

支那を観る

森悦五郎・著

同仁会

昭和6

AAB

2

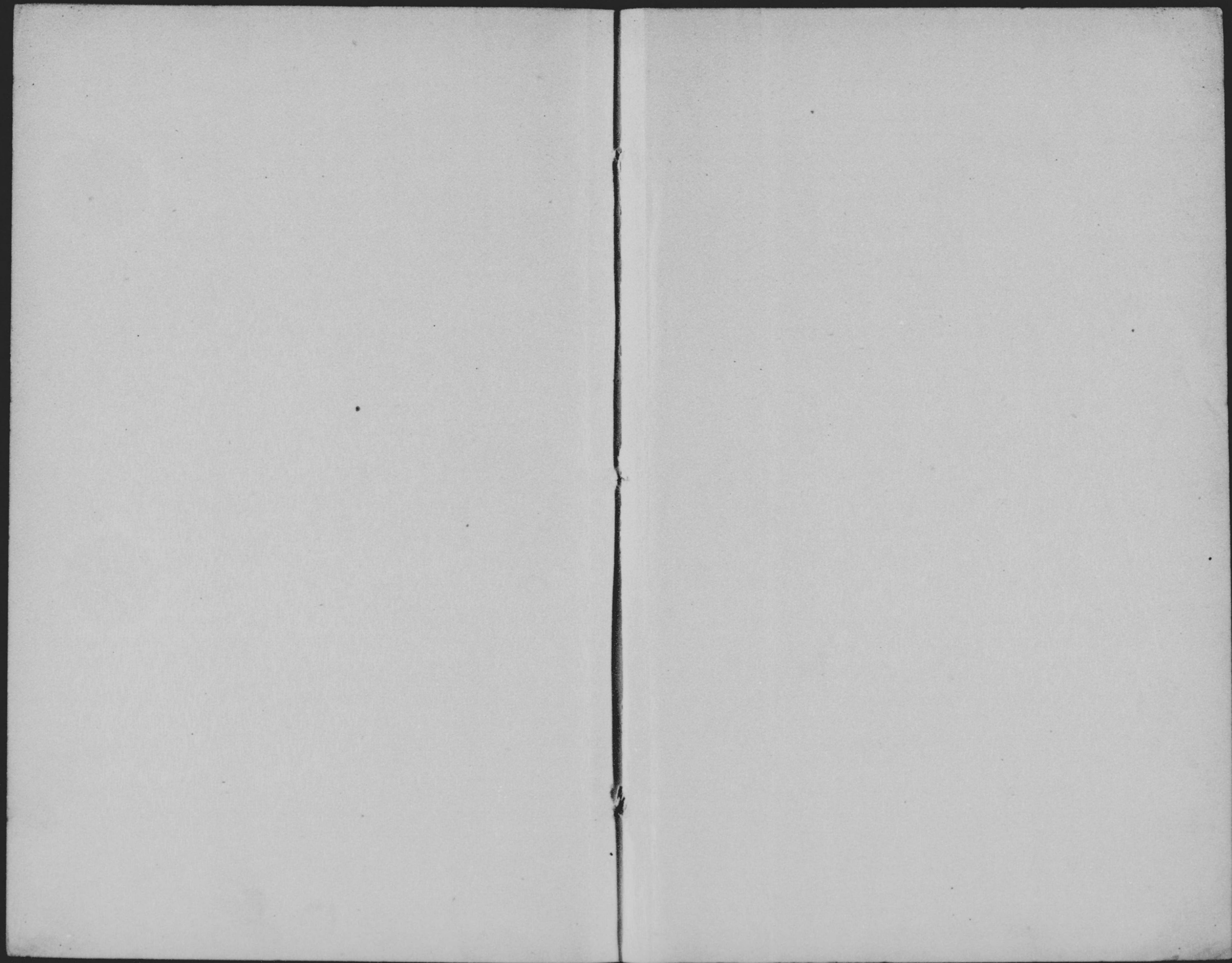
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

森 悦 五 郎 著

支那の観

森 悦 五 郎 著

支那の親



はしがき

凡そ旅程愉快にして且利益を齎すものはない。そは自然の興會、民情風俗、歴史の回顧等旅行に依りてこそ活きたる智識を吸収することが出来るからである。

本書は同仁會主事森蘇水氏が曩に會務を帯びて北京に出張し歸途、天津、濟南、青島等を歴遊されたも旅行記であるが、著者は始めて支那を視られたる丈けに其觀察の警拔なるを其着眼の獨創的なる處より新味津津たるものが頗る多い。されば本紀行が、一度雜誌同仁に掲載せらるゝや各方面より賞讃の辭を寄せられ又單行本として發刊せられんことを希望する向も少くなかつた。本會も亦之を一雜誌の掲載に止むることを惜しみ、著者に請ふて更に改訂増補を爲し茲に一小冊子として出版することにしたのである。

惟ふに本書の如きは支那紀行としては其一部分たるには相違ないが、未だ支那を識らざる者又は是より支那を旅行せんとする人士に取つては好箇の羅針盤たるを疑はないので特に茲に本書を推奨する次第である。

昭和六年五月

同仁會理事 小野得一郎

604-520

支那を觀る

同仁會本部
主事 森 悦 五 郎

序

近來我國より支那に旅行し又は居住して彼の地の文物事象を研究發表せらるゝもの多きを觀る、即ち支那の文化、政事、國際、經濟、醫事衛生、人情、風俗、骨董其他専門的論說に或は斷片的記事等其數實に枚擧に遑なく其何れも我國人をして支那研究上に奮らす効果は蓋し甚大なるものである。

余は先般不圖も我同仁會北京醫院創立滿十五周年記念祝賀會に參列の爲め北平に差遣せられ序を以て濟南、青島方面を視察するの機會を得たることは同仁會に奉職する予の光榮として一生忘却し能はざる履歷の一つである。斯るが故に予は出發に際し此度の旅行をして本會事業宣傳の爲、將亦日支兩國親交の爲に聊かたり共貢獻し、尙ほ且旅行途上の見聞を成る可く詳細に記録し以て我内地同胞に對し努めて支那を紹介し度く期待せし處で有つた。然るに予は政事家に非らず、醫者でなく、歴史家にも非らず、商人でなく、美術を識らず、骨董を見ず語學を解せないと云ふ八方塞り眞に一顧の價値なき野人の旅行なるが故に、何等一方的に取り纏つた研究と云ふものゝ出来ない器なることを返すべくも遺憾とし恥ぢらる次第である。

從て此記録も唯東京を發足して神戸解纜、天津、北平夫れから夫れへと巡遊の経路に従ひ直感的に見聞し、又體驗せる儘を此所に狩り集めて掲げたる極めて斷片的紀行文にして讀者の參考と成る可き資料の甚だ乏しく、殊に一度支那を見られたる諸彦には一顧の價値なきを痛嘆する次第なるも、若し未だ支那を觀られざる大方の爲に些少の旅行指針となり、又我同仁會が支那に於て成せる事業の精神と其實績の幾分とを了解せらるゝの資ともならば予の幸甚是に過ぎざるものである。

終りに臨み、此度の旅行に於て北京、濟南、青島各醫院の院長副院長、事務長外各位より與へられたる幾多の懇情と天津岡本總領事、田代領事並天津居留民團各位の厚意とを深く感謝する次第である。

昭和五年一月

目次

一、東京より北平迄

- (一) 出發
- (二) 活動寫真用「フィルム」の携行
- (三) 不安なる天候
- (四) 瀨戸内海の旅
- (五) 門司の半日
- (六) 北京醫院新任眼科耳鼻喉科兩醫長乗船
- (七) 支海の一夜
- (八) 愛船長城丸
- (九) 海路の旅心地
- (一〇) 黄海の濃霧
- (一一) 兄が守備せし劉公島
- (一二) 直隸海峽と張宗昌將軍
- (一三) 船中書の會
- (一四) 船中の新聞
- (一五) 小間心のつく「ホイイ」さん
- (一六) 心をこめた船中の晚餐
- (一七) 塘沽上陸
- (一八) 驛の待合
- (一九) 複雑なる貨幣
- (二〇) 暑い北支那
- (二一) 北平入

二、支那語の必要

三、北京醫院

- (一) 北京醫院の位置と略歴
- (二) 本院の規模と將來
- (三) 中國人雇傭者の多き北京醫院
- (四) 醫院の組織も共和的に

四、日本人生活の一端

- (一) 日華折衷の家屋生活
- (二) 支那服着用の獎勵
- (三) 最近の日本人

五、北平見物

- (一) 北京城
- (二) 北平の名
- (三) 北平内城
- (四) 北平外城
- (五) 宮殿參觀
- イ、宏大なる其規模
- ロ、屋根瓦の色々
- ハ、寶物
- (六) 中山公園
- イ、公理戰勝記念門
- ロ、茶館と其廣い休憩所
- ハ、孫文氏の祭壇

- (七) 建物及路傍の宣傳
- (八) 日本公使館と其の附近
- (九) 天壇
- (一〇) 支那の停車場と汽車
- (一一) 「ロックフェラー」財團北平協和醫院を見る
- (一二) 名優梅蘭芳を觀る
- (一三) 北平商店視き
- イ、靴店に行く
- ロ、東安市場

市場の規模

商品と其値段

市場内の演藝

- ハ、名物の刺繡屋
- ニ、商業中心の大棚欄
- ホ、大道の理髮屋
- (一四) 支那の人力車
- (一五) 萬壽山より西山に遊ぶ
- イ、通行税の關所
- ロ、萬壽山の參觀
- ハ、玉泉山下に晝食を喫す
- ニ、西山(碧雲寺)
- ホ、臥佛寺
- (一六) 北平市衛生展覽會を觀る

(一七) 疾走的名所巡禮

- イ、景山
- ロ、大液池
- ハ、鐘樓及談樓
- ニ、雍和宮
- ホ、張作霖氏の遺物

六、飯島博士晚餐

七、北平出發天津に向ふ

八、天津の二日

- (一) 天津の自動車見物
- (二) 天津居留民會公堂に活動寫眞の映寫
- (三) 天津の醫療機關
- (四) 岡本總領事午餐會
- (五) 天津出發

九、津浦線の一夜

- (一) 沿道雜觀
- (二) 乗り心地よい汽車
- (三) 食堂に船客と奇偶す
- (四) 寢臺虫を退治す
- (五) 濟南に到る

一〇、同仁會濟南醫院

庚申俱樂部の晚餐、楠本博士離濟

一一、濟南市内見物

- (一) 商埠地
- (二) 陶突泉
- (三) 大明湖

一二、徐院長の招宴

一三、見聞多き膠濟鐵路の一日

- (一) 驛の税關
- (二) 嚴重を極めたる沿道の警戒
- (三) 沿線の早魁
- (四) 評判よき濟南醫院と院長
- (五) 進歩著しき支那の蠶業
- (六) 沿道の主義宣傳
- (七) 青島に入る

一四、同仁會青島醫院

- (一) 事務打合と晚餐
- (二) 院内一巡

一五、青島見物

- (一) 海水浴場
- (二) 會社岬の砲臺
- (三) 青島醫院牛乳搾取場
- (四) 「イルチス」砲臺に昇る

(五) 忠魂碑に詣つ

(六) 青島神社に參詣す

(七) 八幡山と測候所

一六、栗本院長晚餐招宴

一七、霧中の九水行き

一八、青島より神戸へ

- (一) 埠頭の混雑
- (二) 沖より觀たる青島全景
- (三) 歸路難船
- (四) 船中慰安の餘興
- (五) 嚴島神社參詣
- (六) 船中の麻雀

一九、歸京

二〇、特筆すべき旅行中の感想

- (一) 勤續永き同胞の功勞
- (二) 死後の餘光多き孫文氏
- (三) 紙幣統一と日貨排斥
- (四) 憐なる廢帝の末路
- (五) 支那古建築物の廢退
- (六) 中國人は宜しく日支關係を尊重せよ
- (七) 日本人にも亦支那を紹介するの要切なり
- (八) 日本商人の奮起を望む
- (九) 頻繁に招かれた支那のお料理
- (一〇) 支那各地の巡迴診療と衛生展覽會の必要



一、出發

一、東京より北京迄

六月四日、豫定の日は來りて愈々出發支那旅行の途に昇る、今回の用務は我同仁會北京醫院創立滿十五年記念祝賀會に參列する傍ら序を以て北京、並濟南、青島各醫院の状況を視察するにある。然れども事務上の視察に關する事項は一切是を他に譲り此處には専ら巡遊の経路に伴ふ紀行のみを極めて断片的に掲ぐることにす。

(北京醫院創立滿十五年記念祝賀會の爲には同仁會本部より代表として貴族院議員同仁會理事金杉英五郎博士、並大阪醫科大學長同仁會評議員楠本長三郎博士の兩泰斗參列ありしが兩博士共に旅行日程の關係上何れも單獨の行程を取り六月十二日各自北平に集合記念祝賀會に臨まる)

豫定の時刻午後七時三十分同仁會職員一同、親族知友に送

られて東京驛を出發す、夜陰長閑に汽車は淋し過ぎる程廣く氣儘の姿勢に安樂な一夜を過し木曾川の邊りにて睡を覺まし、郷土の風光を慕ひつゝ西下す天氣晴朗。

六月五日、大阪は今日聖上陛下御來阪中の事として市中は國旗球燈を掲げ緑の「アーチ」立ち並んで有らん限りの赤誠を捧げ奉迎に餘念なきを車窓より窺ひつゝ定刻三ノ宮驛にて下車す、神戸市中奉迎準備に活況を呈す。

二、活動寫眞用「フィルム」の携行

今回の北京醫院十五年記念祝賀會に際し中國人士の爲に餘興として活動寫眞用「フィルム」を携行す。「フィルム」は同仁會各醫院の光景並内務省衛生局の好意に依り、特に貸與を受けた花柳病並に「チブス」豫防の三種十卷である。一般營業用活動寫眞「フィルム」の輸出入は思想取締り及び興行物課税等の關係上嚴重なる取締りを要する爲予の携行せる「フィルム」に對しても相當に面倒なる手續を踏みて通關し無税に輸出入を了するを得たり。

三、不安なる天候

正午大阪中央放送局の「ニュース」は天候の悪化を報じ午後二時頃より雨となり次第に風雨強くなり市中には一時電車の立往生を見る、折りから大阪へ聖上陛下奉拜に出掛けた

る群集の晴れの衣裳も濡れねづみとなりて歸る様は氣の毒に見へ、雨は夜に入りて愈々激しく乗船の前夜此天候とは聊か頭痛八巻の態に一夜を過しぬ。

四、瀬戸内海の旅

六月六日未明より雨止みて風収まり市民一齊に奉迎準備に威氣揚る、昨夜來の憂色全く去りて心地よし空には所々に晴間さへ望まれて初夏の日光暑く天候の不安を一掃す旅館を出で、三ノ宮神社に參詣し一路平安を祈り第四突堤に到れば大阪商船長城丸は英姿を横着けて吾等を迎へ船員は出帆の準備に何くれと忙し氣に見ゆ。所定の船室に導かれて旅装を解き同仁會本部に對し先づ以て報告第一信を發す時に正午汽笛高らかに摩耶の連峰に木鏢して黒煙長蛇内海の霧を突いて船體は神戸の埠頭を離る水面鏡の如く須磨や明石の風光を賞でつ、船客一同甲板に集いて日の暮るゝを知らず、内海天然の公園に各自快哉を叫ぶ。

夜に入りては月無く潮聲響きて内海の孤島影暗らく遙に陸上の燈火を望むのみ。

五、門司の半日

六月七日瀬戸の内海に一夜を過ぎて翌午前七時門司港に投錨す、出帆は午後二時の豫定、數時間の滞船を利用して

關門の見物を思ひ立つ、朝食後迎への小蒸汽に便上先づ門司に上陸し町の西方高野山分院へ攀ち昇りて關門一帶の風光を一望に收め門司を見下しつゝ下山關門連絡船に據りて下の關に渡り鎮守龜山八幡宮に詣で旅の平安を禱願し社境の池に棲む無數の大龜に暫し見惚れたり、夫れより壇の浦に安徳天皇を祀れる赤間宮に參拜し折りから來合せたる小學校生徒の遠足團に交りて官司より平家の敗因及其末路に付説明を聴き終つて平家一門の墳墓を巡り更に其歸途春帆樓を訪ひて日清戰爭講和の當時を回想し李鴻章の宿所たりし關龜山引接寺に立ち寄りて當時を偲ぶこと暫し。

時既に正午に近し、急ぎ歸船の途に就く、同港に商船うらる丸碇船す昨日山東方面より入港せりと云ふ同船客中に目下別府に滞在中なる張宗昌氏の部下にして山東陸軍病院長唐斌儒、同醫師孟慶吉、參謀蘇紫良、團長崔樹電、市長祝宏德氏等の諸氏あり、料理人小者等を併せ一行九名門司に上陸別府に向へり。右陸軍病院長唐斌儒氏は往訪の記者に對し次の如く語つたと。

張宗昌將軍は最近病氣に罹つて居らるゝが日本の藥を絶對に服藥せざる爲に支那の妙藥を携へて張御大の病氣を治する爲來朝せり云々と、眞意果して如何

六、北京醫院新任眼科耳鼻喉科醫長乘船

同船にて北京醫院に赴任すべき耳鼻喉科醫長伊積正雄氏神戸より乗り込み又同新任眼科醫長渡邊伊勢雄氏門司より乗船せらる。直に刺を通じて兩醫長と船室に會合せり。伊積醫長一家五名、渡邊醫長一家四名奇偶の同乗を喜び合ひ長城丸船内に同仁會の一行十名意氣大いに掲る亦盛なりと云べし。

七、玄海の一夜

豫定の如く午後二時門司港拔錨一路塘沽に向ふ昨日迄西海一帶に襲來せる颱風の餘波を受け玄海灘には今尙ほ多少の蜿蜒あるも船客一同元氣旺盛である。

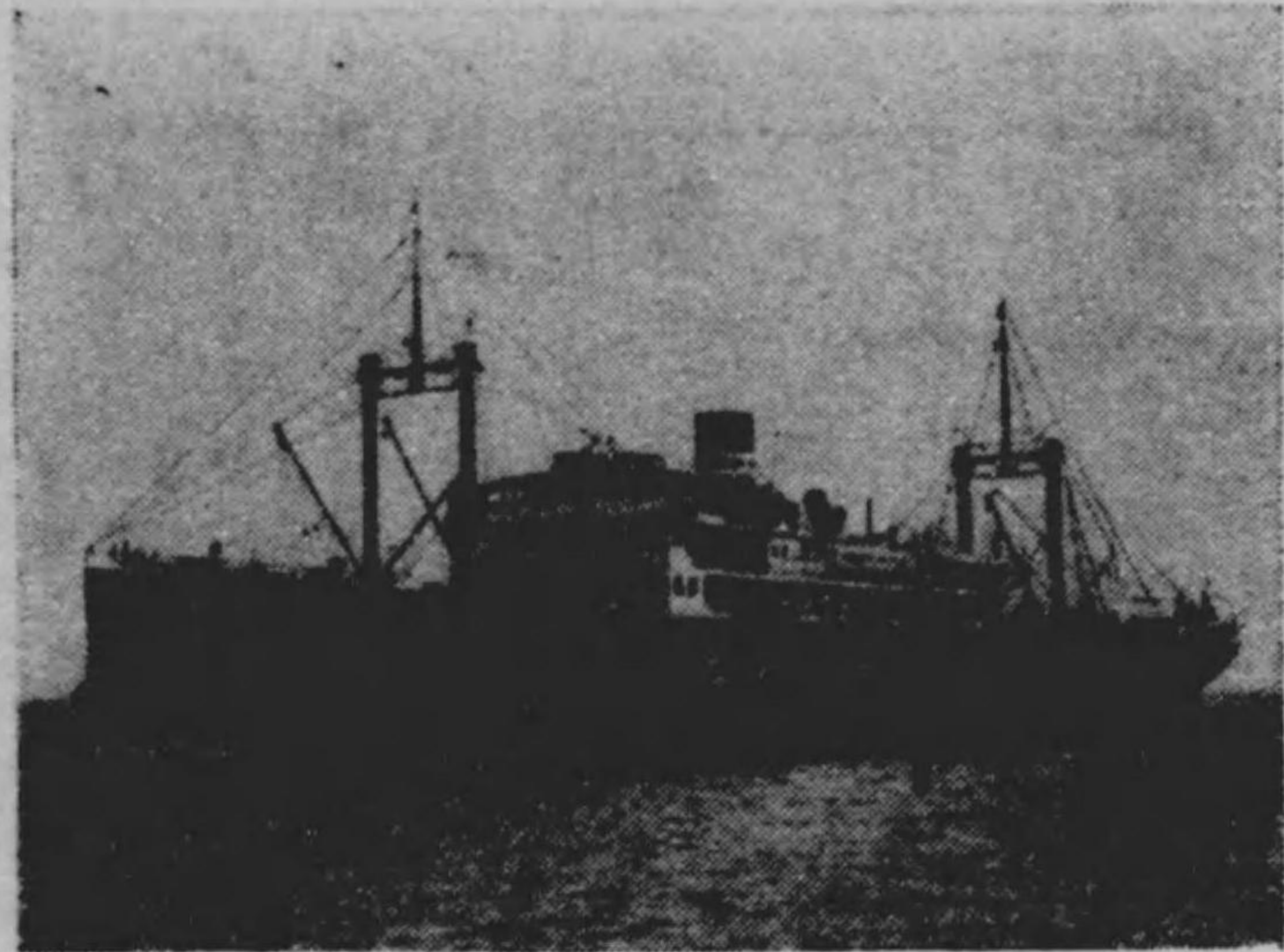
暮れ行く海上の遠く近に見ゆる島々帆船雲繪の如く霧につままれて次第に薄ぼけて行く。今宵は一點の雲だに見ざる玄海晴れである上甲板に佇み涼風に吹かれつゝ星を仰ぐ陸地と違ひ海上には何一つ眼界を遮斷するものなく、満天燦爛として銀砂の如き星群を眺め如何にも清く誠に船旅の一興である。夜陰對島の燈臺を望み長城丸船長藤田勇喜次氏より日露の戰役談を聴く、皇國の興廢此一戰にありとして東郷司令長官奮戰の跡は此邊なりと説明せらる。一同其當時を回想して思はず襟をたゞす。此航海の乗客には軍人

が多い。神戸からは歩兵第三十四聯隊の寺平中尉是が大の支那通人で支那の事象研究の爲派遣され今後の一ケ年を彼の地で自由の姿勢で支那を研究すると云ふ、他の三將校は何れも北支那駐屯軍交代の先發者である。船長藤田氏は過去の三大戰役に陸海軍の御用船長として軍人以上に従軍の經驗ある老船長、在郷の予を加へて今宵の甲板は戰の話に持ち切り實彈の下をくゞつた予の實戰談は青年將校をして傾聴せしめた。

余は日露の戰役に從軍して樺太に出征し凱旋直に臺灣の守備に服すること半歳にして又引き續き朝鮮の地に赴任し茲に九ケ年此間數回玄海の波上を往復した、故に余に取つては今宵の旅は誠に思ひ出深い航海で有る、初めて此海に航海したのは明治三十八年九月で今から丁度二十四ケ年の昔で有る、當時は未だ日露戰爭の際敷設した彼我の水雷が流浪したりして汽船の航海を脅かした時代で有つた、夫れより既に二昔半を経て永い様では有るが又過去を偲びては一夕の短かひ夢である、自身の履歴、今日の境遇、頭髮の白枯れを想ひては二十有星霜は慥かである、同席の青年將校を見渡すと皆自分の弟か子供の様である、然し余の心ばかりは何時迄も是からと計り考へて居るので有る。

八、愛船長城丸

吾等一行の愛船長城丸は大阪商船株式会社の所有船にして二千六百餘噸最新式の機関を装置し速力亦一般の商船を凌駕する船室の裝飾又遺憾なく上甲板内の休憩室は洋風の裡に襖、丸窓等の純和式雜作を加味し爐には古めかしき茶釜の掛けたる等ゆかしく書翰樂器等の備付け又行き届きて見ゆ、特に船長、事務長以下船員の乗客に對する懇切振りは北支航路船中他に比ばなき待遇振りで有るとは塘沽に於ける某官吏の言なりし



も余も又深く是を信じて疑はない、一等船室は一人専有室、二人用(A室)四人用(B室)等に區分せられ上甲板と中甲板は一等船客の遊歩に下甲板は並等船客の使用に供せらる並等船客の船室又結構にして他船の二等室に比適するも唯雜居式なるの

相違あるのみ余は中央部、中甲板に沿ひたる一等A室を與

へられ神戸塘沽間四日の航海をして恙なからしめたる本船に對し滿腔の感謝を捧ぐるものである。尙ほ一つ此航海を愉快ならしめた原因は天候に恵まれたことと有つて藤田船長は食堂で逢ふ度に此度の位平穩な航海も極めて稀有な事であると洩らされた程で有つた、海旅する者が何よりも尤づ欲する事は海上の平穩と云ふ事と有らうと思ふが中々そふうまくは行かぬもので有る、余が郷里の山國に歸ると時々田舎の人々より海旅の話が出で船酔ひせない工夫は何かと訪ねられる、其都度船中では喰べ過ぎぬ事、又胃腸の健全に注意する事、頭痛がしたら寝て居る事等と話すので有るが夫れよりも一番大切な事は船を信する事が最も大切で有る此度の如き船長以下の懇切振りは儘に船客をして一大安心を思はしめて居る即ち船客一同は大船に乗つた心持ちで居れば決して船酔ひはせぬもので有る。

九、海路の旅心地

六月六日、日の出を拜まんとして午前四時半起床先づ狹隘なる船室にて恒例の自強術と洗面朝のお禱りを終るや甲板に昇る細々波に接して棚引く東雲を洩れて赫々たる金輪轉ず海上の夏曙又一段の眺めである、塵一つ含まぬ海面の

清き空氣を腹一杯に呼吸し壯快を覺ゆ、北東一帯に朝鮮半島を望みつゝ船は黃海をさして進む、現役當時九ヶ年の舊郷朝鮮の山峯を眺めては思はず引き寄せらるゝ如き心地する

午後九時頃より威海衛沖近く劉公島を望む、日清戦争の直後予の兄は威海衛守備軍として此島嶼に二ヶ年の守備に

任ぜしが其後十年日露の戦役に從軍して遂に逝きて歸らず今日の音信を送るに術なし島を望みて兄の過去を追憶すること久し。

一一、兄が守備せし劉公島

陸に在りては水を慕ひ水に在りては陸を眺むるは人情の自然ならん海上にありて水より外に見るもの無ければ直に倦きて船室に入るもの多し船室に歸りて沈思すれば先づ同仁會本部は如何に、留守宅の家族や如何に、行く先の北京や如何にと仕掛け煙火の車の如く心、千里を走り盡きぬ思ひを繰り返すものである、夕食後渡邊、伊積兩醫長及家族一同と共に上甲板に語りつゝ日暮れたり。

一〇、黃海の濃霧

六月九日、ポー／＼と八ヶ間敷き汽笛に夢を破られて眼覺め船窓を開けばコハソモ如何に黃海名物の濃霧である午前五時頃より來襲し一時は全く咫尺を辨ぜず船は最徐行しつゝ盛んに汽笛を鳴らし警戒に努むること約二時間午前七

時頃より漸次薄らぎ速力恢復し滿空清朗、左舷遙に山東の一角を望む。

午前九時頃より威海衛沖近く劉公島を望む、日清戦争の直後予の兄は威海衛守備軍として此島嶼に二ヶ年の守備に任ぜしが其後十年日露の戦役に從軍して遂に逝きて歸らず今日の音信を送るに術なし島を望みて兄の過去を追憶すること久し。

一二、直隸海峡と張宗昌將軍

午後一時船は進みて直隸海峡に差しかゝる左舷には蓬萊を遠望しつゝ左長山島、右猴磯島燈臺の中間を抜けて渤海灣に入る廟島列島の山々赤禿にして一本の木なし宛ら澎湖島に行きし時の感あり藤田船長甲板の卓上に地圖を擲けて語らる、過般龍口に上陸して山東を攻略せんとしたる張宗昌は續いて芝罘を占領したるも其後遂に利あらず逃れて今見ゆる長山島の山陰にある廟島に隠れジャンクに便りて旅順又は大連に上陸せんとせしを拒絶せられ已むなく日本へ亡命するの悲運に陥れりと云々、船は勃海灣に入りて再び陸影を望まず。

一三、船中書の會

同乗の中華民國人にして大阪に永住せる綿布の豪商人名を張實と呼ぶ氏は商事の餘暇書を好み阪神地方の業界に名聲ありと聞く藤田船長の依頼に基き船客一同を食堂に會し慰安の書會を始め、各種の書體を欲する儘に其の求めに應じ十數枚を書して船長以下に贈與せり一同觀賞敬意を表す。

一四、船中の新聞

七日門司港を出帆せる本船は八、九兩日の航海中毎日午後二時東京電報通信社の無電による内外著名の『ニュース』を受信し船内印刷所に於て直に印刷に附し船室に配布せらるる政情、國際、支那の動き等手に取る如く大洋上坐ながらにして萬里の時事の報道を知る其速かなる眞に迅雷の如し文化の惠澤崇敬の極である。

一五、小間心のつく『ポイ』さん

予の船室には三好貞吉君と云ふ『ポイ』さんが受持ちで有つた、口數の少ない穩和な人であり小間心のつく親切なポイさんで有る、本船では食事の間に必らず『コーヒ』朝は茶菓が運ばれる折りよく船室に居るときは直に熱い内に頂けるので有るが予は常に甲板で景色を望むか輪を投げるか、『ピンポン』に耽るか時と處構はず遊び廻るが三好君は『コーヒ』の冷へぬ内にと何所迄も探し出して持

つて来る又自分は船室へ歸ると暇さへ有れば『ペン』を採つて通信を書く報告、紀行、朋友への音信と書き亂れ其度毎に船室は紙屑だらけに汚れるが三好君は何時の間にかすつかり掃除して而も嫌やな顔一つ見せない整頓好きな如何にも氣持ちのよい人であつた。

塘沽へ上陸の日は百度に近き暑さで有つたが白藤事務長に連れられて上陸し塘沽驛迄見送りに来てくれた郷里神戸には妻子も有る相な其後各地を巡遊して青島に行つて見ると青島醫院氣附けで留守宅から長女が書面を送り越して居る開いて見ると音信の内に『神戸から名刺差が御送付されて居りますが父さんのお歸國も近いからもう内に留めて置きます』と認めて有る、成る程何處かで名刺差を失つて塘沽へ上陸のとき一寸不自由を感じたが落した處がはつきりしない『サツク』は僅か五十錢そこ／＼の品で中には小出しの名刺が數葉と東京で使ひ残した電車切符が二三枚残つて居る位のもので落しても左程惜しい品物でも無かつた、長女の音信によれば神戸から送つて来たと言ひて有る、富島組回漕店で用便中忘れたか夫れとも三ノ宮で本買つた時に置き忘れたかとも考へた。歸國して見ると三好の『ポイ』さんが船中の置き忘れを拾ふて神戸に歸港後予の留守宅へ

而も膏留郵便にして送つてくれた事が判明し感謝の禮狀を出した次第で有つた。

船室は旅行者の爲には一時の世帯處である『ポイ』は其世帯の總ての世話をしてくれる主婦か家族も同じで有る其取りなしの善しと否とは船客に與ふる安と不安を左右するものである、予は眞に仕合せな航海の旅を續けたことを喜び三好君に對し感謝の念を禁じ得ないので有る。

一六、心をこめた船中の晚餐

明日の上陸を前に今宵の船客は何れも活氣を呈して居る氣早の連中は上陸準備の旅装さへする者もある、本船今宵の食卓には藤田船長、白藤事務長、機關長等高級船員一同が接待席に着き心を込めた献立の數々が運ばれた。

食堂を一瞥すると中央の卓子には藤田船長其兩側が寺平中尉と予が對向して席に着き以下數氏の軍人が並列する、兩側の卓子には白藤事務長と機關長が主人役をつとめ一つは西洋人八名の一卓今一つは中華民國人六人の一卓が見へる、然して左右舷側に近き片隅には角卓が配列せられて家族席がしつらへられ渡邊、伊積兩醫長さん思ひ／＼に夫人お子供方と卓を圍んで見へる。

斯くして白衣の『ポイ』により順序よく運ばれる酒肴

に遺憾なく長途の旅上を慰められ明日を名残りの船客一同和氣霽々裡に最後の晚餐を終つた。

予は本席を利用し渡邊、伊積兩醫長並同家族の方々と共に別卓を圍みて船中に同仁會親睦會を催し談笑數刻將來の祝福を祈つた。

一七、塘沽上陸

六月十日、今日は愈々上陸の日である船客一同期せずして朝早し午前四時既に夜は明け渡り船は白河の河口に進み兩岸に高き突堤あり其上に燈臺を望む、北清事變の當時築設せる砲臺の殘骸も尙ほ今に存して見へる。

白河と云ふから水が白いかと思ふと決して左様ではない赤褐色で粘土の様な泥河である最近迄は四、五千噸の蒸汽船が天津港迄溯航出來たので有つたが奥地洪水の爲河底埋まりて以來船舶の通航路に要する幅員に掘下工事を施し辛ふじて塘沽迄溯航を可能ならしめて居る或は又次の洪水に於て停滯せる泥土を一舉に持ち去り再び天津又はより奥地に迄巨船を通すに至るやも知れず如斯して長年月間に河底の深淺が洪水に支配されて繰り返へさるゝことと思ふ何れにしても現在天津港迄溯航の出來ざるは天津港の貿易と市街の繁榮を阻害すること夥しく業界一般に之が掘下工事の

速進を熱望して居る様である一説に曰く白河には九十九ヶ所の屈曲あり百曲に一曲足らざるより白河と稱すと云々（註記九月北支那二帯に豪雨あり十月には十ヶ年振に我帝國軍艦天津に溯航し居留邦人狂喜せりと聞く）帯幅の様には婉々と細長く見ゆる白河の航路を昇る事約一時間半途中所々に碇泊せる支那汽船の舷側に太い文字で何々號と書してあるのが如何にも目につく、兩岸の耕作地には未明より鋤採る農夫の家族を眺めては我農村の現代青年が朝寝坊を改めて一段の奮起を煩はさねばとの希望も浮む、既にして塘沽に近づけば青物市場に集る群衆のさゝやき車のきしり物賣る商人の叫び聲等何れも支那情緒を味合ふ第一歩である。吾等の乗船長城丸は午前七時塘沽港陸軍運輸部棧橋に横付けとなり吾等を恙なく亞細亞大陸に揚陸することを得せしめた。

船が着くや北京醫院の高木君が領事館員と共に船室に來訪せられて長途の來航を勞らはる。

それより兩氏の努力に依つて北京醫院十五年記念祝賀會に舉行すべき活動寫眞用『フィルム』其他携行貨物の揚陸通關を無事に終了し午前七時より同行の渡邊伊積兩醫長並出迎への高木君と共に船内最後の朝食を採り、白藤事務長

より乗船記念の繪葉書を贈られ、船長以下船員一同甲板に總出感歎なる訣別の言葉を交して長城丸を辭し大陸に第一歩を因す、願れば長城丸は無風の炎天に細き煙を直立し吾等を見送り宛然別れを惜しむに似たり、幸なりや長城丸。

一八、塘沽驛の待合

高木君の案内を唯一の羅針とせる吾等赤毛布の一團は導かるゝが儘に土の輕い道路の兩側に數ある路店を眺め、時節柄端午節句の稷卷團子に蠅の集かれる様を臨みつゝ説明を聞きながら徒歩塘沽停車場に到着す。

いかめしい服装をした警官らしい者が乗客の數より多い程見へる自分等の目からは一向に區別がつかないが高木君が見ると彼れが巡警で彼れが兵隊で是が憲兵で此服装が驛員、あれは税關と一々はつきり説明されたが中々覺へ切れない塘沽驛には極めて不完全ながら一、二等待合室がある、高木君に導かれて中央の卓子を圍む、手にせる半巾で椅子のちりを拂つて腰を下す掛けて見ると少しもベネの働かぬ堅い椅子であるよく見るとベネが働かぬのではなく、ベネが入れてない板の上に直に『レザー』を張つた堅い椅子である之が一、二等室に置いてあるから他は推して知る可しである。

待合室の一隅に賣店がある日本の驛の賣店には書物も新聞も仁丹も菓子も玩具も『タオル』も郵便切手も煙草もと云ふ様に百貨店式であるが此所の賣店は極めて簡單な『コーヒー』屋である其の代りには日本の様に許可を受けた販賣店が規則正しく店を開いて居るのではなく構内の處構はず菓子や『マッチ』、其他雜多なる露店式が僅かつゝの商品を並べて居る、一寸腰を下せば透かさず『ポイ』がやつて來て餘り清潔過ぎない茶器に『コーヒー』を入れて出す、今日の暑さに咽喉は渴を覺へて呑み度いが何んだか氣味悪く手を出し兼ねて居ると高木君頗る無邪氣に卒直に手を出して一口すゝる之を見て安神が出來たら思はず手が出て二口斗り飲むと『ポイ』が直に補充する幾等飲んでもく惜し氣もなくつき足してくれるのは日本よりは餘程氣がきいて居る。

一九、複雑なる貨幣

高木君は『コーヒー』を下に置いて貨幣の話始める、支那に來て當分分らぬのは銀の取り遣りである現銀なれば支那全土共通であるが銀貨には又澤山の質造があるから之を受取るときは一々板の上にも打ちつけて其音響の良し悪しで眞疑を鑑定するので有ると云いつゝ二枚の銀貨を取り

出して卓子に打ちついたり指の上に乗せて貨幣と貨幣をかち合せて見せた、すると『ギーン』と好い響を立てたのである本物ですと鑑定の実験を見せられ渡邊、伊積兩醫長を始め予等も成る程と感心する。

次に紙幣は政府が變り、銀行券は其信用により轉々として其價值に騰落が生ずると云ふ塘沽の如きは日本貨も有り朝鮮銀行券もあり奉天票、天津票、北京票等種々通用して居ることと有るが假へば天津で使へば價值が高く夫れを北平迄持つて行くとズイツと下落する紙幣が有ると云ふ同じ山東省でも濟南票を濟南で使用せば價值を認められ是を青島迄持つて行くと一割位價值が下落すると云ふ尙甚しきは一地限りで他に持ち出しては一切通用せぬ紙幣も有るとこんな例は支那全國到處で行はれてゐるとのことと有る尙ほ此外に金銀の爲替相場と云ふものが有つて日々其騰落が著名の銀行で發表せられて居る是は日本から支那に行つた者支那から日本へ歸る人の特に注意せねばならぬ大切なことである、予が塘沽に上陸した日は金即ち日本貨幣百圓を渡せば銀即ち支那貨幣で百四圓七拾錢位の割合で有つたが予の支那巡遊一ヶ月間は次第に銀が下落して六月下旬青島に行つた頃には金百圓に對して銀が百七圓餘り取れる

様な相場に迄下落し尙ほ益々低落する模様で有つた。

こんな譯で有るから上陸直に複雑なる貨幣の説明をして無經驗な吾等を指導された高木君の實驗談は大いに参考になつた、汽車の切符を買ふにも言語は分らず貨幣の換算法も中々容易で無い之高木君のお世話に成らうと云ふ譯で一行思ひ／＼に日本紙幣を取り出して一切を高木君に一任した、高木君は開札口に行つて一纏めに切符を買つて来て分配してくれた、そして曰く北平迄行く間に車中『ボーイ』の心付けや茶代食事其他の小遣用として少し小銭をお持ちなさい、と云ふて壹元銀貨(日本の壹圓のこと)二枚と銅子兒十文(銅子兒とは日本の銅貨にして明治時代の壹錢と貳錢の中間位の大さに見へる重い粗雑な鑄造貨である、普通一枚は日本の壹錢に相當すべきで有るが現今著しく下落して日本貨拾錢に對し貳拾參、四枚に交換が出来たから一枚は四厘見當である)を渡してくれた、予は高木君検査済の元銀二元と銅子兒十文を蝦蟇口へ入れ様としたが中々這入らないから銅子兒五、六枚をソット服のポケットへ納め銀貨二枚と殘餘の銅子兒を蝦蟇口に收め辛ふじて口を閉ぢて見ると革が張り切つて龜の甲を見る様に錢の型が紋々に現れ膨らんで重い事夥しくポケットに入るれば服がだれる、ズ

ポンの隠しに仕舞へば股太が嫌にふくれて歩み悪くポケットに觸ると銅子兒は響の訝へない音でガチャ／＼する汽車に乗る迄の間ほと／＼持て餘した、と同時に日本の貨幣が支那貨幣に比べて如何に便利で有るかを痛切に感じた。

支那旅行者の注意すべきは身に澤山の金錢を携行せぬ様に殊に汽車中靴等に金錢其他大切な品を入れて据へ置くことは一層危険で有る、重くとも金錢は矢張り胴に着けそして滞在地では其地で所要の分のみ兩替へして使ふこと、し其の他は日本貨で正金銀行の信用状として天津、北平、漢口、上海等の如き必要の土地で隨時請取れる様にして行く事が必要である、今回の予の旅行は幸ひに天津、濟南、青島等、共に日貨の通用する地で此點は便利で有つたが北平滞在中は若干の小錢も持たされた。嫌な話で有るが掏摸と泥坊は昔から唐も大和も共通と見へる、是等の不逞漢が幾多善良なる旅行者を悩ますこと其數を知らない日本人に聞くと支那の旅行は少しも油斷が出来ないと丸で泥棒の巢窟へでも這入る様に云い支那人の日本觀光團は別府で時計を掏られたと云ふて日本人をいやに攻撃してお互に他國人を貶み合ふので有るが何とかして之を撲滅する良薬がほしいものである。

二〇、暑い北支那

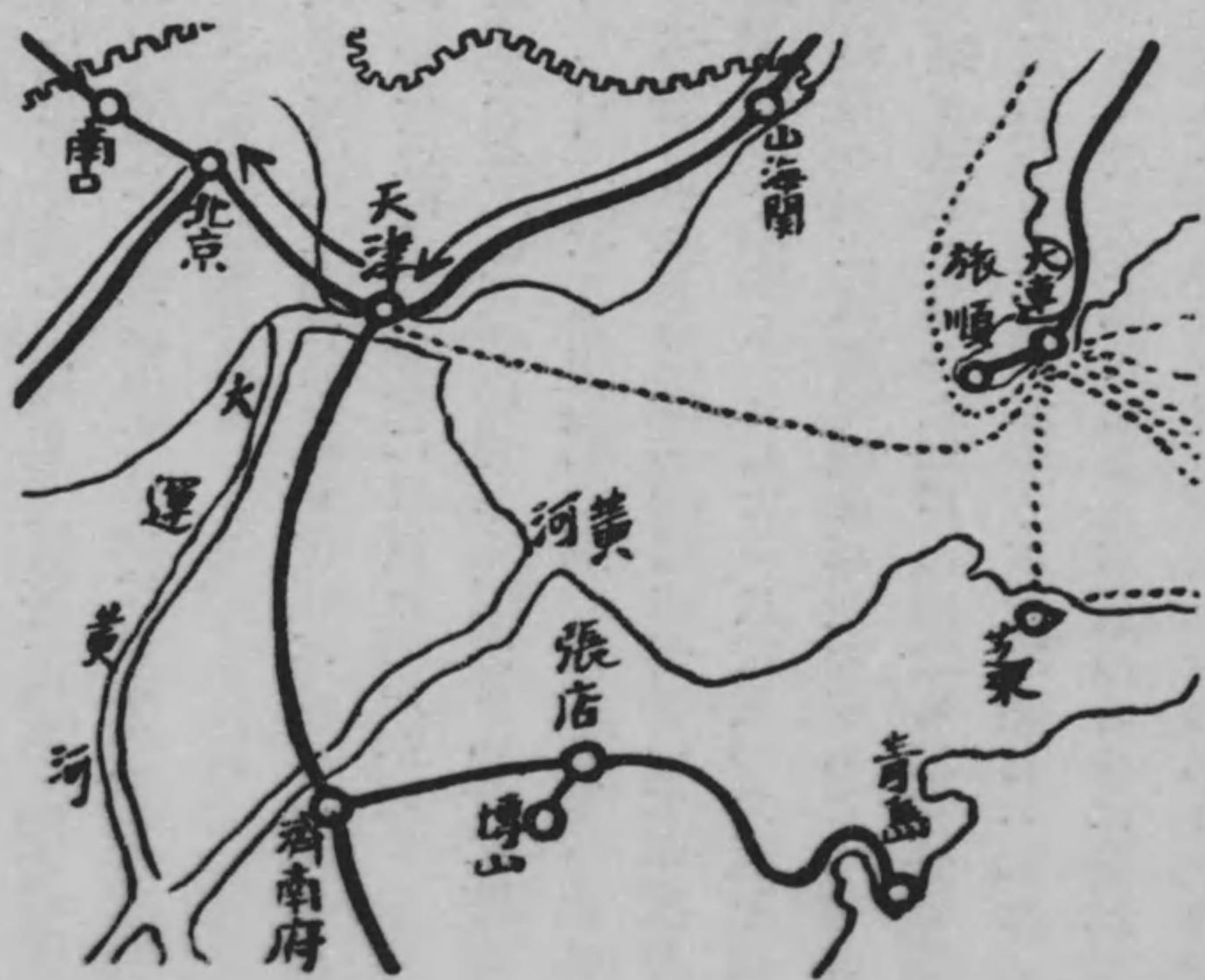
塘沽の埠頭で聞くと最近では今日が一番涼しいと云ふて居るが予等は初夏の日本から殊に涼しい中春長閑な海上の旅を續けて今日此所に上陸するや直に一躍九十度を越す炎熱には頗る面喰つた、名物の蠅につゝかれつゝ汽車を待つ間の苦しさ容易でない、高木君が種々の話を持ち出す間は左程にも感じないが風もなく木もない炎天の中に『ボカ』と立つて見ると實に暑い、神戸から同船して來た米國紳士の一家族が有つた永く大阪に居住して日本語をよくする立派な服装で人目を引く此待合室に休ませるは氣の毒に見へた如何にも不潔と云ひ度い様な表情をして時々集かる蠅を追ひ拂ひつゝ辛抱して居る。

二一、北京入り

漸く汽車の來る知らせの鈴が鳴ると高木君がもう程なく参りますと云ふ間もなく汽笛の音が聞へて灰色をした客車と貨物との混合列車が『ホーム』へすべる様に這入つて停車した、急いで携行品を積まんとせば手廻りの靴丈はよろしいが梱包物や箱物は不可ないと有つて兩醫長の引越荷物の大半と活動用フィルム繪畫書等十數個を積み残し汽車はゴロン／＼動き始めた、萬事は車中の相談として長城丸船長

以下の見送りに感謝しつゝ北平に向つて發車した。

貨物の大半を積み残されたので高木君始め吾れ／＼一團餘りの意外に膽をつぶし不平と不安で落付もならずお互につぶやいて居る間に高木君が車掌と永い間交渉して來た結果今晚七時北平に着する汽車に積み込む豫定で有るから心配するなどの仰せが分り一同愁眉を閉く、約一時間餘りにして天津に着し神戸以來船旅の友であつた數氏の軍人米人中國人等も大方下車し入り代つて未知の乗客が這入



つて来た、高木君も天津で下車し直に塘沽と連絡して積み残し貨物の先途を見届け尙ほ天津に残つて金杉、楠本兩博士を迎へて北平に歸ると云ふ豫定。

轉じて車窓を望めば千畝蜿々として限りなく青麥風に撫でられて揺らぐ中に所々「あかしや」の繁る並木を通り過ぐると又極めて低い屋根の支那人部落の數々を通過し中にも楊村、軍糧城、天津、豊臺等は最も大なる驛で有つた、今京奉線の一部塘沽、北平間僅かに六時間の鐵路旅行中の感想を一言せんに始めて見る支那大陸の此廣さ、荒れ果た耕作地に憐れに見ゆる農作物、可憐なる土人の部落、不完全なる貨車と停車場の破損せる様等我日本内地の旅と對照するときは隣邦啓發の爲吾等邦人の進む可き前途の愈々多々あるを感じざるを得ない、沿道は久しく早魃の爲車窓より、土砂塵埃立ち込みて車内の不潔甚しく不快を感ず。

驚いたのは車中の檢札である最初に先づ車掌が檢札して通る其の後からいかめしい服装に帶刀せる檢札官が巡查並着剣せる軍人三、四人を引き連れて僅か數時間の間に二回に亘り巡檢されたのは如何にも異様に感じた。

正午近くになると料理の臭ひ芬々として食堂と云はず客室と云はず食卓は開かれて中々盛んなもので有つた。

二、支那語の必要

今日塘沽に上陸して僅かに半日の汽車旅行により今北平の車站に下車した計りである、天津迄は高木君に誘導されて何の不自由も感ぜざりし一行も同氏が天津に下車して以來全く盲者の杖を取られしに似て甚だ心淋しく感じた、殊に北平停車場に着して出迎へ者を探す迄の苦心と行違ひは想像以上で有つた、同文同種の支那と日本、筆談容易かと思ふと仲々そうでない、予は今回の旅行に際し若し支那語に通じ居たりしならんには事業上の宣傳に自己の見學に絶好の機會幾度有りしかを知らず其都度無語の不覺を痛嘆せし次第で有つた、國を接し同種同文の我々日本人は一般に支那語を研究し支那の國情に精通することは吾人國民の義務で有り特に中華民國に於て事業を經營する者にとりては其必要なるものである、予は八十の手習ひ乍ら支那語修得の機會を得老後の餘生をも何とかして支那に盡す處あり度いと念するものである。

我々が時々外國人に面接する時一語でも日本語で話かけて來る人に逢へば既に其の人情に濃かな親しみを増すもので有る、故伊藤博文公が外國の使節を出迎へた時握手しつ

汽車は廣軌文に日本の客室よりは餘程廣く殊に一等室は乗客が卓子を前に相向ひ合ふて腰を下す様に出來て讀書するにも食事其他の操作にも至極便なる點は日本の汽車の遙に及ばざる設備である。

未だ日本の汽車には窓に網戸を取り付けた装置は見ないが此所支那の汽車には障子戸の外に日覆と網戸が取りつけて有る、支那は日本と違ひ夏季は著しく蠅が多い故に防蠅装置網で有るらしい、處が折角此網で蠅の侵入を防ぎた装置は結構で有るが乗客が乗る都度其身體に留まつて車室に運ばれる蠅が中々僅少でなく、そして一旦這入つた蠅を追ひ出す事は網戸が有る丈に困難で蠅は車室を彼ちこち逃げ感ふて甚だ五月蠅く感じた其の上網戸の掃除も不充分で塵埃の爲に網目の塞がつて居る處が多く不潔に感じられた。

車外の風景は平々坦々殺風景なると不意の暑さに勞れて伊積、渡邊兩氏のお子さん方のだゞこねにすつかり女中や親達を困らせつゝ汽車は次第に北平に近く宏大なる城門城壁が昔ながらの姿勢其儘に一同の眼前に轉回し始めソリヤ來たと威風凜凜もなく北平の城外に沿ふて走ること暫らく午後三時を過ぐる頃一同無事北平車站(停車場)に下車し生島事務長以下各員の出迎ひを受け北京醫院に安着した。

極めてお粗末なる外國語で一口の挨拶を述べられた處使節は直に伊藤公に山大的信用と懐しみを以て接し偉大なる世界的大政治家であると賞讃したとの事である、故に我々が片言半分の支那語でも少し操つる様になれば中華民國人との親しきは濃厚なもので有ることは論の限りでないと思ふ、理解なき親善は友人の名を知らぬにも劣るもので有る、凡そ國交の第一歩は一語の言葉より始まるもので有つて然して此一語は國民と國民の社交に其端を發して國交の基礎を爲すもので有るから吾人は常に此點に留意して語學の練熟に意を注がねばならないと思料する。

『註記支那の熟語』

同じ漢字を用ゆる支那と日本がなぞ熟語用字に斯くも相違があるかと不審を抱かせる一例を擧げて見ると

(一) 醫者が往診に行くことを支那では「出馬」チニマと書き

(二) 官吏が辭職することを「脱鞋」トシエと云い

(三) 藝者屋を支那では「書房」シユフワンと書く

以上の外枚舉に遠なく筆談の困難推して知るべしで有る夫れよりは先づ會話に向つて進むことを近路だと思ふ。

三、北京醫院

北京醫院創立滿十五年紀念祝賀會の記録は予の紀行とは之を切り放して別に編纂することし此所には之を省略するも、本會が事業を支那本土に普及する爲最初の醫院として建設せられたるものが今日の如く盛大に創立滿十五年の紀念祝典を舉行せるに際し本院の爲に特に一言せざるを得なす。

イ、北京醫院の位置と略歴

同仁會北京醫院は其の位置北平市内東單牌樓三條胡同にありて、中華民國人は一般に『同仁醫院』と俗稱し、『東單牌樓同仁醫院』と云へば此廣ろい北平市中如何なる隅々の人力車夫、人夫等に至る迄此名を知らぬ者はない迄に普及せられて居るのは大いに我が意を強からしめたと同時に此經營を發端建設せられたる本會の幹部並開設以來今日に到る歴代の院長以下各職員の御奮闘の賜と深く感謝する次第である。

然して本院の建設は古く明治四十一年頃より其計畫ありて愈々起工せられたるは大正元年十月そして開院は同元年一月一日で有る、故に昭和三年末を以て正に創立滿十五年の歴史を積み今回の祝賀會を舉行せられたものである。茲に本會が北京醫院と共に永久に忘却することの出來ざ

る一事がある、それは他に非らず北京醫院を開院せる大正三年は長くも朝廷より本會に對し久通宮邦彦王殿下を本會總裁に御允諾の御沙汰を拜したる年にして本會の歴史中おそらく前代未聞の盛事を續出せし年なることを願はしむるものである、蓋し本會の事業が遠く明治二十七年頃より提唱せられて亞細亞醫會の團結となり同仁會となつて朝鮮の各道に病院を設け一方には支那、暹羅の各地へ醫師を派遣する等其の施設が人類相愛の大義的精神の事業として永き間努力の結晶が當年偶々支那本土に一大病院の建設と成つて現れ、九重の奥深きに置かせられても篤く御嘉賞あらせられ曩には御内帑金の御下賜あり今又總裁宮の御允諾の御沙汰に及びしものと感激措く能はざる次第である。

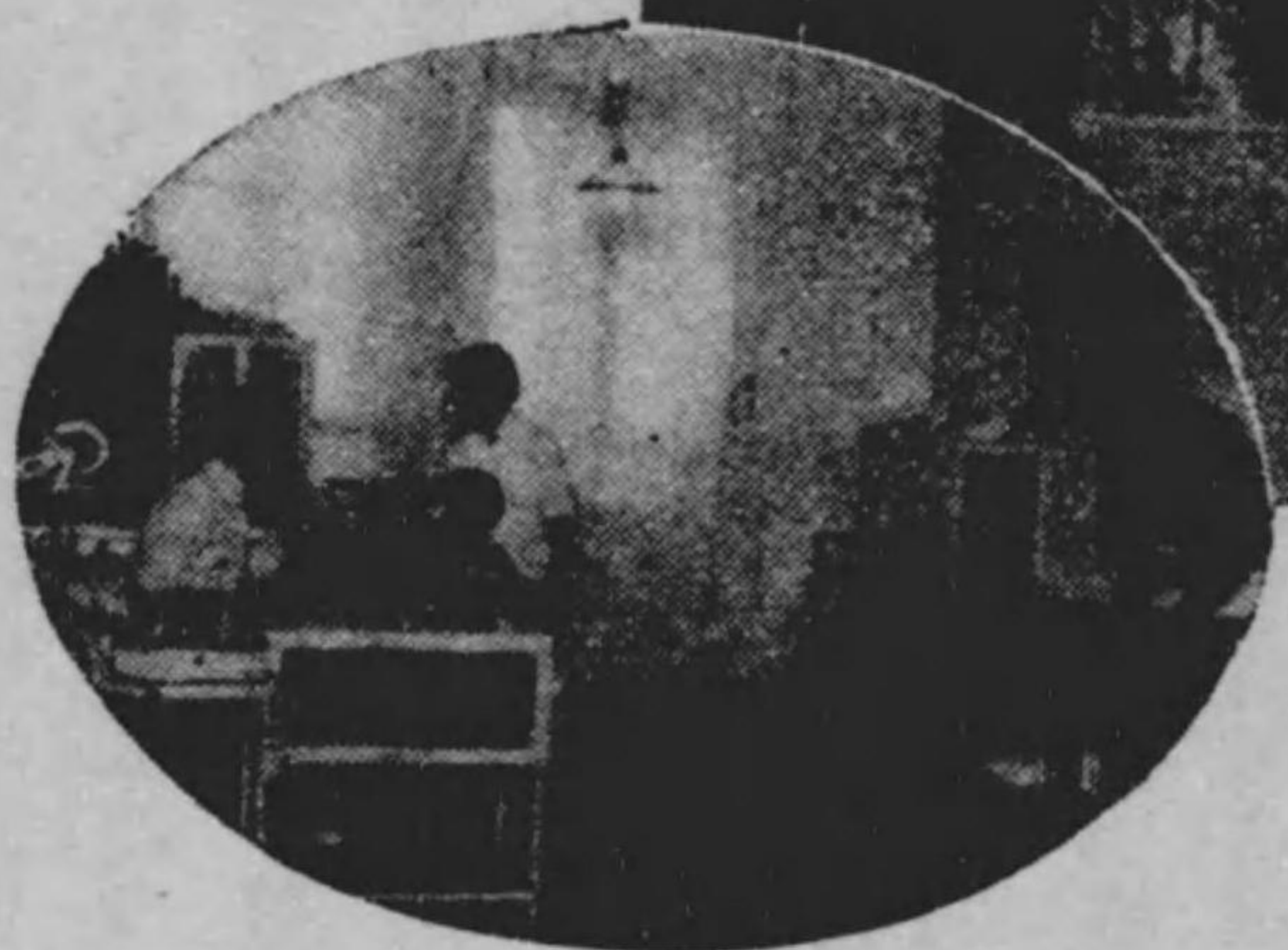
ロ、本院の規模と將來

北平には我同仁會醫院と其の事業精神を同する幾多文明諸外國の病院がある、即ち我が同仁會北京醫院に隣接して米國の富豪『ロックフェラー』財團の建設に係る廣大なる病院ありて外觀恰も支那宮殿を望むの感あらしめ、又佛蘭病院、獨逸病院、英、米兩國の耶穌教病院等共に外觀、内容其の設備に於て何れも我が同仁會醫院の施設を遙に凌駕し居る物である、之に反し我が北京醫院は僅々一千餘坪の建築



同仁會北京醫院

【上正門・下眼科】



にして八棟の病舎を包容するに過ぎざる病院なりと雖も前述せる如く創立後正に十五ヶ年の星霜を閲し此間に於ける患者の延總數實に五十一萬三千九百二十五人に達し是を一日平均とすれば創立以來毎日約百五、六十人の患者を手にする成績にして亦盛なりと云ふ可きである斯くして今や北支一帶我同仁會北京醫院の事業を認め遠く蒙古熱河の地方より態々往診を本院に乞ひ來れるの實況にありて其の

規模設備に於て未だ充分ならざる感あるも一般中華民國社會の信用は日に増し敦厚を加へ來り喜ぶ可き現象である。

支那某紳士の言を聞くに『北平には諸外國人の經營に係る屈指の大病院數多あるも日本人醫師は診斷に治療に總て患者に對し特に懇切にして精神的なる態度は全く日本人獨特の美點である云々』之は恐らく日方醫術を享けて蘇生せる中華民國人患者の偽らざる眞理を代表せる公明なる見解と信じて誤りなきものと深く是を確信するものである、予は茲に北京醫院將來の發展を策する爲設備上にも今一段の努力を主張するものである、即ち如何に精神的診療が日本人の美德なりとの定評あるにもせよ、現在北京醫院の程度にありては支那の貴顯紳士を迎ふるには聊か物足らざる感を抱かしむるものではあるまいか。

予は決して我同仁會醫院を貶むものにあらず初めて北京醫院を巡視せる際には何等の意見をも抱かさざりしが北平滯在中諸外國の病院を參觀し又在留邦人の希望と意見を耳にせるとき我同仁會醫院の設備に對し今一段の増備を必要なりと感ずるものである。

北京醫院西村副院長曰く『某日支那の貴顯來診を乞ふ、檢するに其の容態安からず入院を推めたるに其の從者來り

て病室を檢分し設備の面はしからざるを歎き遺憾の意を表しつゝ去つて獨逸病院に入院せりと」是れに類似の先例は決して再度に止まらずと云ふ。

一説に曰く「北京醫院は隣接して宏大なる「ロツクフェラー」財團の病院ありて如何に本院の増備に投資するも到底彼れに追従を許さず云々」と、然し予の見解としては、それは蓋し皮相の觀察にして賛し難し、外觀の装美素より欲せざるは非らざるも抑も醫院充實の要は其の内部的設備の完成と良醫の充足にあることを最大要件と信するものである、本院今日の隆昌は醫院外觀の美なるが爲か然らず將亦内部の設備完きが故か左にも非らず偏に院長以下各員努力の賜熱誠仁術の結晶にして謂ゆる良醫の充足を立證せるものである、本院にして内部の設備今一層完備するを得ば鬼に鐵棒の例に洩れずより以上の成績を得らるゝことを信じて疑はざるものである。

本院現在の病床は概して中等程度の設備なるを以て經費並地域之を許さば上流社會人士の收容に適する特等病床二三を設備し以て苟くも列國監視の北平に有る我が國醫界の代表醫院たるの名譽を汚さざる程度の充足を圖ると共に一方下層社會患者の爲に四等以下の病床を施設するの急務な

るを感ずる次第である。

ハ、中國人雇傭者の多き北京醫院

本會經營の同仁會醫院は何れも中華民國患者の收容を本旨とするも取り分け北京醫院は他の同仁會醫院に見る能はざる多くの中國人を雇傭して居り、又患者の殆んど全部が中國人である。即ち中國人女醫あり藥局員あり、又頗る毛斷の中國人看護婦數名あり炊事は全然支那人の手に委ね見るからに中國人本意の病院らしき感じを深からしめ日支親善味濃厚なるを思はしめたるは愉快なりし、特に日本人看護婦が何れも中國人看護婦と共同其の業務に服し常に誘導しつゝある模様を視るにつけ海外にある我が同胞諸士が終始隣邦親善の精神を失はず和氣藹々水魚の交り結び實社會の外交者として幾多國交の爲に裨益を與へつゝあるを思ひ尊敬の念を禁ずるを得ない。

ニ、醫院の組織も共和的に

右は卑近なる雇傭者の一例に過ぎざるも我が同仁會將來の經營をして又斯くの如く日、華兩國人共同の事業として樹立することの最も理想とするものには非らざるか、予の聞く處によれば「ロツクフェラー」財團協和醫院其の他諸外國人が中華民國に於て經營せる此種事業中には幾多の中

國人名望家をも其幹部に包擁し居るもの尠からずと云ふ、本會醫院設立の精神よりするも中國人をして本事業を他山の石的に傍觀せしめず、我が物と思へば輕るし笠の雪てふ見知より此經營をして共同の事業たらしめ中國人をして眞の努力を惜しまざらん迄に漸次改良することの得策なるを想ふと同時に先づ支那中央要路をして本會の事業に眞の理解を得せしむることを最大急務なりと信するが故に、今日北京醫院を視るに當り一言所感を附する次第である。

四、日本人生活の一端

イ、日華折衷の家屋生活

六月十日北京醫院に到着したのは夕刻で有つた飯島院長西村副院長に挨拶を終つて其日は暮れた旅装を解く間もなく其夜醫院事務長生島氏及び前山氏の案内で東單牌樓八寶胡同の石田と云ふ食道樂の銘打つた純日本料理の晚餐會に招かれた。

初めて歩む北平の市街西も東も全く分らない導かるゝが儘に生島氏の後からついて行く、街並は支那建築の支那人街風俗に於て言語に於て見るもの聞くもの純然たる支那街であつて此の中に日本料理屋が有るなどは一寸想像のつか

ぬ程珍らしく思はれた、道行く話の内にも生島氏の服装はと見ると純白麻の支那服（長衣とも又褂とも云ふ想で有る）を涼し相に着流し一寸小長い扇子を持ち夏帽を冠つて黒靴を穿ち一寸前に屈みおひげの兩端僅に下に向けた處どう見ても日本人とは見へない自分は密かに斯ふ思ふた「マ一能ふ北京化したものだ」と支那に病院を建設して中、日親善を叫ぶ我同仁會醫院に如斯き支那化した事務長の有る事を心強ふ思ふと同時に此邊一帶に見ゆる支那人中にも相當に支那服を着たる日本人が居るかも知れないと喜んだ。

中央に電車が通じ兩側に車道と人道と備はつた廣ろい通りを斜めに踏み切つて暫らく行くと左へ折れて細い露路へ一寸這入る、生島君と云ふ見ると此邊の道路の土色と同じ灰鼠色に塗られた高い土壁の中に僅か六尺程の入口がある、「こんな小さい料理屋かな」と一人合點で門をくゞると煉瓦疊の土間を通つて又一つ筋り門がある其の中に庭木や石燈籠が有つてそこから入口になる昇ると障子、襖も屏風も立ち掛物、床置等一應備はつて居り隣接して幾つかの部屋も有る様だ、外觀は極めて單調、殺風景な支那式の壁垣で有るが内部意外に廣く純日本式で有り出て來る人、出す料理其器物迄が全然日本式で、而も食道樂の名に反か

ぬ御馳走「ドス」や「サカイ」の言葉詠りの美妓送飛び出したには珍らしく感じさせた近頃日本では和洋折衷の流行で有るが此所は又日華折衷の生活である。

是は獨り石田ばかりではない北平滞在中飯島院長邸の晩餐に招かれた時も建物の構造に付ては石田の時と同様に感じた、又小菅博士の宅を見ても原田醫師の住居も矢張り同じ様である、一方日本商人の多くは全然支那式家屋に店舗を營んで居ること勿論であるが大方の住居が入口は極めて質素で小規模で中に這入ると庭もあり池水もあるなど案外に奥深く規模太くゆつたりとして居るものが多い東京邊で今時出来る文化住宅には先づ門柱、玄関、應接、屋根、外圍ひ等家屋の外観容姿の整頓にのみ腐心して肝心の居間臺所は極めて貧弱にし不自由を忍んで暮さねばならぬ様な建物が多いに比べて遙に奥ゆかしく又實生活に適する處が多いと思はれる、支那で話を聞くと餘りに玄關を装ひ派手な住宅を構へ様ものならば税金攻めに遇ふ略奪される等總ての方面から壓迫を受けるが爲に外観は出来る限り目立たざる様に構へたものと云ふ、故に官公衙、寺院等公共建築物は外観壯麗を極め住宅建築は其反對である。

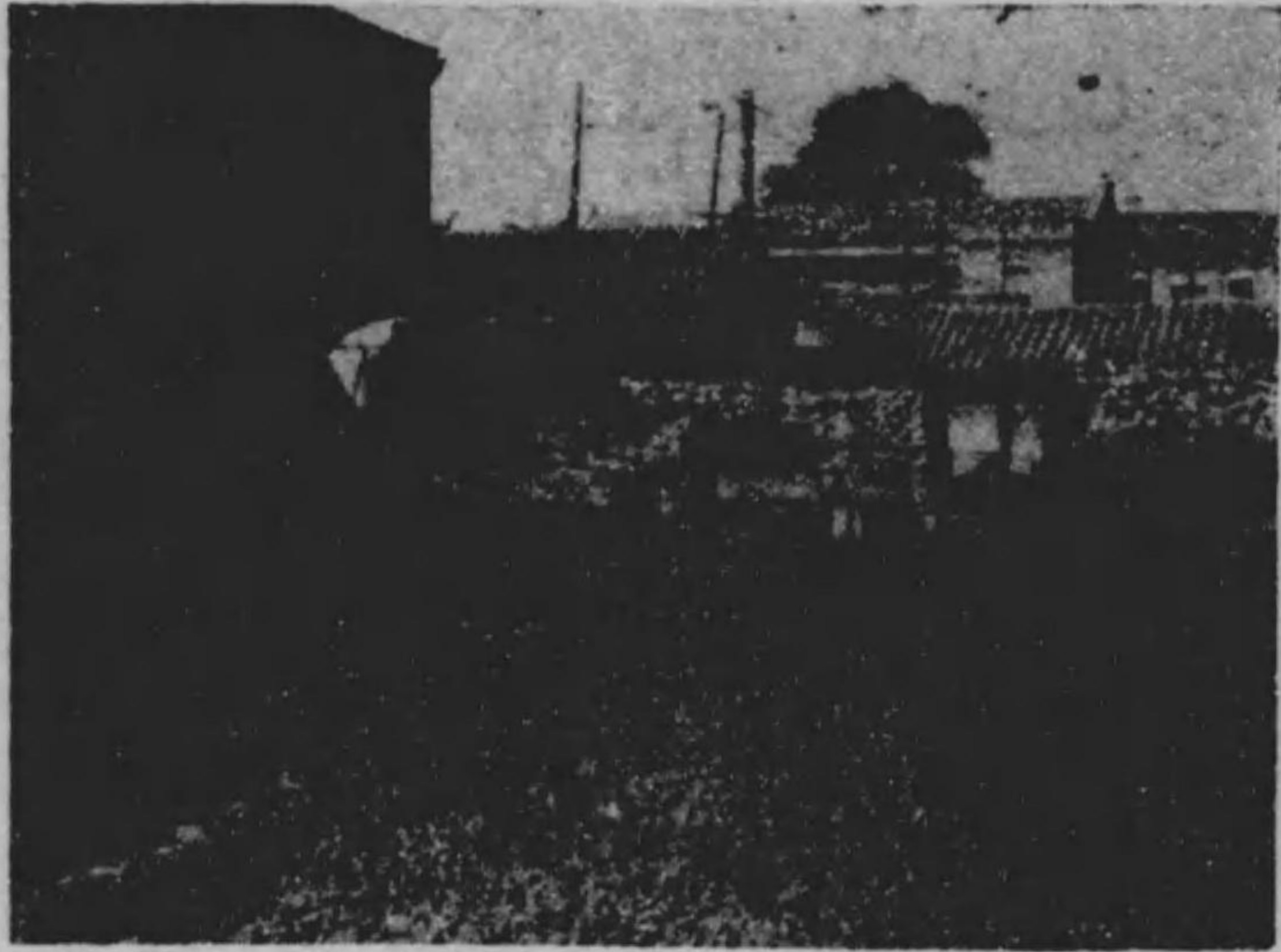
茲に一つ北平住民の家庭に福音とも云ふ可きは此北平地

方一帯が天惠的燃料に恵まれて居る一事にして廣漠たる原野の中央に位置する大都會北平の家庭が而も彼の烈火庖厨の油料理に親しむ支那人の爲には誠に相應しい燃料で有る支那では是を煤珠兒と云ふて居る、即ち無煙粉炭に灰土を混じて煉り固めた「タドン」にして原料の無煙粉炭は山西省の奥地より運ばれ來り北平の灰色土を混じて製造する加工燃料で有つて百斤一俵は僅々六〇仙内外であるから東京の家庭が有煙炭百斤又は堅木炭五貫一俵に金二圓内外を要するに比べては無煙にして火力強く而も火持ち長く樹木燃料及瓦斯の設備に乏しき北平にありては眞に天惠的燃料と云ふべきで中國人は素より外國人も一般に唯一の經濟的燃料として愛用して居る。

口、支那服用の獎勵

如斯日本人の多くは支那建築の家屋に日本趣味を施して日華折衷生活をして居るが殖民地生活としては又當然の結果である。然して此間に日常の食料器物、家具、衣類等の生活必需品も自然と支那化して生島君の服装の如く總てがよく似合ふ様になる。

北京醫院では飯島院長御夫婦が率先して支那服を纏はれる、從つて醫院職員中にも支那服用者が相當多いのを見て



煤球兒(メチル)の粉炭石(「ドマ」)の製遺
材料を日光で乾かしつゝ支那の燃料屋

非常に愉快で有つた斯く有つてこそ初めて打ち解けたる日支親善である郷に入つては郷に従へと言ふ言葉が有るが全く同化するにはそこ迄行かねば本當でない又服装其ものに付て見るも支那服は和服に比べて決して

劣つて居ない、否寧ろ高尚で優美で而も文化的で有ると思ふ點が多い、長衣を着流して「スラーツ」とした姿之を脱いた時の輕快な容、又女子の着る色取り／＼の長衣、スカートの上に衣を輕く着て洋傘をさした姿等眞について行き度い程よく見へる、街路で遇々見る日本婦人がお尻の太い和服の上に太鼓結びが一寸低い處にだれ、角袖で肩を張つた姿は丸で木の葉で拵へた人形の様で支那風俗と比較するとき和服其のものゝ形には餘り感服が出来ないものもある

而し是は見様により程度により一概には断定は出来ざるも此地にある日本人が和服、洋服、支那服の三重生活をして居ることは事實である故に經濟上からも支那同化の方面からも大いに注意を要すべきことであると思ふ、支那に居ても幾分でも支那語が出来ると外出に支那服を纏ふて出掛けることは大いに便利な場合があると云ふ。

支那服を纏ふて一寸會話でも出来る者は先づ第一に社交上の便利は素より商人にしても運轉手、人力車夫、苦力にしても一見して既に此地の通人なりとして馬鹿値を呼ばず見掛け取りをせぬのみか或る程度迄は讓歩して來ることが多い故に行く先により其用件により目的に應ずる服装を選擇むことが又必要であるとの事有る。

語學の必要に付ては既に述べた通りで有るが各醫院に奉職せらるゝ諸氏が何れも支那語に巧みなるには感服の外はない、予が完く語に通じない爲に何聞いても豪らく見へるかも知れぬが、然し何を依頼しても大抵なことは通譯の目的を果すのが豪い此土地に居れば自然其の必要に迫られ又夫れが爲に研究もした事有らうが何れも一通りの事は不自由ない様に見受けられる其の國の語に通ずる事は自己が處世上の實であり又社交上の義務でもあり武器でも有る。

ハ、最近の日本人

張作霖氏大元帥として此地北平に政廟を置き大國の覇權を握つて天下を治した太平の時代には日本人も餘程多く又北京の景氣も頗る活況を呈して居つたとの事であるが昨年張氏の都落ち以來引續く政變と政府の南京に移轉と共に一時は火の消へたるに均しく日本人も續々と退去して今は僅に二千人足らずであると云ふ、然れども中國人間に於てはお互に我北平の維持と向上を念とする愛市觀念の喚起より漸次景氣の光曙にあり日本人亦漸次歸來復業するもの多きに到りつゝありと云ふも政變以前の景氣に比してはお話にならぬ衰退であり殊に日本人には外國人相手を本位に發展を策する者少なく邦人共喰ひなるが故に一層悲觀の狀態であると云ふ。

共喰ひと云ふ事は共同生活と云ふ方面に解釋すれば誠に結構なことであるが海外に住しては日本人同志の共喰ひでは到底殖民生活の成功は望まれない、凡そ出稼ぎには一時的と永久的との二あつて歐米人や中華民國人等は其後者に屬して居る、假へ一時的にもせよ一旦自己の郷土を去れば再び此所には歸らぬものと覺悟して去る故に出稼地が即ち未來墳墓の地で有るから其地の人情に染み土着人と親み交

し結婚もすれば國籍人種等一向に問題にしない、處が日本人は歳の若い間に一稼ぎして一と金着握つたら郷土に歸つて早く樂隱居して等と若い内から隱居氣分を夢見て居る、郷土を慕ふは日本人の一美點であることは儲であるが、外國に在る間は其地土着人を中心を措いて其地の生活に馴致しなければ日本人の海外發展は困難で有ると思ふ、紙面の都合上尙ほ卷末に譲りて述ぶる處あらんとす。

五、北平の見物

予は北平に到着して以來北京醫院創立滿十五年記念祝賀會(十四日より十六日迄の豫定)を前に控へて其の準備に忙しく、而も祝賀會中と雖第一日の十四日を除きては平常の通り診察の休みもなく北京醫院の多忙さは思ひやられた然して予は祝賀會を終るや事務の打合せもあり餘暇を得て少しは見物もして歸り度し、天津居留民團よりは衛生活動寫眞の撮影を依頼し來る等餘り永く北平の滞在を許さず十九日には直ぐ北平を出發することに豫定を決した、之が爲に北平滞在滿八日の間毎日何となしに用件が出来して落ちついた見物日と云ふものは殆んど豫定することは出来なかつたが着平の挨拶廻り、驛の送迎、ホテル間の往復、祝賀

會、講演會、中山公園の衛生展覽會等走り廻る爲に自然と思はずも見物が出来る又其間チヨイ／＼用辨を整へ途寄り的に見物を済ました箇所も可成り多い其の外小閑を割き目標を定めて自動車飛ばし名所の見物を試みた所もあつた故に極めて断片的では有るが以下予の見たる北平に付て聊か所感を試みんとするものである。

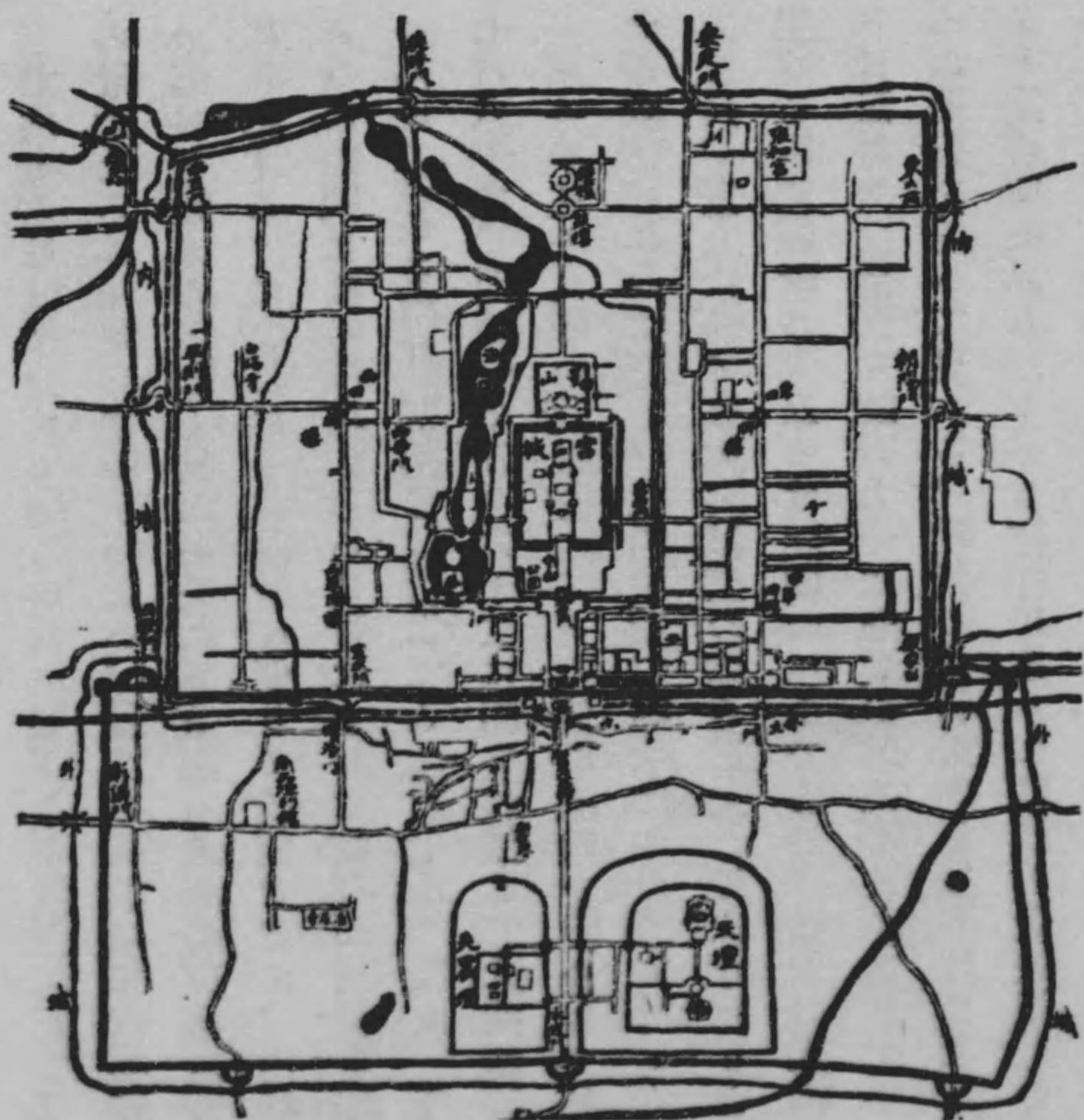
(一) 北京城

予等少年時代學校の教科書に於て支那史を學び「北京は一つに順天府とも云ふ」等と教はりし事を微かに記憶せしが今此地に來つて幼時の記憶を喚起すること多く愉快である、茲に北平の紀行を書する前文として北平城を大觀的に紹介し續いて見物の順序に従い逐次感想を述べて見よう。

(二) 北平の名

つい最近迄此地を北京と稱し昨年六月大元帥張作霖氏南方軍に追はれて奉天に落ち蔣介石氏南北を統一して南京政府を樹立し北京を改めて北平と改稱せしことは極めて耳新しきことである。然して此北平と云ふ名稱は初めての名稱かと調べて見ると決してそうでなく曾ては明の洪武初年北平府と云ふたことがある、それから永樂年間に都を此地に移して順天府と云い、其の後京城を築きて北京城と別稱し

北京城略圖



内城ノ周長四十海里
城壁ノ高サ三丈六尺五寸
城壁ノ厚サ六丈
城壁ノ上ノ厚サ五丈
内城ノ九門アリ
内城ノ長サ
南北二面各二千二百三十丈
東西長サ一千七百八十丈
城壁ノ餘長一萬二千三百八十丈
全城長二千八百八

1 園子、孔子廟
2 文天祥廟
3 龍圖寺
4 日本及各國公使館
5 北平警察署
6 北平監獄、市街大刑場
7 中興二少大砲廠
8 同仁會北京醫院

清朝の初めより北京と稱したものが前記今回の政變によりて再び北平の舊稱を附するに到つたのである。如斯き先例は古く歴史を辿つて見ると唐堯の時代より幽都、幽州、燕國、燕京、燕山府等と王變ある毎に繰り返して今日に到つたもので今の北平別に珍らしいものではない、日本でも東京



北平城内の殿盛を誇る東四牌路

を元江戸と稱へた如く地名變更の例は幾多有るけれども北京の如く改名頻繁なる歴史を持つた處は一す他に類例は少なからうと思ふ。

(三) 北平内城

そこで今の北平城は前頁略圖の如き輪郭を成して居る。而して現在の城郭は明の永樂十五年より十八年迄四ヶ年餘を要して築き上げた大工

事で内城と外城に分れて居るが共に堅固なる城壁にして其の壯大なるに一驚せざるを得ない、僅少の日數にては其隅々迄足を運ぶの暇なく城内中央にある高所北海の白塔(後に詳記する)によじ昇り双眼鏡に便りて遠望せるに、内城々壁の四隅には各隅櫓がある史實によりて城壁の規模を記さんに、其長さ南北の二面は共に二千二百三十丈、東面一千七百八十丈、西面一千五百六十丈に圍まれ然して此城壁に一萬一千三十八個の銃眼と二千八百八個の砲眼を開き以て外敵の攻防に具へて有る、更に城壁の厚味は地上面に於て六丈二尺、壁上に於て五丈、城壁の高さ三丈五尺五寸有りと記さる實に規模の大なるは想像の以上である。城壁の周圍には護城河(濠渠)を繞らし今は蓮葉の繁茂にとざされて一つの風致をそへて見へる、現代の飛行武器を以て臨めば素より論の價値なしとするも往時にありては蓋し金城鐵壁の名に反かざるもので有る、然しながら此金城鐵壁も諸外國との交通、時代の變遷は永く太平の夢の儘に過ぐるを許さず清の光緒二十六年(明治三十三年)例の義和團事件の變に乗じて米國及獨逸が城内正陽門及び崇文門の近傍二ヶ所に砲臺を建設し官殿は殆んど敵國砲臺の間に介在せるの感有らしめたと云ふ、獨逸砲臺の跡は先年歐洲大戰の際支那



北平支間を飾る正陽門の壯觀と城壁の一部

も獨逸に宣戰を布告し戰勝の結果今は支那の戰勝記念塔に塗り代へられて居るのは一寸利用が面白い。

北平城内は宮殿を中心として東部の大街を東單牌樓(同仁會北京醫院此地域にあり)及東四牌樓とし西の大街は西單牌樓及西四牌樓と稱へ北部には安定門

大街、東直門大街等特に盛の市街がある、是等の大街街に圍繞せられて其の中央に黃瓦の大瓦高屋を連ねたる宮殿巍然として屹立す、其の結構に於て形に於て日本の宮城とは違つて居るが大街街の中央に包まれ濠渠を圍らして一角を爲せる容姿は日本の宮殿と其の位置に於て同じである。

(四) 北平外城

外城は内城の建築に後ること百三十年明の嘉靖三十二年(我文明廿二年)の築城で有ると云ふ、當時の計畫は内

城の外圍を更に圍繞する謂ゆる外城の大計畫に出でたるものなりしが國費の出所なく遂に南面の一帶を築城して止みたりとは何所迄も支那式一流である、其規模南面の長さ二千四百四十丈東面一千八百五十丈、西面一千九百十丈高さ二十二丈、城壁の厚味地平面に於て二丈壁上に於て一丈四尺ありと云ふ、往時内城は皇城を中心として、王府、官廳等を置き商業に重きを置かざりしに反し外城内は専ら各地よりの入商民の爲に開放せる北京城の商業區とも云ふ可き地域で有つて現在に於ても前門大街、崇文門大街、順治



北平市中を通るす嫁入行列

門大街等其の著名なる街路である。

東京の銀座通りとも云ふ可き大柵欄街の美装を凝らせる大商店、名優梅蘭芳の常劇場、支那一流の名妓を誇る南北の粹を集めたる花柳界、美術、骨董、茶館飯館、皆内城の南部より外城の中央に亘つて集中されて居る。

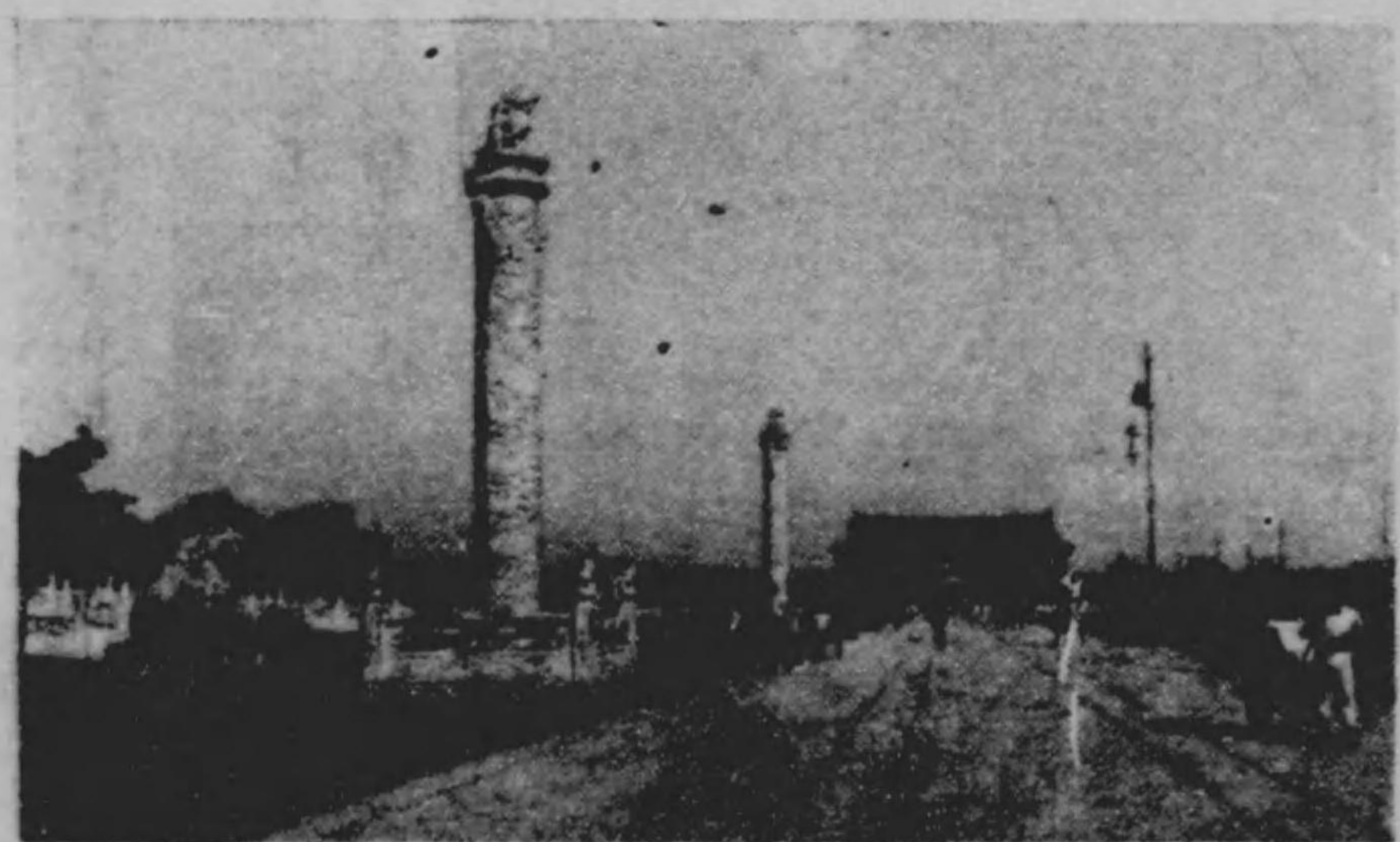
北京東停車場（東車站京奉線の起點）及北京西停車場（京漢線の起點）共に正陽門前外城の北端にあり、現今は城壁の一部を撤廢し城の内外街路縦横に交通自在となり一見して内城、外城の見解を見ず流石に不夜城の盛況を極めて居る。

（五）宮殿參觀

イ、宏大なる其規模

六月十一日今日は端午の節句と云ふので醫院は恒例に依つて一般に診療を休止したが創立十五年記念祝賀會準備の爲に勤めて居る人もある、生島事務長曰く、北平に來て宮殿の壯大なるを見ずんば何ぞ天子の尊きを知らんやと有るか、其の大體だけでも案内せようと言ふ、現代の中國人は天子の尊きを知る者果して幾何あるかは知らないが北平隨一の名稱古蹟として政府の保護下に而も是を特別圍牆内に置き歴史的寶物を安置して之が保全を完からしめんとしつゝ、

あるは儘に往時を
偲び天子の尊きを
知るもので有ると
も思はれる。扱て
醫院を出て街路に
端午節句の稷卷團
子を賣る店等を眺
めつゝ生島氏に従
い東華門（宮殿の
東門）より入つて
巍然たる大厦高樓
の數々を左右に眺
め大小幾多の門を
潜つた、細い説明
には苦しむが其の



北平宮殿天安門とその前面の廣場

規模の大、其の建築の壯此二つで盡きる初めて見る者此壯大に一驚せざるは蓋し有るまい更には是を正面から望めば又一層の宏大さを知る、即ち最南端は今の北平停車場の位置に始まり是より北へ幾つかの大樓門を経て宮殿に達するの、有る正副正陽門、中華門此三大門は現今市中に屹立して

縱横車馬の行通自在である。第三の天安門に到つて參觀券を求めて入殿すると、端門、午門、承運門等の數門を潜つて殿内の廣場に達する太和殿前に立つて前庭を見渡し視線の達せざるに其の廣ろきを感じ、殿庭に安置せる唐銅の獅子、水鉢等一見小なるの感あるも其の傍らに立てば予の身長に比較して數倍ありしに一驚す、夫より體元殿、建極殿、乾清殿、充泰殿、坤寧宮等と手記しつゝ巡視したが其の結構實に輪奐の美を極めて居る、高い樓門に昇つて生島氏の説明を聴く、宮殿は一名紫禁城と稱し北平城の約四分の一の地域を占有し東西南北に四大門が有る先づ東は今入門した東華門で南は午門が是に數へられ西は西華門、北にあるを神武門と云い之を紫禁城の四門と稱へて居ると。



北平宮殿内殿太子殿前庭

宮殿の建築物を微細に見るときは何らの精工と云ふ可

き處なく支那式一流の塗り立て裝飾で有るが廣ろく見渡したる時に於て規模の大なる一事は宮殿の誇りとすべき處にして世智辛らき現代人の到底企て及ばざる宏大なる設計である。

ロ、屋根瓦の色々

北平の名所を見物すると特に珍らしく感ずるのは屋根瓦の色である、建物の構造、門の形、彫刻、裝飾等は何處を見ても略ぼ類似して居るが獨り屋根瓦の色丈は種々相違して居る、今見る宮殿の屋根は見渡す限り總て黃瓦である、南方遙かの天壇を望めば紫瓦で有り北海其他には青瓦を用ひたる處も甚だ多い。然して王政當時民間には色瓦を許さず爲に市街は總て黒灰色（日本瓦と同じ）である、宮城並皇室關係及皇室の尊崇せる寺院等に黃瓦を用ひたる其由來を辿ると種々なる謂れがある之は『漢代五行の學說』を採用したもので有ると云ふ、話は大層難かしく成つて來たが即ち支那では昔から東を青、西を白、南を赤、北を黒、其中央を黃と稱へたるに始まり是を五行と云ひ、君主は天命を享け萬民を治むるが爲天下の中央に在るが故に黃（王）なりとして黄色を尙び宮殿の門牆を黄色に染め屋根は黃瓦を葺き、黃紙を用ひ黃帶を纏ひそして民間には黄色を用ゆる

ことを嚴禁したそうである。宮殿黄瓦の由来如斯と聞く。

ハ、寶物

宮殿内熱河、奉天兩離宮の古貴物陳列場に導かれて康熙乾隆全盛時代の寶物並寶の限りを盡せし陶器、珊瑚、瑪瑙青玉、翡翠等の寶石を用ひて作れる造花、盆栽、家具、繪畫、屏風、扁額等眞に華麗目を奪はるゝもの多きも時間の都合上惜しくも素通りのに一巡して退殿せしが目移りして餘りに深き記憶を存しない、然しながら當時の威力と財力と贅澤とを物語ると共に東洋古美術の粹を蒐集せる點に於て學者諸氏の研究上好資料たるもの多かるべきを深く信じて疑はない。

(六) 中山公園

宮殿の參觀に勞れて中山公園に到り休憩す、中山公園は最近迄中央公園と稱へしも故人孫文の號を取つて中山公園と改稱せりと云ふ、天安門の西側に有つて宮殿より程近し民國四年公園地として開放せし以來運動場、餐館、茶館、球房等の遊戯娛樂機關若干備り居るも未だ公園としては物足らざる感じで有る。

イ、公理戰勝記念門

特に予等の頭に残つて居る北清事變當時の記念物を見

た、公理戰勝記念門が是である。記念門は元東單牌樓より

東四牌樓に到る中間に在つて謝罪門と稱したものであると聞く、謝罪門とは義和團事變に清國官兵が獨逸公使フォンケットレル氏を殺害したる事件の顛末が清國政府より獨逸に謝罪の意を表することゝなり條約に基いて遭難の位置に建設した謝罪の記念碑が即ち之である。

然るに其の後歐洲大戰が勃發して民國七年十一月には獨逸が協商國に屈服し休戰條約の飛報が北京に入るや北京駐屯の佛蘭兵が歡喜熱狂の餘り此門の一部分を破壊し更に其翌日は英、佛、米各國の官民によつて破壊が加へられた支那も當時歐洲戰爭の參戰國で有つたが爲に此謝罪門を中央公園今の中山公園に移して今度は謝罪門を却つて戰勝記念門に塗り代へ原形の儘保存する事になつたと云ふ歴史の的記念物を見暫し當時の面影を偲ぶので有つた。

ロ、茶館と其廣い休憩所

記念碑前を過ぎて牡丹園や動物舎其他二、三を巡つて老柏蒼蒼たる廣場の休憩所に出た一望すれば無數の卓子(通路の兩側に四、五百も有り想に見へる)を白金布で覆い之に藤張の安樂椅子が二脚又は四脚づゝ配置せられて遠くよりは是を望めば恰も白蓮の座敷である其の間をテラホラと服裝



中山公園の下の納涼大茶店

の色取り々々なる男女の遊客が出入りして悠々涼味に浸つて見へる様は日本では勿論見ることの出来る情景で有る、予も又生島氏と共に其一人となつて木蔭の椅子に腰を下し、『ポロ』の運ぶ熱い『タオル』で先づ手を拭ひ茶を進められて南瓜の種を口にしつゝ反り返つて暫し大國人を氣取つて見た茶の説明を聞けば日本の玉露の如きもので有ると云ふ注文の仕様に依つては幾等でも茶の種類を代へて持つて来る、そして其の茶の程度に應ずる茶代をとる様になつて居る處は日本とは少し違つて居る。

日本の掛茶屋で出す茶は一つのお愛想で有つて義禮的のもので有るから其の茶の良否は大して店の評判に影響はないが、此所の茶館は茶を賣るのが目的で有るから評判の

よい茶を出して提供することに苦心して居ると云ふ事である。

此見霞む如き庭園の椅子席へお客が腰を下すと遙か遠方の茶館に見張りをして居る『ポロ』が隙かさすやつて来る、予の目からは此椅子席に境界なく一連の席に見へるが彼等茶館には各其の持分が有つて夫れ々々お客の接待に於て居る、椅子席の廣い割合には茶館の数は少ない様に感じたが夫れでも十數軒は有つたかと思ふ、是は日本の公園に於ける出茶屋式とは違つて純支那式にして永久の建築物であり經營者は此所に永住して居る様で有る。

遊客は單に茶や、サイダー位で歸る者と飯館へ昇り込んで食事をするもの等も有ると云ふ、生島氏曰く晝間は餘り人出を見ないが夕景から夜にかけて此廣い椅子席が殆んど満員になる、以前好景氣時代には此椅子席が今の數倍もあり盛んなもので有つたが過般張作霖の都落ち政府の南京移轉後著しく淋れ切つて遊客も僅少になつたと北平の不景氣を聞かされたが夫れにしても東京上野公園の出茶屋の赤毛布縁臺に比べては其の設備に於て遙に『モダン』であり廣い事に於て先づ北京の名物として屈指のもので有ると感じた。

ハ、孫文の祭場

休憩の後歸途中山孫文氏の祭場を見て生島氏の説明を聴く民國三民主義の立役者孫文氏病没後北京郊外西山の碧雲寺に安置せしを本年五月南京に移送埋棺すべく此の間北平に於て祭典を舉行せし所なりと、孫文死後の餘光眞に神の如しである。

(七) 建物及路傍の宣傳

今日の見物に於て時節柄特に記憶に印せるものは中華民國人の宣傳事業である、初めて支那を見た予等には中國人の思想、日本人に對する感情等如何にも險惡な様に感ぜられてならない、這般支那の南北を通じて八ヶ間敷く喧傳された反日會の宣傳は今尙ほ多數残つて居る巍然たる宮殿外の正陽門を仰ぐと一字の直徑約廿五尺餘も有らうと見らるゝ太文字を以て右から左へ「打倒日本帝國主義」と門の上壁一杯に掲げて有る然るに先般日支の諸懸案漸次解決して反日取締り嚴重となり爲に此文字も撤廢せよと迫られた、處が宣傳者等は宣傳を行ふを以て職業とせるが故に一時に全部を撤廢せば宣傳料の收入に影響すると有つて先づ「日本」の二字を撤退し殘餘は毎月二字つゝ撤退することに契約が成立したと云ふ滑稽談を聞いたが予の滞在中は「打倒〇〇

帝國主義」と殘されて有つた、眞に笑止の至りである。

如斯宣傳なるものが一つの請負であり又宣傳屋と稱する一つの職業家の爲す仕事で有るとすれば種々の宣傳強ち怖るゝに足らない事であると思ふ、宣傳を書いて掲ぐることを職業とする者に取つては商業上の看板書きと同一である、予は北平滞在中各所の見物に於て樓門、橋梁、其の他の貼紙に「打倒帝國主義」なる文字を屢々目撃して心持ちよくは感じないが一方支那人が宣傳文通り吾れ／＼に對抗して來るかと思ふと決してそうではない。市中を見物しても、商店を覗いても、靴を買つても何等不快の念を與へざるのみか頗る懇切な應對振りである予は其日の午后前山氏及び若井氏等と共に北平西停車場「カフェー」(京漢線車站)に休憩して飲食を取つた前述せる正陽門上「打倒〇〇帝國主義」の大掲示に近接せる此「カフェー」に腰を下し此太文字を眺めつゝ飲食するので有つた若し此大宣傳が強く排日思想を煽動するものならば予等は到底此邊りで安閑として「カフェー」處ではない筈であるに中國人も又頗る無頓着で最と丁寧な接待振りであり反日風等何所を吹いて居るやらサツパリ知るに由もなかつた。

又最近支那の將軍馮玉祥氏が外遊するとやら之を止め

たとやら南京政府との間にいさくさの世評有る折柄俄に反馮玉祥運動熾烈となり市内は元より郊外滿壽山から西山到る處此惡宣傳文を見た即ち「打倒國賊馮玉祥」、又は「打倒反覆無常的馮玉祥」等の貼紙で満たされて人目を引いた、而して此宣傳振りの徹底的なるには驚くの外はない、然し此の宣傳なるものが何程の効果を齎らし得るやは疑問であるが若し此等宣傳にして國家の爲眞に善良なる宣傳に此徹底を期し得らるゝならば國の發展向上に目覺しき効驗あるべきにと痛歎せざるを得ない。

(八) 日本公使館

と其附近

六月十二日予は今回同仁會北京醫院へ新任の渡邊眼科、伊積耳鼻咽喉科の兩醫長と共に市内各所に着平挨拶の爲馬養君を東道として廻つた、先づ日本公使館北平守備隊警察署を

訪問すべく各國公使館區域を一巡したれば記憶の儘を此所に列記す。

北平内城南端崇文門と正陽門との中間に大厦高樓軒を並べて儼然歐米様式の一都市を爲すの觀ある一帯の地域が即ち各國公使館街(前掲北京略圖「ニ」の位置)である、日本公使館は此區域内交民巷にありて形勝の位置を占め英國公使館と相對し露國、米國、和蘭の公使館に夫れ／＼近接し、其背面通りには、佛國、伊太利其他の各公使館がある。

日本公使館を訪へば芳澤公使は南京よりの歸途にあり一兩日中には北平來着の豫定なりと、馬養氏より館員を紹介され邸内を參觀して辭去す日本公使館に南隣して日本兵營あり俗に北平守備隊と稱す、數日前神戸より同船したる將校ありて面談せり、日本兵營の地域内は明朝時代より舊事府のありし處にして營内には今尙ほ幾多の史料を保存し居ると聞く、夫より正金銀行、郵便局、警察署等を廻りて名刺を置く。抑も／＼現在の各國公使館地域たる東交民巷一帯の地は肅親王府、及び清朝時代には樞要なる官署を此所に置き四百餘州の政令皆此所に於て企畫せられしが各國公使館地域の此所に指定せらるゝや他に轉じて此地を開放せられたるものなり、然して此區域は純然たる各國共同居留

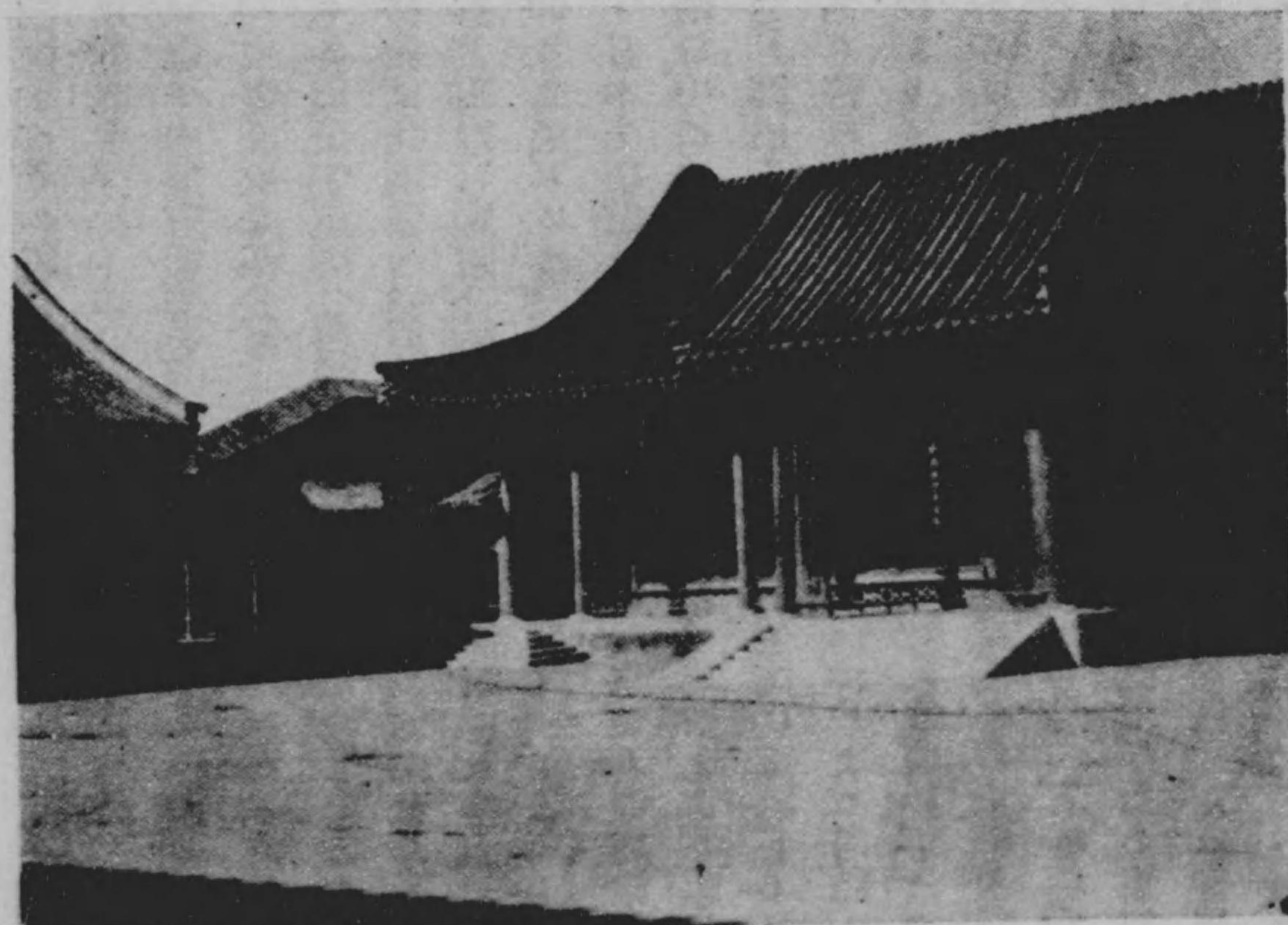


北平日本公使館

地にして條約上支那人は一切居住を許さず軍隊の護衛は勿論警察の巡邏等も列國の擔任する處となり全く別世界の感を抱く、區域内を一巡し異人種が異様の服装を爲せる世界の各國の軍隊を比觀し得たるは有益なる見學なりし、炎暑の折り柄ら米國軍兵營にては今水泳練習中にして數多の軍人が水泳着輕るく『プール』に出入せる様を見受け營内諸設備の充足せるに驚歎す。

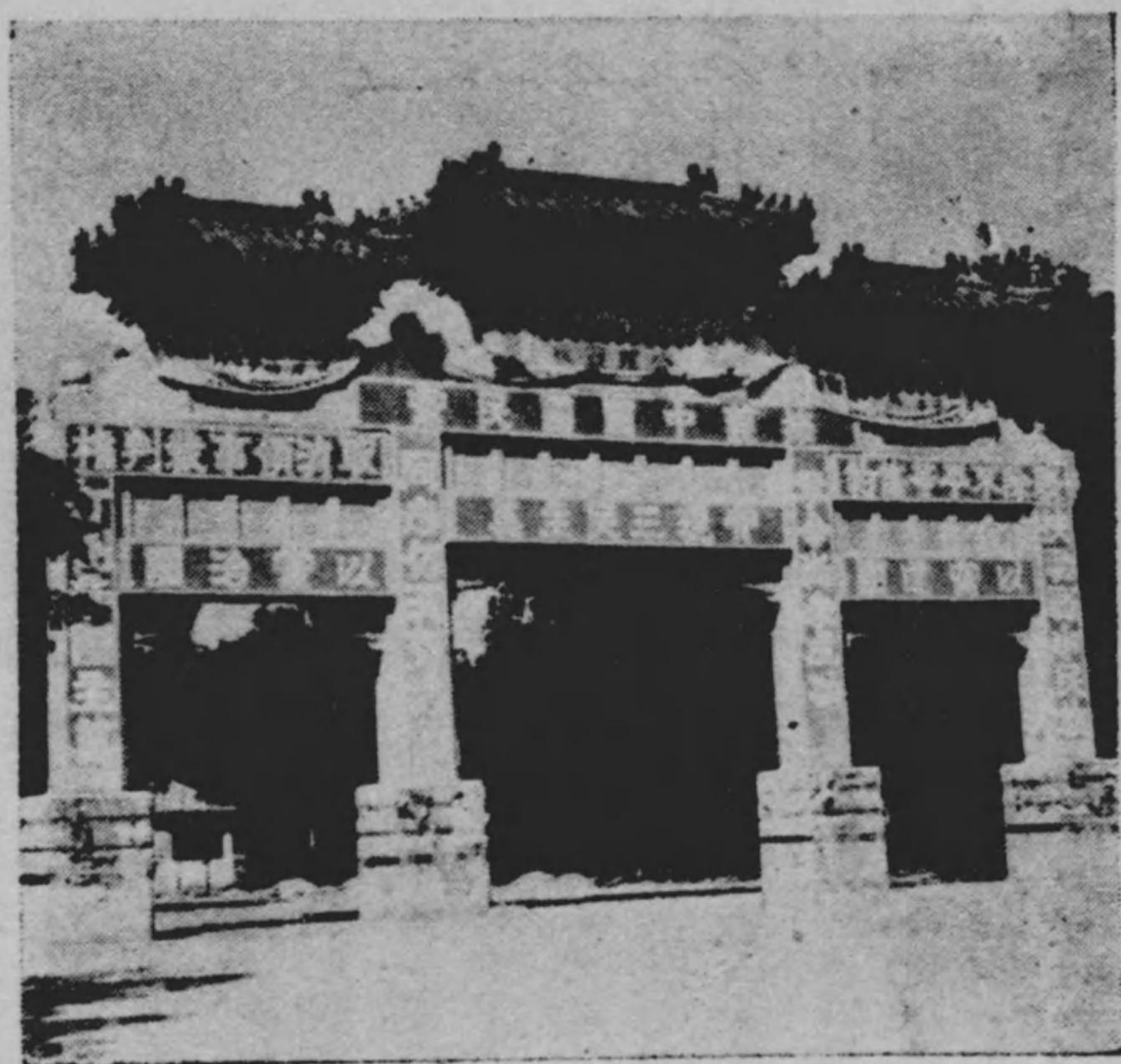
序ながら書物により各國公使館設置に關する歴史を略述せんに康熙年間露國が貿易事務官を北京に派遣し東江米巷に俄羅斯を築きしを以て外國人の北京駐紮の始めとす降つて咸豐十一年英、佛聯合軍の北京侵入後通商條約を締結し英佛より公使を派遣し更に江米巷親王府の一部を租借して公使館を設置せり是を公使館設置の始めとす續いて米、露兩國も通商條約を結び其他の諸國亦支那と條約を締結し漸次公使館を設くるに到れりと其年次左の如し。

同治二年	和蘭	同治三年	西、牙
同治四年	白耳義	同治五年	伊太利
同治十年	日本	光緒六年	獨逸
光緒二十四年	澳太利		



堂仁懷の海北平の發を令政に州餘百四

獨逸は歐洲大戰に支那が參戰以來引き上げて今は之を置かず露國公使館も今は閉鎖し居れり。



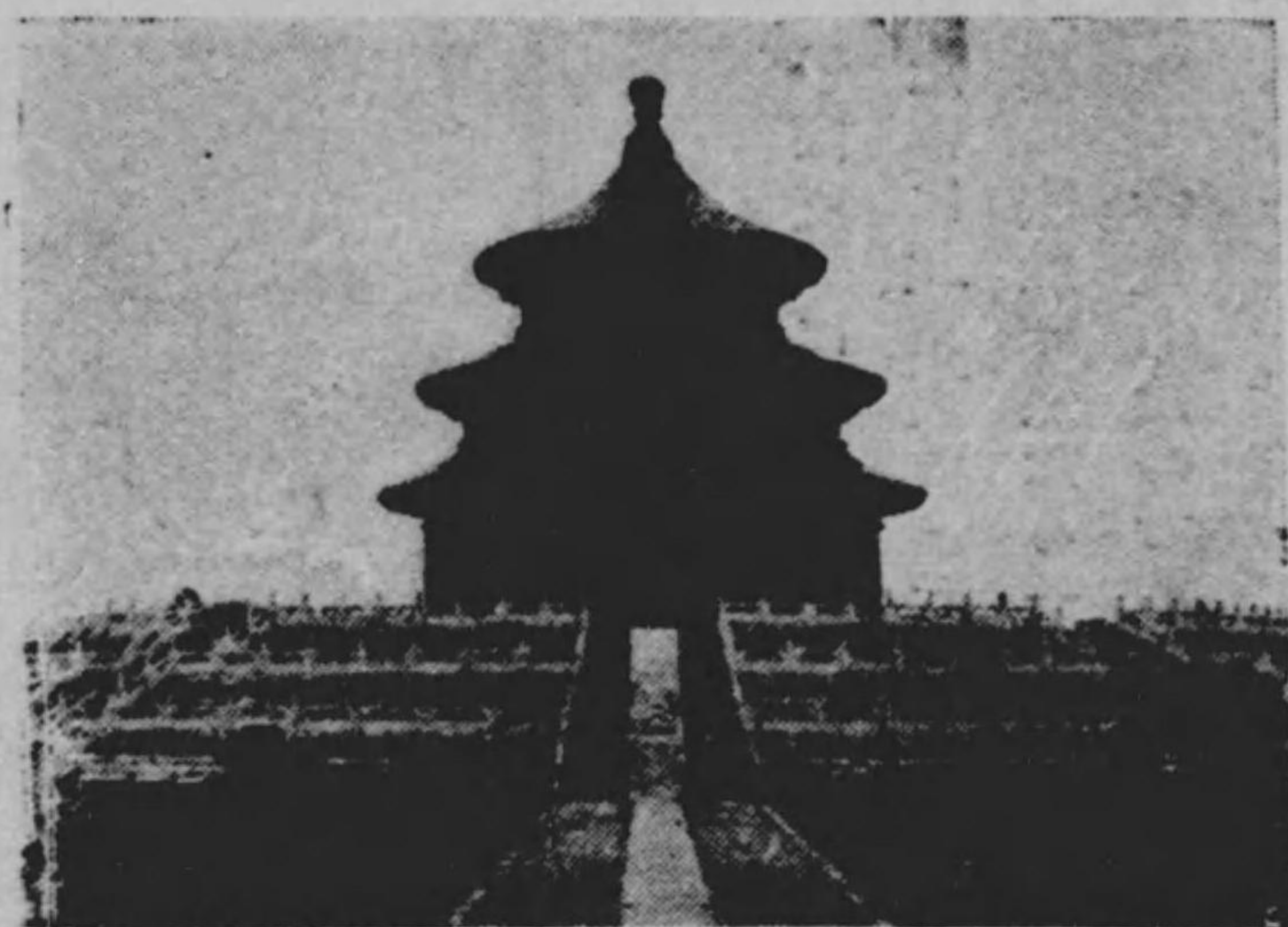
門念記勝戰理公るれ成裝新轉移に園公山中

(九) 天 壇

予は支那に居る朋友より屢々風景寫眞や繪葉書を寄せられた中に北京天壇と云ふ名所を覺へて居た。紫色の瓦葺三層樓の宏壯雄然たる一棟の塔形である。端なくも今日其の實物を參觀したのであるが天壇と云ふものは予の考へて居たものとは一寸違つて居る。即ち、今云ふ紫瓦の殿宇は園

の北端、中央にあつて是は歴代の皇帝が毎年正月神位、即ち天、地、風、雨、雷の諸神を此殿宇に奉請して祭典を行はるゝ祈年殿であることが分つた。そして眞の天壇と云ふのは、其祈年殿より遙に南方宏々たる壇園の南端中央に大理石の圓丘がある。是が即ち天壇と稱するものである。壇は總て三階より成り、最下段は徑二十一丈、中段は同十五丈、上段同九丈、總高は一丈五尺の圓壇である。其の圓きは天に象りしものなりと云ふ。

毎年冬至の日の出前天皇此壇に昇り、祭祈以て天災地變のなからん事を四億萬蒼生に代りて祈願せらるゝ處である然し廣い意味からは、此園内一圓を指して一般に天壇と稱して居る、天壇は正陽門の南方米定門街内に有つて永樂十八年(日本の應永二十七年)の建設に係り垣牆を繞らす實に六十有餘丁(約二里)松柏鬱蒼たる中に雜草一面に生え茫々として蛇でも出想に思はれる迄に荒れ果てたるは天壇の名にも相應はしからず。又一面支那政府現下財政の窮乏と政治の紊亂を語るものである。此廣大なる壇内の參觀者今は予と北京醫院宮澤氏の一行二人あるのみ、昔の盛代を偲ぶ數々の建物も腐朽するに任せたるは惜しき極である。途を距て西方に先農壇(天神、地祇を祠る宮)あり、今は之



北平天平天壇の内祈壇

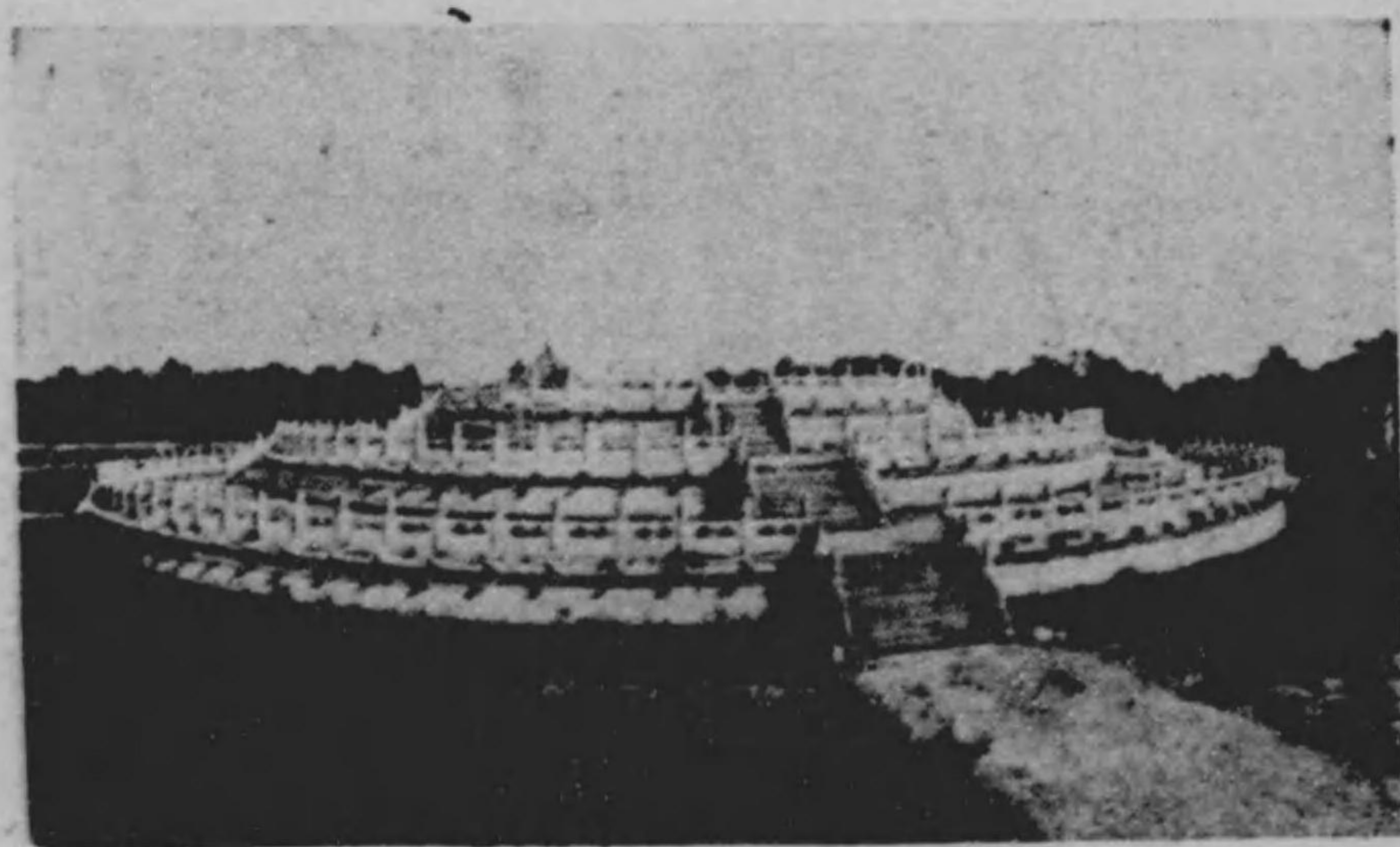
を城南公園と稱するも、参観の暇なかりし。

(十) 北平の停車場と汽車

六月十二日、金杉楠本兩博士着平を出迎への爲今日は前後二回に亘り北平車站に出掛け、一行の來着を待つ間停車場の構内を一巡した。

(支那では停車場を車站と書き汽車を火車と書き自動車は汽車と書く) 北平停車場の「ホーム」屋根の完備等一見東京驛と比較して其外觀餘りに遜色ない程度に整頓して居る様で有るが、一旦其構内に入つて見ると其の不備の數々が發見される。

先づ此廣大なる驛に公衆便所の設備がないのに一驚した上流社會の人には見受けなが下層の人々は「ホーム」から「レール」へ放尿して居ることを度々見受けた。婦人の



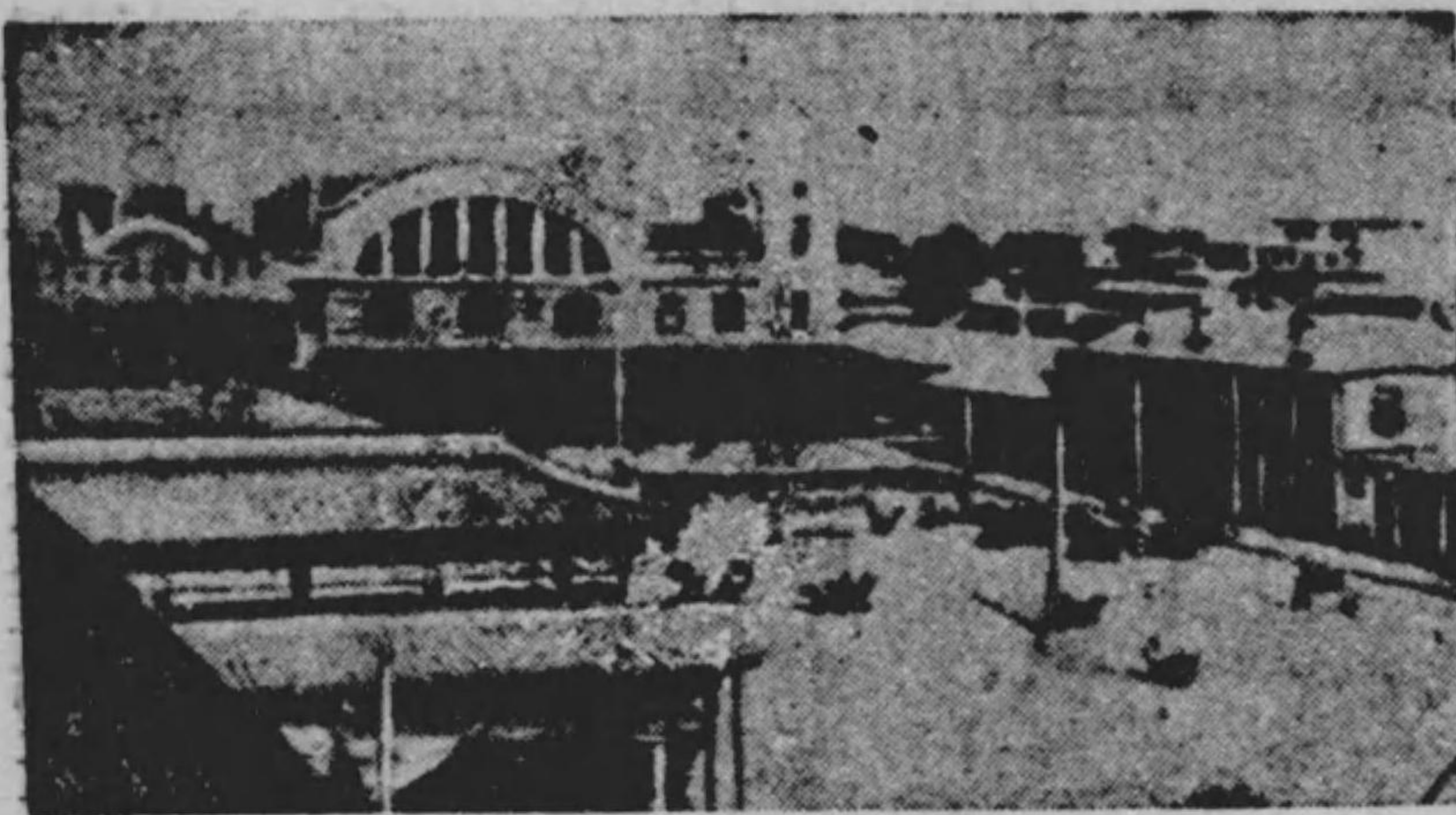
北平天平天壇の内天壇

客待ちに對しては同情に對へないことが有ると云ふ。

驛の入場料は五錢で有るが買はないで良いことが屢々ある、今日正午に來た時は「ホーム」の入口で入场料を買へると云ふて大層叱られた。急ぎ出札に行つて見ると今は汽車の着く時間に非らずと有つて出札係りは晝寝して居る、買つてよいのか悪いのか、さつぱり判らない。遂に改札口で現銀を出して入場した。出るときは何も見せないで通すと云ふ香氣さで有る。午後行つた時は入场料はどうか同行の者に相談すると一人の連れが大抵大丈夫だと云ふ皆之れに和してぞろ／＼と從いて往つた。誰一人何とも言はずに入場が出來た。予は不審に耐へられないが北平に

居る人でも變に思ふて居る。

一説には大列車が發着する時に限り發賣する様であると云ふ人も有つた。驛の構内をブラウ／＼して居る苦力共の中には改札係りや見張りの巡警と脈絡が有つて入場者から現金を取り程よく分配して居る例は絶へず行はれて居るとの事を耳にして今日最初出した入场料は果して何所へ收納せられたか餘程疑問であると考へた。又乗客中にも三等切符



京奉鐵道正陽門東停車場

を買つて終始食堂車や二等室の邊りを彷徨き廻り一等客になりすまして旅行を終る者や、檢札と妥協して乗降する者等の例は決して珍らしくないと云ふ事であるが、是れでは支那鐵路當局の財政難も思ひやらるゝ次第である。今日は丁度つい此前孫文氏の遺骸を南京へ輸送した靈柩車が北平へ送還

されて驛の構内に來た。餘り立派と云ふ程でもないが周圍にある客車貨車の車體が餘りに見すばらしい爲に一際目立つて見へる。此空靈柩車を見んとする群衆が又驛の周圍に殺到して時ならぬ混雜を呈して居た。

驛構内の客車中には軍人専用列車と云ふて餘人を乗せない客車が澤山ある。軍人専用列車中には小さいながら通風窓のついた客車らしいものも有るが其多くは日本の有蓋貨車同様一車にたつた一ヶ所の出入口兼積み卸し口、又兼通風窓の有る車體が連結されて居るが、概して軍人専用車は一般客車の下位にある貨物車に近い程度のものである、軍閥全盛の今日は軍人の捕へ女等を此家畜車に均しい汽車に乗せ着剣の護衛兵を附して輸送する等の悲惨事を時折り見ることも有ると云ふ。

客車、貨物車、鐵路共に補修には相當手を盡して居るがより以上破損腐朽して行く状態を有り／＼と目撃して同情に耐へない。更に又驛の事務所を覗いて見ると驛長以下全部の驛員が板張りの椅子に座蒲團一枚敷かず腰を掛けて終日務を續けて居る、よくもお尻の痛くないことよとお尻の構造に不審を抱き見たゞけにて自分のお尻が痛い様に感じた北平滞在中屢々北平停車場に往復せし爲後から分つた事

で有るが、此北平東車站には出入口が兩方にある即ち北口が驛の表玄関謂ゆる正面で有つて前庭も廣く空地を隔てて正陽門巍然と聳へ西には京漢線の起點北平西車站を望む我等珍客は先づ此表玄関に下車するのが當然で有らう。

然るに同仁會醫院のある東單牌樓方面より來るときは餘程の迂路となるが故に、醫院の者は大抵公使館區域即ち交民巷を通過して東の入口から出入するを常とし、特種の場合に非らざる限り正門より出入せならしい。日本でも一驛に出入口の二箇所ある停車場は近來著しく多くなつて東京上野新宿四谷田端の驛等は西、南、北三ヶ所の出入口さへある、初めて下車する者、地理を知らぬ者は随分戸迷ひするばかりで無く出迎へる者にも逢はずに終ることがある理想の驛は乗降二口に限り乗る者は何でも彼でも乗車口に集まり下車する者は全部降車口より吐き出す様にして置けば乗降客の整理が統一されて、驛員及び旅行者の爲にも送迎者の爲にも誠に便利であると思ふ。但し是は地理を知らぬ者の云ふことである。

話を餘談にそらしたが、此出入口二箇所の爲に北平入りの際、予等赤毛布の一團は不尠苦められた、今其實験談を此所に紹介しよう。

今御安着になりました。森さんが見當らないので一旦歸りましたが更に自動車を以て宮澤君を差し向けましたから是に乗つてお越し下さい。では左様なら「チリン」と切つたサア一愈々分らない、どう考へても不審でならぬ。暫らく「ホーム」に佇んで居ると流汗だく／＼の人が來て予に聲をかけた。之が北京醫院の宮澤氏で有つた。聞いて見ると予が正門の方へ探しに行つて永／＼と電話交渉の間に出迎への一向が裏門から來て裏門へ連れ出して歸つてしまつたことが判明して、安神が出來たが初めての地へ旅行するもの又是を迎ふる者の注意して豫め打合せ置く可き要件であると思ふた。

支那の車站には「ホーム」に屋根が無い即ち無蓋の「プラットホーム」である。今回の旅行中「ホーム」に屋根の有るは獨り北平車站のみで有つた。是によつて當地方が如何に雨雪の稀なるかを立證することが出来る。

日本に居ては旅行に出發の際如何に天気晴朗で有つても一、二泊を豫想せる旅行には必ず雨具の携行を考慮に置くので有るが、予は今回三十餘日の旅行中只の一回さへ雨具の必要に遭遇せざりしに見るも無蓋「ホーム」の故なきに非らざるを知るものである。汽車の發着時間は到底日本

渡邊、伊積予等の一行が北平に到着し、汽車から下りて見ると迎へる者が一人も見當らない。赤帽か苦力かは知らないが數人の労働者風の男が寄つて集つて荷物を運び出そうとする、制すにも言語は通じない。唯群がる蠅を追ふ様に手を横に振り顔をしかめて其不承知を表情するのみ。

暫らくしても知人の顔が見へない、予は一行に向つて斯う言つた。醫院の者を見つけて來るから夫れ迄は此處を動かす、荷物の監視を頼むと言ひ置いて驛の正面出入口の方へ長い「プラットホーム」をどん栗眼で歩んだが一向に見當らない。ふと前方に日本の軍人らしきを發見し、しめたと計り近寄ると巡邏に來た日本の憲兵上等兵である。北京醫院の話をすると能く知つて居る。出迎へが見當らないから電話をしたいと思いますと思ふが支那語が出來ず、甚だ御迷惑ながら一通話御盡力願ひ度いと頼む、と此憲兵曰く、僕も北京に來て漸く一ヶ月未だ語學處ではないが、何とか致しませと予を引き連れて驛長室へ誘ひ、手帳を出して久しく見て居たが、やがて驛員に何やら語ると驛員が電話口に立つた。予は此時それでも此憲兵さん流石に豪らいと感心した間もなく電話が通じてかゝつて見ると驚いた、電話に曰く只今事務長以下出迎に行つて渡邊、伊積兩醫長御家族共只

の如く正確を期し得られず、何時も若干の遅延を豫想せねばならぬと聞きしが、果して予の乗車も何等の故障なきに常に一、二時間の延着を見るので有つた。

(十一)「ロツクフェラー」財團

北平協和醫院を見る

六月十五日飯島醫院長より金杉、楠本兩博士を「ロツクフェラー」醫院に案内するから行かうと誘はれ同行することとなつた。豫定の時刻午前十一時一行六名協和醫院を訪ふ。位置は同仁會北京醫院と隣接して居る。建築の外観は宛ら支那宮殿の様式に類似し全屋青瓦を以て葺き一見壯麗を極む。米國の富豪ロツクフェラー氏の寄附行爲に係る施設である。支配人「グリーン」氏、及び「ドクター」グラッド兩氏玄關に出迎へれば飯島院長見るより握手を交し兩博士を紹介せらる。金杉博士は「ドクトル金杉」と名乗つて堅く握手續いて楠本博士同様一應の挨拶あり。予も又無言裡に仰ぎ見る様な大男と「ドクトル」振りよろしく握手を終る。「グリーン氏」主として何所を見るかと訪ねる。金杉博士全部に互り參觀したしと答へらる。

グリーン氏先頭に立ち日本語巧みに一つ／＼説明を加へつゝ案内して廻る「ドクター」グラッド氏最後に付き添い

予等一行の通過せる後を必らず「ドア」を閉扉して又追いつき吾等を通しては又戸締りを爲す、時節柄蠅を絶對に入れない注意か又來賓待遇の見地よりか決して「ドア」の把手に來賓を障らせない心使いは流石に行き届いて居る。第一階の長い廊下を通る、同仁會北京醫院の廊下よりは餘程幅が廣く、そして其廊下は全部通路のみが目的でなく其片側は四人掛け位の腰掛を幾列にも並べ、外來患者が同一方向に向つて腰を下す様に出來、恰も汽車の客を見る様に患者待合の整頓は可なり整ふて見へたが、我同仁會醫院の患者に比べては著しく生活程度の低い貧民らしい者が澤山に居た。是は「ロツクフェラー」醫院が治療を主とするからで有らう。

或る室の扉を開く、一寸覗いて見ると中國人婦人の患者が白布を掛けられ椅子に腰を下し中國人の男髮結に結髪して貰つて居る、贅澤な病院だけに患者も髮結ひにかゝるのかと思ふとそうではなく餘りに不潔な下等社會の患者が多い爲清潔にする意味から少し位、熱が有つても何でも入院前に入浴せしめ、更衣を爲さしめ、髪を結ひて身體を清潔にし然して後病床に入れるのだと云ふ。現在其入院準備を參觀したので有つた。如斯で有るから如何に襪着た下等社

會の患者でも病床に收まつて見れば、立派な患者に成りすまして居る。

二階の産婦人科に乳兒の一室を見る、乳母車の様な「ハンモック」の中に分娩された斗りの赤坊が一人づゝ入れて寝かしてある。ズーと見廻すと六、七個並べて有つて、母も看護婦も何も見へない。ガーゼを冠つてむく／＼と動いて居る。「グリーン」氏曰く、一定の時間に乳を與へ、又此室に置くのです。温度、湿度の調節に注意しますと。又次の一室に這入ると、今度は齒の出掛かつた太り切つた可愛い子供が大形の乳母車大の「ハンモック」に入つたのが四人居る。這い出して落ちない様に手すりの着いた「ハンモック」である。二人はよく睡眠して居たが他の二人は起きたり轉んだりして遊んで居る。一人の子が色白く肥満して眼をパチクリさせる、金杉博士がオイ／＼と聲を掛けられると、ニコ／＼笑ふ、思はず引きつけられて暫し時を移された。難産や其他の不幸で母のない子供ばかりで母乳は素より有る筈なく、全部豆乳で育て居ると云ふ。現在此四人の幼兒に看護婦一人が附添ふて居た、隣室には豆乳の瓶が水に冷やして有つた。楠本博士は眼鏡を取り出して目蓋を検診し其榮養と發育を見て感賞せられた。

夫より幾つかの病室を見た一室に十人、二十人と「ベット」の並べて有る大廣間もあり、又一室二人又は四人位の室も澤山有るが其内には白布の幕で一人々々の境をして有る處と見透しの病室と二種有つた。金杉博士の説を聞くに近來幕で仕切りするのが外國では流行して居るとの事である。

丁度十二時近くなると各病室共食事が運ばれて來る。完全な覆の有る飯運車に載せ病室へ引き込んで來る。蓋を取ると料理は丸い器物に入れた儘湯船に浸されて居る。調理が出來てから患者の口に入らる迄適度な温度に保たせる装置に出來て居る。予は今より十年の昔陸軍糧秣本廠に在勤當時兵の温食給與法に付多年幾多の研究に腐心せし過去を追想せずには居られなかつたと同時に我國の病院にも此施設の肝要なるを感じた。庖厨場に行つても料理をして冷やさぬ様完全なる温室に格納され一匹の蠅すら見ることが出來ない。

病床に食事の状態を見ると「ベット」の上につき直つて附添ひの中國人と共に箸をとるもあり、看護婦に茶碗を持たせ喰つて居る患者もあり、寝た儘で流動食を管から吸收するも見へた。又純白の整形を全身に被め目と鼻と口の部

分だけ穴が明けて有つて看護婦が「パン」を小さく切つて與へると僅に口をモガ／＼させつゝ喰べる西洋人の子供が有つた。全く雪だるまが物喰ふ様に見へる。此炎暑の候にコルセットに納まる患者の身の上を可愛想に感じた。

随分大勢の人を雇傭し居るにや萬事の整頓にも徹底的である。何所で誰が働いて居る様にもないが何處迄も清々した氣分がする、廻り／＼つて三階へ昇り廣大なる洗濯場の装置と蒸汽及電熱物干場を見た。今しも晝食休みにて中國人の洗濯夫達は此所彼所に裸體でゴロ／＼晝寝して居る、中には洗濯籠の中に這入つて海老の様に曲つて午睡するも見へた。

それから長い廊下を通ると何か工事をして居る。聴けば院内は年中一定の計畫を建て部分的に修繕を繼續して居ると云ふ。是が爲に扉や壁の樂書は素より一點の手垢さへ見ることが出來ない。楠本博士曰く、我が北京醫院にも今少し内部の装置に手を入れたいと。

斯くして各科の診療室、病室、消毒室等幾多の室を覗き終つて屋上の露臺に昇つた。醫院の外景を一瞥すれば病舎、醫學校、講堂連立する外に日本人の大和俱樂部及我同仁會北京醫院を距て、又廣大なる職員及看護婦の宿舎を置き其間

には贅を極めたる『テニスコート』や種々の運動場が配置され其の巍然たる一劃の爲に隣接せる周囲の各建築物を一層貧弱に感ぜしむる。當院の屋根瓦は全部宮殿作り青瓦で有る。其由来を聞くに此地所は以前清朝皇族の邸宅跡なりと之に因みて醫院の屋根は特に青瓦を選べるなりと。然るに現今此地に青瓦製造の工人なく年々破損し行く瓦の補充に困窮し居れりと云ふ。建築の際地下より軍用金に埋没せし金塊を發掘せし等の説ありと聞き其の眞否を詰すに定かならずと。

轉じて視線を遠方に放てば西方間近くに宮殿の黃瓦高屋を望み、南方遙に天壇の紫瓦煙霞の裡に影淡く燕京一帯霞中にとざさる。御影石にて敷き詰めたる露臺の隅々迄一巡して屋内に降り、第一階の廊下屍室の前を通る、折りしも中國人下層の患者死亡し葬儀に用ゆる棺輿臺を七、八人が擔ぎ込んで来て居るが、貧困の爲に死體を收容する棺が求められずとかにて、今朝よりぐず／＼手間取つて居ると聞いた。

地下室に導かれて手洗ひ場に入り、夫れより食堂に招ぜられて金杉博士外一行に北京醫院飯島西村正副院長『グリーンランド』氏を併せて八名支那料理の饗宴を済まし、休

憩後更に醫學校を參觀することになつた。講堂、實驗室、解剖學教室等の設備を一巡して圖書室に到る。飯島院長の話に依れば醫書の充實して居ることは北京第一であると。雜誌類は醫書と區分して別の棚に種類毎に且月順に整頓せられ、恰も同仁會の書籍整頓棚に類似のもので有つた。雜誌中には日本の發行に係るもの數點を見受けた。

地下室に降つて解剖室に到る『グリーン氏』が石造の長持の蓋を明けて見せた。内を覗くと裸體の死體が長く伸ばして六、七人上向に寝かした儘漬物にしてある。予は死體の格納は初めて見る。是は解剖の教材に行路病者や其他引取り手のない行き倒れなどを請願して引き取り格納し居ることと有る。米國の如き文明、富豪の國家に於ては如斯き行路病者や行き倒れは容易に手に入らず、爲に此地に派遣されて若干年の勤務中には等の死體により解剖の實驗を修得するを樂しみに渡支する醫師が多いと云ふ。飯島院長曰く、度々當院を參觀するが今日程詳細に案内されたことは曾てないと、如何にも入念を極めた懇切なる案内に一行満足此上もなく、廣ろい院内と學校の參觀を終つて午後二時過ぎ辭去した。

惟ふに予等の如き醫業の素人にありてさへ、此完全なる

『ロックフェラー』協和醫院を美望せざるを得ない。況してや斯界の泰斗たる兩博士を初め北京醫院正副院長に於かれては一層切なるものあらんと推察したのである。其夜は長春亭に飯島院長の招宴ありて『グリーン氏』とも同席したが、氏の日本通には如何にも感服の外はない、聞く處に依れば氏は横濱に生れた人であると、予は其夜の餘興に太功記十段目を一鎖り喰つたが是れ迄も分つたかどうかは疑問であるが今日の見學は予の爲には記念であり思ひ出での種である。

(十二) 名優梅蘭芳を觀る

六月十六日大和俱樂部に於ける北京醫院祝賀會の夜西村副院長より遠來の客人に對し支那の名優梅蘭芳劇を御馳走したいとのことで金杉、楠本兩博士予等の一行と御主人役西村副院長、生島、高木君等と打ち連れて前門大街の中和劇場に繰り込んだ。日本の大劇場は大抵午後三時遅くも五時には開幕して十時には終演するので有るが今夜は十時から芝居に行くので聊か意外に感じた。車中高木氏は語る、北平では活動寫眞館等も夜間の部は大抵九時近くに初まるから早寝する日本人は一眠りしてから出掛けても間に合ふと云ふ。劇場の外観は日本の大劇場程に立派なものなく、

又内部の装置に於ても東京場末にある活動寫眞館を少し擴げた位の程度と見受けた。客席は平土間高棧敷共椅子席で日本の活動寫眞館に餘程よく似て場所により等級の區分あることは勿論である。舞臺の幕張りは凡そ八間か十間位も有り相に見たが日本劇場と異り花道は着いてゐない。緞帳は日本式と同じで引き幕及び巻揚げ等も使用して居る。椅子に着いた心持ちは案外樂であり尙ほ一つ便利に感じたことは、各椅子席の前に巾五寸位の縁臺が通しになつて居て、觀客は椅子にかけた儘の姿勢で丁度卓子に寄つた心持ちである。此縁臺に手廻り品を置き、茶を運ばせて南瓜の種を口にしつゝ悠々芝居を見物するので有る、幕が閉ちると『ボーイ』が茶菓の取り替へに繁しく、又暑い時分では『タオル』の搾つたのが盛んに注文される。觀客が『タオル』を要求すると遠い通路から搾りたての熱い『タオル』を客の頭上構はず投げる。お客は夫れを手を受けて顔や手先きを拭く、『ボーイ』が後から集めに來て代金をとつて行く予の觀劇は二時間足らずで有つたが風通し悪くて蒸し暑く又清潔でない。休憩所及食堂の設備も場内には見受けなかつたが良い劇場には一通りの設備は出來て居るとの事である。幕間には盛んに物賣る『ボーイ』の忙しさを見た。

劇場内では紳士も上衣を脱し楽な姿勢になつて見物するの
が習慣である。劇は筋書を讀まぬ爲に茲に説明に苦むが、
楊貴妃一代記と云ふ時代劇で名優梅蘭芳が楊貴妃に扮し舞
踊する場面之幕を観た。支那式一流の音楽に連れて美麗な
衣裳を纏ふて踊る梅蘭芳の姿へ種々色の代る電光を放射し
衣裳が電光の作用によつて五色に變る鮮かさは一寸變つた
見物で有つた。そして梅蘭芳の藝其のものが儘に他の俳優
に比べて一等地を抜いて居ることも充分認められたが、
是が近く米國に渡つて一夜一萬元で演ずると聞いたとき予
は其價値を如何にしても發見する眼力のないことを遺憾に
思ふた。言語は素より判らないが時々甲高い細い調子の臺
詞が交る金杉博士が何んだか猫が浮かれる聲の様だと評さ
れたが、それに似た様な聲も聞へた。日本劇に比べては雜
然として樂器の響きで耳を聳する様なこともある。又一幕
毎に舞臺に甚だしい變化がなく一曲の移り變りを知ること
が一寸困難である。劇は夜の十二時を過ぎても續けられて
居たが、予等は中途に切り上げて表へ出た。其の界限の股
盛は又格別で有る。支那では劇場と料理店は離る可らざる
關係を持つて居る。お役人と云はず商人と云はず相談事は
大抵料理店に於て酒食の間に行はれ、それが濟むと打ち連

れて劇場に案内されるが常習であると云ふ。

是を要するに支那の大劇場は日本の東京と大阪方面の劇
場とを折衷した様な方式である、平土間から棧敷迄が一齊
に椅子席に成つて居る處は東京式であるが幕間になると中
茶屋が見物席を賣り廻る處から見物席で絶へず物喰ふて見
物する情景等は日本の關西向き劇場に似て居る、余等が若
ひ時分には芝居見物と云ふものは重詰や折詰めを携行して
一瓢を附屬せしめ、幕合ひには好いた同士でチビリ／＼や
りながら觀るものだとのみ考へて居た、東京でもつい大
正の震災以前迄は此種の方式が大部分で有つたが震災以來
メキ／＼と改良せられて現今殆んど座席と云ふものは寄せ
席位に成つて仕舞つた此經過を見ると支那の劇場が日本に
見做つたのでは無くて日本が中華の劇場様式を取り入れた
のかも知れないが何れにしても芝居觀と云ふ事は遊興で有
るから極めて樂な姿勢で喰度い物を喰ひ呑み度い程飲んで
面白く觀劇する處に芝居見氣分がたゞよふものである此點
から見て余は支那の劇場の方が好きである、然しながら劇
場の程度は遠慮の無ひ處日本の劇場が遙に綺麗であり衛生
的であり美觀であり美術的であり總ての施設が充實されて
居ると思はれたが又支那に永く居た人の話を聞くと支那

の芝居には仲々意味の深い劇作が多く日本の歌舞伎以上で
あると云ふ。以上は名優梅蘭芳を觀ての感想で有つたから
大劇場を對照しての所見で有るが支那芝居にも日本と同様
ピンから切り迄有る、其の安芝居となると四柱の拜殿に能
く似た吹き通しの舞臺で背景も何もなく見物は裏表無しに
四方から立見する丁度日本の相摸見物と同じ様なもので有
る、舞臺の縁の下か又は其一隅に一寸した圍が出来て其内
が樂屋である役者は皆此狭い樂屋内で扮装して舞臺に現れ
る様に成つて居る先づ日本のお祭りの神樂芝居に彷彿た
るもので有る、唯方も別に形が有る譯でなく舞臺の一隅
に胡弓、ドラ、打竹、横笛師等の唯方が居並んで坐を占め
盛んに囃し立てる前で雜然として演ずるので有るが語の通
じない余等には爽わかない、そして觀劇に仲々判斷力が
要る日本劇で乗馬して出る役は支那劇では只右手に鞭の様
な棒を携へて出る夫れが乗馬を意味する姿であるが我々に
は如何にしても了解出来ない斯んな例は澤山あると云ふ。

(十二) 北平商店覗き

支那民族が商民的素質に於て優に世界何れの人種にも遙
に超越せる才能を有する民族性で有る事は往年朝鮮臺灣在
任當時既に其一端を味合ふて居る者で有るが、今回の支那

旅行を幸に大小の商店を覗きて商業の状況を視察し更に新
なる見學を得たるを喜ぶ、支那を知らない日本人は支那商
人と云へば直に東京邊りによく見る絹袖賣か瀬戸物壇れ直
し又は六神丸賣の行商を想像するが支那で見る商人はなか
／＼そんなもの計りではない随分立派な者が澤山ある。

イ、靴店に行く

北平滞在中折を得て知人前山氏と靴店を見る、北京醫院
に程近き東單北路西門牌三四二番保興泰皮鞋商店と稱する
店に有る、今店舗擴張披露賣出中と有つて總て正札の四割
引きで賣ると云ふ。冷かし半分に這入ると出て來たのが主
人公一見三十幾歳位溫和な人相、店先には徒弟らしき七八
人が何れも作業に餘念がない材料の陳列を一瞥するに日本
製品の多きに何より愉快を覺へ、又歐米品の皮革類も澤山
『ストック』させ見るからに相當信用の置ける店と思はし
める。暫らくすると前山氏は予に向つて如何です一足『エ
エ安ければネー』と答へた前山氏は主人公に向つて種々の
靴形を示して値段の交渉を始めた様で有る主人公曰く、今
直に持ち歸らるゝならば四割引きでよろしいが今から注文
を受けて作つて渡す迄には賣出し期限を經過するから注文
靴は割引きが出来ないと言ふたらしい。

日本人ならば賣り出し期間中何んでも注文を受け少々期限は伸びても、割引きで収めると勉強振りを發揮する處で有るが商業に抜け目のない支那人の癖に豪い處を氣取り居るはと思ふて見て居たが、斯くした商業道徳は中々堅いそうである。

前山氏重ねて曰く此大人(予を指して)は此度日本から態々北平見物に来て特に買つて行き度いと云ふて居らるゝから、一つ能い物を作つて提供したらどうかと諭した。すると主人公にこやかに「承知した」と答たらしく早速藤張椅子を出して予に掛よと表情する、紅茶を出して来る、型紙を敷いて足を載せ型を取つた、そして明後日假り縫いに來てくれと云ふ。それから筆を以て型紙に「永歳保管東京森」と書して予に見せた、自分は之を見て熱く感心したので有る。一生中に二度と來るか來ぬ何所の誰とも判り兼ねる予の足型を永歳保管して待つて居るから用ひて見て具合が良ければ今後重ねて注文を頼むと云ふ意思の表情である、こゝが商人の最も大切な處であり流石に大國支那大都の商人丈あるとつくづく感心をしたと同時に此靴は値に値段の範圍に於て彼れが技術の限りを發揮して製作するに違いないと深く信じたので有る。

數十の市場があると云ふ、其内には日本の勸工場や上野博品館の如く各種商品の持ち寄り市場(勸商場と云ふ)と又專業市場(米穀、棉花、織物、其他)と有ることは日本の市場と略ぼ同じであると聞くと、滞在に餘暇なく市場巡りは之を廢し代表的に東安市場一つを見ることにした。

市場の規模

東安市場は東安門外丁字街にあり。同仁會醫院よりは最も近距離にして而も頗る大規模の勸商場では是を觀れば他は推して知られるとの事である。先づ東安市場の規模を一口にすれば大なる一建築物の中に縦横基盤割の道路が拓け是が町並になつて居ると言へば之にて盡きる、此宏大なる屋內道路の廣さは十間狭きも四、五間位は有り相に見へる、然して此道路の兩側には大小の商店構比し其の大方は頗る高層の二階建である、又道路の中間には二條三條の出店が道路に併行して持ち出され、恰も東京の夜店の如く兩側の町並へ向つて出すものと、又道路の中央に出店同士が相對向して出す處と有つてさしに廣ろい道路も出店の爲に狭い幾筋かの道路に分けられ一層混雑を呈して居る。

此東安市場には東西の二箇所に廣い出入口が有つて、其附近一帯は無數の人力車、自動車街路に詰めかけて客の

是は些細なる靴一足の例證で有るが實際の處支那商人は細心に花客を研究し大膽に之を信用する度量を持つて居て見ず知らない萬里の顧客に對しても山大の信望を繋がしめねば措かぬ商國民性で有る、歐米の文明諸國は素より新開拓の處女地にある津々浦々迄支那商人の入り込まぬ處とはおそらくない、然して是等の商人が皆夫れ々相當に發展し永住して民族の發展を實現して居るので有る。

話は逸れたが予の注文靴或は當らぬかも知れないが、商人たるものは如斯顧客を信じ又顧客よりも信頼を受くることが大切で有る。日本商人の手本として學ぶ可き處尠からざるを痛感せる次第である、靴は豫定の通り出來た日本へ歸つて行き付けの靴商に鑑定せしめると曰く先づ十二三圓の短靴で有ると言ふた、驚く勿れ六圓八十錢である。支那は原料、工賃、生活程度の總てが日本とは格段の差違ありとは聞いて居た處で有るが此値開きには一驚の外はない物價の指數に素より相違あらんも支那商人の勉強振りが發露されて見へる。

□、東安市場

北平市中には澤山の市場がある。即ち東安市場、東河市場、西安市場、西河西單、廣安、新豐等と數へ來れば大小

乗降頻繁、恰も織るが如き雑沓を極め市場の殷盛を物語つて居る。

陳列は大體に於て種類毎(呉服商、小間物商、家具、玩具、化粧、飲食店等)に集合して居るが又雜居的の處も澤山ある、殊に道路面の出店に到つては實に千種萬樣複雑なる持ち寄り店である。

市場の商品と其値段。市場の商品を鑑別して見ると高屋に立派な店舗を構へ永住して居るのは豪商で有つて、見るからに手持品も豊富且つ商品も着實で花客の信用を重んじ掛値も殆んどないと信じてよい。是等の商店には大抵二、三乃至數名の店員を置いて居る、一方道路面にある出店には随分如何はしい商品を陳列して而も五割十割以上の掛値を呼び平然たる者が幾等もある夫れ等の商品をよく見ると何所かに瑕瑾を發見するを常とし、無責任の商品ばかりで有るが其の辯聲を枯らして叫び鳴物入りで花客を呼ぶに餘念がない處など日本の出店も同じである。

一度楠本博士と同行此市場を見たことが有る。博士も何か買ひ度いと云はれて高木氏東道で見て廻る間に銀製品を販賣する店先へ廻り合せた店頭の陳列には萬壽山昆明湖天壇、景山等の全景を銀板に浮き彫りしたる見事な扁額が掲

げ柵には玉泉山の塔、支那人風俗、嫁入の行列其他銀製の器物玩具が豊富にある、一行冷かしの道入り種々見惚れる間に一つ二つ買ひかける博士も相當取り纏められた、商談の交渉には一切高木君が通譯する其の間に同じ様に出来た玩具に値段書きの脱れた品が一個有つた。同じ大いさで同じ形で有るから値段書きはなくとも同一値段に計算するかと思ふとそうでない。秤を取り出して秤量した上同一値段でよろしいと答へた、予は此の動作を見て『之は信用の置ける店だな』と感じた其の後某氏に其話をする其の秤が中々の曲者で支那人は賣るときは秤と買ふ時の秤が違つて居るから中々油断が出来ないと云ふて予の信頼辭を絶対に採り用せなかつた、然し予は今尚ほ彼の店の取扱ひ振りを信じて居る、そして買ひ物は相當の金高に昇つたが高木氏交渉の結果は漸く二分強の値引をしたに過ぎなかつた。それから其の翌日玩具の人形を購むべく又此市場へ行つた、是れは其の前夜西村副院長が予等一行を名優梅蘭芳の觀劇に招せられたので予は梅蘭芳の容姿を記憶に失はぬ内に此名優の人形を購ふ爲で有つた、今朝は宮澤氏に同行を煩はして市場の縦横を廻る間に索し當てた、立委約七寸、女に扮した梅蘭芳、土で固めた重い人形である一見美麗で有るが焼き

堅めてない爲に甚だ毀れ易い、二人一對幾何かと聞くと一元(一圓)だと答ふ宮澤氏五十錢と値を踏む、プロベンらしい、暫らく交渉を重ねて遂に六十錢に折り合つた僅々一圓の呼び値に對し四割の掛値とは一驚の外はない。昨日博士一行の買物と對照し同じ東安市場内に於ても、店により斯かゝる實例を體驗し某氏の秤不信任談の幾分を信ぜざるを得なかつた。之等は市場に於て物買ふ者の特に留意すべきことにして信するの餘り不慮の損害を招かざる様支那旅行者の爲に特に一言を費し置く。

市場内の演藝

一日生島氏と、此市場を觀た時演藝場に行き當てた、東安市場内には數ヶ所に野店式演藝場が有ると云ふ、極めて下級労働者の晝休場、簡易飯場の附近にあつて頗る不潔なる凸凹極りなき廣庭に蠅の集つた板の腰掛が不規則に並べて見物席が出来て居る。是は餘程よい設備中中には一つの腰掛けさへなく全然立見の處が多いと云ふ、舞臺は何所かと聞くと場の一隅に二尺角位の卓子が据へてある限りで、藝人は此卓子に據つて藝をするので有る。故に休演中は初めて見る予等の目には如何にしても演藝場とは見ることが出来ない。今日見た藝は日本の浪花節に近いもので貼紙を



市場の操り人形

見ると水滸傳と書いて有つた、卓子の傍で一人の男が蛇味線

(日本の三味線と同じ形で有るが太鼓の部分が蛇の皮で張つて有る)を弾く其調子に合わせて一人の男が筋書を詠い講釋をする處は日本の藝人と全然同じであるが予の見た藝は極めて下等社會の者の様で又演藝場と云ふよりは寧ろ辻藝と云ふ方が當つて居る、藝は歌うたい、綱渡り、操り人形奇術等様々である、又木戸場を設けて入場料を取る處と應分の投げ銭式と有る、支那に於て此藝人の筋書を詠ふ言葉が判る様に迄支那通となれば餘程面白い事が多からんと生島君は語つた、予も眞に斯く感じた。

序に其附近飯館、茶店の並んだ町並を通過した、純然たる支那料理の多いのは當然のこと。それに現代カフェー、

パリの如き華洋折衷の店が漸次混淆されて居るが時節柄蠅が極めて多く這入つて見る氣にはならなかつた。

斯くして此大規模なる東安市場は酷暑嚴寒晴雨の別なく開場を續けて居る、其他北平各所の市場又蓋し同様ならんと信するものである。市場の設備に於て商品の品位に於て陳列術に於て何等模範として學ぶ可き處を發見し得なかつたが獨り此廣大と云ふ一事は流石に大國的施設を標榜するもので有ると感じた。其後天津、濟南、青島の各地を巡遊し市場の景況を一巡したので有つたが、其の規模に於て商品の充實に於て北平の市場に比べては遙に遜色あるもののみで有つた。

ハ、名物の刺繡屋

東安市場からの歸路同じ東安門外の或る麻布絹布類の刺繡店を覗いた。此所は又街路面から五六段の石段を昇つて扉を開けて店に這入る洋式家屋である。硝子張りの陳列臺や、周囲の柵には麻布絹布を積み純支那服の男店員二、三名が悠然と構へて客待ち顔、他にお客は一人も居ない。

刺繡を施した麻の卓子掛を見せよと云ふと一人の店員が戸柵から大、中、小、各一組づゝ出して来る、今少し刺繡の違つた柄を見せてと注文すると其の大きさは大、小何れか

と周到な注意で問ひ返す、大、中、小共欲しいと云ふと餘り信じない様な顔つきで二、三種づゝ出して来た。日本人商人ならば客から云はれぬ品物迄彼れ是れ取り出して山積みにして見せるのが癖である。之が爲お客は目移りがして遂に柄の選定に迷ひ出し決め兼ねて買はずに歸ることが往々ある。即ち澤山出し過ぎてお客を逃すことが有る、支那の大商店は商品を何時も棚の中に格納して置き取り出す前に先づ欲する物を聞いてから標本的に一揃位出して見せ、夫れから其の欲するものを出して來ると云ふやり方で有る一寸飽氣無い様にも有るが店先を整理し客をして商品に迷はしめずスラ／＼と商談を片付けて行く處、是亦一流の商術であると思はれた。それから大、中、小の卓子掛を一組づゝ取つて少々値引せよと交渉すると、自分の店では掛値は絶対せぬと云ふて應じない。こちらが暫らく日和見をして居ると片端しからドン／＼疊んで仕舞ひかける、欲しくて買ひに往つたので有るから、言い値で買ふより仕方がない。結局此方の負けであつた。

日本でも三越や白木、松坂屋等へ行つて値引の交渉を始める者はお昇り連中でも餘程少ないと同様に支那の店も一流の處では中々氣取つたものである。何所も東安市場の人

形屋と心得て向ふと大失敗で有る。

二、商業の中心地大柵欄

北平商業の中心地は何と云つても停車場より南に前門大街及其西方一帶の地點で有る新世界(大遊覽場)商品陳列館を始め無数の茶館、飯館劇場、大小百貨店の集中せる處恰も東京の銀座と淺草を一所にせし如き殷盛の場所であるゆる／＼見物すれば四、五日もかゝるで有らうが余の滞在は之を許さず、僅かに二時間餘りを利用して此大商業地一部の情緒を味はふたに過ぎない。

前山氏の東道に任せて大柵欄の大商店數軒を覗く、大抵は二階造りで表玄関は太い丸柱の赤塗も有れば、金龍の圓柱を昇る裝飾も見へる。各商店共に肉太き文字を連ねて緞子絹布、何々と横書せるあり、縦書あり金色燦として烈日に映する金看板其の字體の鮮かなるが如何にも目について、流石に文字の國たるを思はしめる、予は東京に歸つて市中の店看板を見るにつけ文字の貧弱なるを痛嘆するもので有る。

文字のことを云へば今北平に來て特に眼に映じて古い記憶を新にし、興味をそゝられるものは支那建築の門にある朱塗りの柱に黒漆で筆蹟見事に書かれた楹聯(春聯とも云ふ)の字の面白ろさである、予は曾て臺灣及び朝鮮の各地に歴任せる當時既に之を感じて居つたが其興味を今更の如く喚起せるものである、今其二三を掲げて見んに『詩書繼世、忠厚傳家』と孔子様の教へを祖先傳來の家意として居る如きもの又『千祥雲集、百福駢臻』とお芽出度づくしの福々しいものや或は『修身如執玉、積德勝遺金』等の如く如何にも高潔な人格者らしいものや又『丈夫貴立志、君子不憂貧』と凌々たる氣概を表示する聯句に至る處で看る又北平の郊外に出ると牆は崩れて軒も傾いた貧農の門口の柱にも朱塗の代りに細長き短冊形の赤い紙を貼り是に『自得田家趣、全無名利心』等と安心立命して大地に微笑む様な文句が見事に書かれてある。一々例を擧ぐれば際限ないが斯う云つた聯句は嚴めしい官公衙にも僻村の賤が伏家にも貴賤貧富の別なく又黒煙濛々たる大工場、扱てはきらびやかなる百貨店にも、煙草屋にも、遊女屋にも文字を識ると否とに論なく此春聯を掲げざる家はない眞に支那を文字の國又詩の國だと云ふのは當然すぎる程當然で有つて、予は是を東洋の一種獨特なる裝飾文學で有ると誇つて見度くなつた。

又話をそらしたが、扱て大店の入口に行つて見ると受付

案内係りとも見ゆる店員が居る何れの店も靴の儘昇降自在になつて居て店内の構造は日本の店舗と略ぼ同じであるが商品の陳列振りは大分違つて居る、日本の商店は反物類を横にして下層から積み上げる陳列が多いが支那商店の陳列は反物を板に巻いて一齊に小口立に整頓よく棚に詰めて有る何れにしても商品の小口が現れるだけで有るが出し入れには支那式陳列の方が簡單である。日本の陳列法では下積みの商品を取り出す爲には中々骨が折れ整頓を崩して店頭を亂雑にせる弊害が多い。嗜好を變へ人目を引く陳列としては日本商店の方が進歩して居るかも知れぬが實際の便利から見ると支那の陳列法が余程進化して居ると思つた。

階下を一巡して二階へ昇らうと階段に眼を注ぐと、自分の顔が二つも三つも寫る、即ち階段々々の壁板が全部鏡張りである。丸で鏡の御殿へ這入る様な氣がした、階段の中途に立つて階下を見渡すと店内の柱は皆鏡で包んである天井下には壁に添ふて色鮮かな刺繍の商品が扁額にして掲げられ、其陳列が柱の鏡に反影して陳列が引き立つて見ゆる。

扱て見るのに金錢を要せずと云ふ無遠慮黨、階下階上の隅々迄懇ろに三軒を冷かし終つた、唯ブラ／＼と見て廻る

間は言葉をかける店員もないが、何か一つ値段を聞きかけると五、六人の店員がドヤ／＼と寄つて来て賣らうとする完く買ふ氣のない。予は甚だ氣の毒に思つた、前山氏の話に先き頃南京政府要路の人々が愛妾や夫人を伴ひ來つて、一軒の店で四五萬圓の買ひ物をして歸つたと店の規模を語る。それから大柵欄の裏通り骨董、美術品、兩替店、劇場飯館、茶館、食料品市場等を一巡して引き揚げた。目垢のつく程眺め廻つて錢見子一文の買物だにせない予等のことを真に北平見物團と云ふ可きで有らう。



路傍の理髮屋は全く日本の式と同様で、寧ろ進歩して居ると思ふ程で有る、程度に上下の有ることも日本と同じく「ホテル」に出入する理髮師から店舗を設けて營業す

るもの、夫れから移動式の辻待ち理髮店が有つて最下等の理髮屋である。腰掛兼用理髮具格納函、兼辨當箱、兼衣類並世帯入れと云ふ一つの腰掛の中へ一世帯を仕舞ひ込んで毎日之を擔いで理髮に出掛け木の陰か或は片側町の土塀の下等に五、六組の理髮師が店を並べて客を待ち極めて簡單に理髮をして居る。是等の理髮賃は日本貨の二錢乃至五錢位迄有ると云ふ、又前に述べた上等理髮は殆んど日本と同様五、七十錢乃至一圓のもの有る。仕事は總じて丁寧懇切で殊に耳穴の掃除は支那の理髮師に限ると思はしめた。

(十四) 支那の人力車

予の朋友で永年支那に居た人から支那には人力車が非常に多いと聞いて居たが、此度初めて支那に來て成る程と感じた。塘沽へ上陸して棧橋を出ると先づ眼につくのが人力車である。北平に着いて見ると是は亦素晴らしい澤山の人力車が居る、停車場、市場、劇場、病院「ホテル」等の附近は云ふ迄もなく其他到る處の名所、辻々には人力車の群を見ざる處はない。人力車は元々日本人の發明で今尙ほ日本でも相當實用されては居るが、自轉車、自動車の發達と反比して漸次其の陰を没する傾向にある。支那の現在には簡易交通具として人力車全盛である。自動車も相當發達して

は居るが、之は奢侈の交通具として中流以上の需用に限られて居る、斯く人力車の需用多き原因は支那人の履物、婦人纏足時代の惰性、面子を重んずる國民性の爲には體裁がよくて便利な上に而も車賃が驚く程低廉な爲に斯く實用視されて居ると思はれる、此人力車が發明國なる日本の輸出品で有つたら大したものでも有るが、今は悉く支那製ばかりである。

朋友の話によると上海の人力車夫は苦力の仲間であつて、下等社會の奴隷、動物に近い人間で有る様に聞いて居た。北平でも人間の最下等が乞食其上が苦力、人力車夫と云ふ順序で有ると云ふが、車夫や車體の程度は話程でもない。如何様にも上衣を着しズボンを履き足袋靴を穿ち全身を覆ふて居る、又人力車も上、中、下種々の程度が有り素より日本的人力車に比べて遙に劣等の車體で有るがそれでも停車場や「ホテル」附近に客待ちして居るものは一寸小綺麗で見ると不快の感じは生じない。

大柵欄街見物の歸途歩き勞かれて乗ることにした、丁度北平車站前の廣場に來た時東道の前山氏が聲をかけて手招きしたと思ふと何所からともなしにバラ／＼と四方から十七、八人の車夫が車を引つ張つた儘馳せて集る宛からお池

の鯉へ楚を投げたと同じ様な光景である。予等の一行僅か三人の乗客を當てに斯くも群つて早い者勝ちで客を乗せて仕舞ふと急るのである。日本の人力車は待合所も一定せられ車夫は順番に客を取る様にして居るので今度のお客には誰が行くかは番札で決つて居るから些の混雜も競争もないが支那にはまだ是が決つて居ない、總て池の鯉式で早い者勝ちである。

前山君は適當の人力車三臺を選定して先づ予に乘れと奨められ初めて車上の人となつた、前山君は頻りに車夫と交渉して居る様であつたが話が決まると三臺の車夫がやがて長い棍棒の根元を握つて拳を兩方の脇の下へ押し當て棍棒の先を遠くへ突き出し、其先



北平停車場前人力車群集

に大きな瓦斯燈を吊し一寸前屈みに猫背に成つて變な姿勢の儘減多矢鱈に走り出した、公使館區域内の道路のよい筋を車夫は力の限り馳けて行く乗り心地のよい又速い事日本の人力車以上である。

予は車上から今自分の乗つて居る人力車の構造を一通り研究して見た、人力車は元日本人の發明であると云ふが支那のは大分趣きが違つて居る、先づ第一車輪が小さく従つて車體が低く出来て車上から通行人を見下すと云ふ如き威張つた感じは少しもなく徒歩するより幾分背が高い位の感じである、そして何の必要か棍棒が思ひ切つて長く彼は六尺位も有り相に見へる。

それから蹴込みは下から風が通る様な板張りで腰掛は相當分厚の蒲團が敷かれて尻の痛みは感じない、毛布、膝掛け等素より無くあつさりしたもので殊に車體が低い爲一見如何にも氣品のない體裁に見へるが乗つては案外氣持のよい車である、幸に南京虫も出なかつた。

現在北平の人力車賃は一時間引き通して僅に十五錢が相場である、餘り安價で氣の毒な氣がする、故に北平車站から三條胡同迄引張つて漸く十錢内外である、此割合では一寸十分二十分位の乗用は比較的不經濟であるが、或る

日北京飯店へ出掛けた時等は四錢で乗つた事もある、そして其歸りは同じ道路の乗用にて十錢を要求された、元より車夫も別で有つたが、車賃の高い理由は北京飯店から出る客は面子を保つ紳士とされ車賃位を吝ちつく者は無いとして見掛取りをするのである。それにしても完く安過ぎる程安い、如何に生活程度の低い國であり、又車夫が如何に乞食から二番目の社會で有るとは云へ、四錢で車の棍棒を握る氣になる彼等の稼ぎ振りは豪い者である。諸事緊縮精勵を要する今日予等日本國民の大いに學ばざる可らざる事なると共に其意氣に感服するものである。

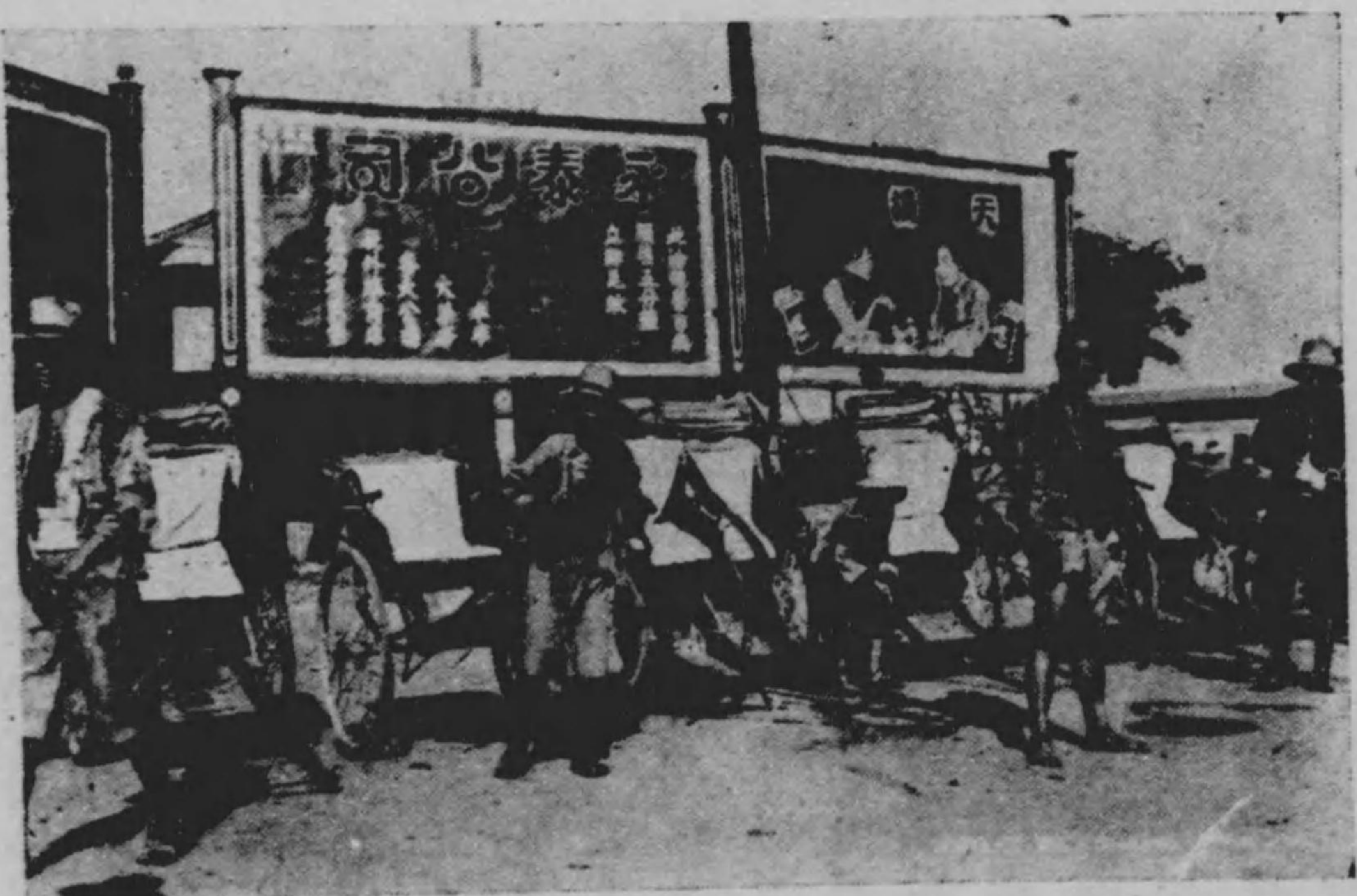
一方日本では車賃の標準があり官廳の取締りも有つて無交渉で乗用しても馬鹿に法外な賃銀を要求されることは近來餘りに耳にせないが、支那では未だ中々油斷が出来ないとの事である、黙つて乗つて仕舞つて後から幾等と聞けば三十分位乗せても五、八十錢の馬鹿値をねだる車夫は珍しくない云ふことである、獲れる丈とらうとするのが苦力根性である。車を降りてから高いとか敗けよとか言ふものなら不腹の眼を怒らせ大口あいて齒をむき出し噛みつき相な恐ろしい劍幕で喰つてかゝる。斯うなると大抵の紳士は體面上耐へられず言ふが儘に出して去ると云ふ。又反對に

値段を決めずに行く處迄行つて降りるなり五錢か十錢放る様に投げつけて劇場か何所かへ飛び込んで仕舞ふ等逆十を

使用して車夫を苦しめる徒輩も有ると聞いた。車夫が人を見て値を踏む呼吸は日本も支那も同じで有るから乗車する前に賃銀を交渉して乗り下車した場合いさくさ無く車賃を拂ふて可憐なる彼等苦力をして奴隷視せざる様庇護してやらねばならぬ事であると感した。

其後天津、濟南、青島の各地を巡りて何所も同じく人力車の多い事を知つたが北平の人力車に比べて車も車夫も著しく下等で朋友の談をつく／＼感ずるので有つた。

序に一寸車夫の經營振りを述べて見よう、日本の人力車夫は一定の營業として各自鑑札を請けて曳くのであるが支那には貸車商買屋が有つて五〇台百台大きくなると一人で三百台も五百台も持つて居て是が公安局や警察の許可を受け車には夫々番號を附し常に車庫に格納して居て一日幾何かの損料で賃貸をする、車夫は一日分づゝの損料を仕拂つて營業するので有る、現在では一日一台六、七十仙位で借りて都合がよいと二元位の稼ぎをする者は幾等も有ると云ふ事である、當今北平で一日三十仙も有れば苦力の生活としては豊であると云ふ。



斯んな譯

で終日引つ張り廻した人力車を餘り掃除もせずに戻す其の翌日は又少しも安く賃せる車屋が有れば其所から借ると云つた調子で有るから自然車も破損する汚れもする客の奪ひ合

ひで初終殿り合ひもするから車體の破損も多い譯である、日本の人力車の様に唯一の商買道具として大切に磨き立てゝお客に快感を與へやうなど云ふ考へは毛頭ない、従つて

人力車に乗る客は極めて近距離の歩きか自動車電車の通じない方面乃至は餘り程度の高からぬ輩の専有物であるが、只一つ不審なことには近頃支那でも電車、自動車の發達は目覚ましいもので有るが夫れと並行して此時代遅れの人力車も決して退歩せず愈々需用されて行きつゝあるは珍現象である。

最後に一言せんに支那旅行して名勝見物に處々此人力車を利用することの至便なるは言ふ迄もないが、支那の車夫は日本の車夫に比べては如何にも程度が低いのと、又氣質も分らない故に車賃を仕拂つて釣銭を取る等と云ふことは餘程面倒を生ずる場合が多いから旅行中は常に若干の小錢を準備して居つて下車すると同時に釣銭の必要なく約束の車賃をサラツと仕拂つて退けることが肝要である。

(十五) 萬壽山より西山に遊ぶ

イ、通行税の關所

六月十七日午前十一時北平を退去せらるゝ金杉博士一行にお別れした予は北京飯店に楠本博士を訪れた、此所には楠本博士の知人春名正修氏(北平にて醫師開業、小年に亘り大の支那通人である)自動車を持つて出迎へ午後の半日を

して何れにか案内し度しと來訪され、萬壽山並に西山の外遊ときまつて予にも進められてお供することゝなつた、直に飯店に晝食携行の準備を命じ正午近く一行三人自動車にて西直門を出で京綏線の車站を過ぎ楊柳の並木を潜り平々坦々萬壽山に向つて走る此邊の畑中到處土饅頭の墓所多し城外約二里程の處に到つて自動車かピタリと止まる、何事かと聞けば此所は通行税關の事務所である、青天白日の帽章に茶褐服を着した税關吏が出て一元の通行税を徴し之と引替へに通行免許



群の駝駱るす復往に平北りよ方地古蒙

證を交付す、春名氏曰く通行税は有効期限當日限りにして自動車一臺に付一日一元、人力車は二錢、自轉車は無税である自動車と人力車と通行税に於て差額の甚しい理由は支那では未だ自動車を實用具と解せず富豪の贅澤



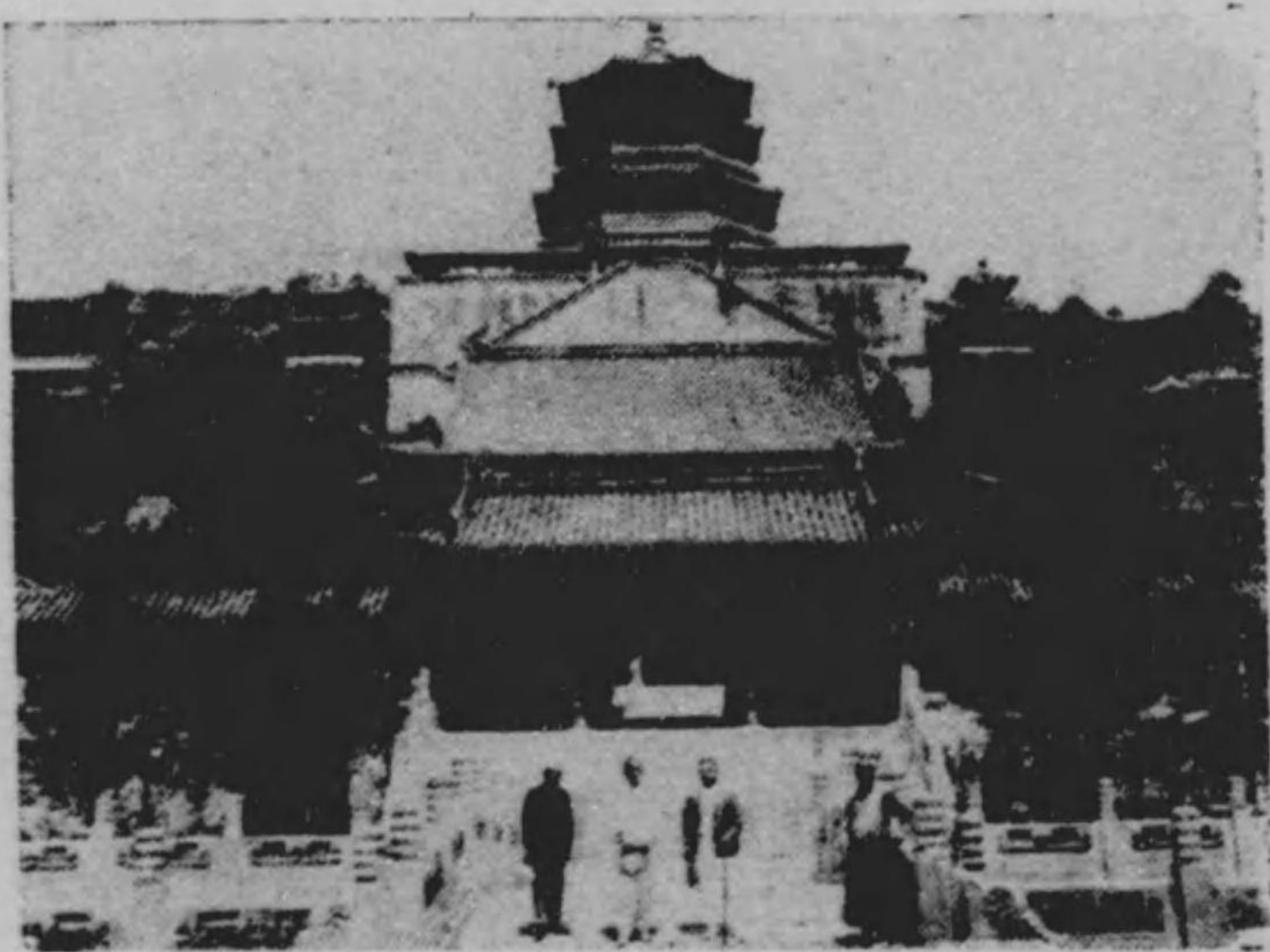
物置の銅青る在に庭前の殿壽仁

器物と見做して課税し人力車を眞の實用具として僅にお印し程の税であると云ふ夫から又二、三里行つて第二の關所を通る此時は先刻の免許證を一覽に供し無税で通行し得られた、即ち本省(河北省)内は一日中何所迄走つても其の免許證が

有効である途上屢々奥地より北京に往復する駱駝の群れを見て蒙古地方の情景を偲ぶ。

ロ、萬壽山の參觀

程なく萬壽山に下車した、直に中國人案内者一人を備ひ春名氏通譯の任、當らる、牌樓前の木陰に自動車を休ませ參觀券を購ひ十數名の警護兵が晝間着剣にて見張りする前を通つて入門すれば仁壽殿と云ふがある、皇帝の臣下に謁見を賜ふ處にして其兩廂が賜饌の室で有つたと聽く次きて



影撮念記の行一るけ於に前閣香佛

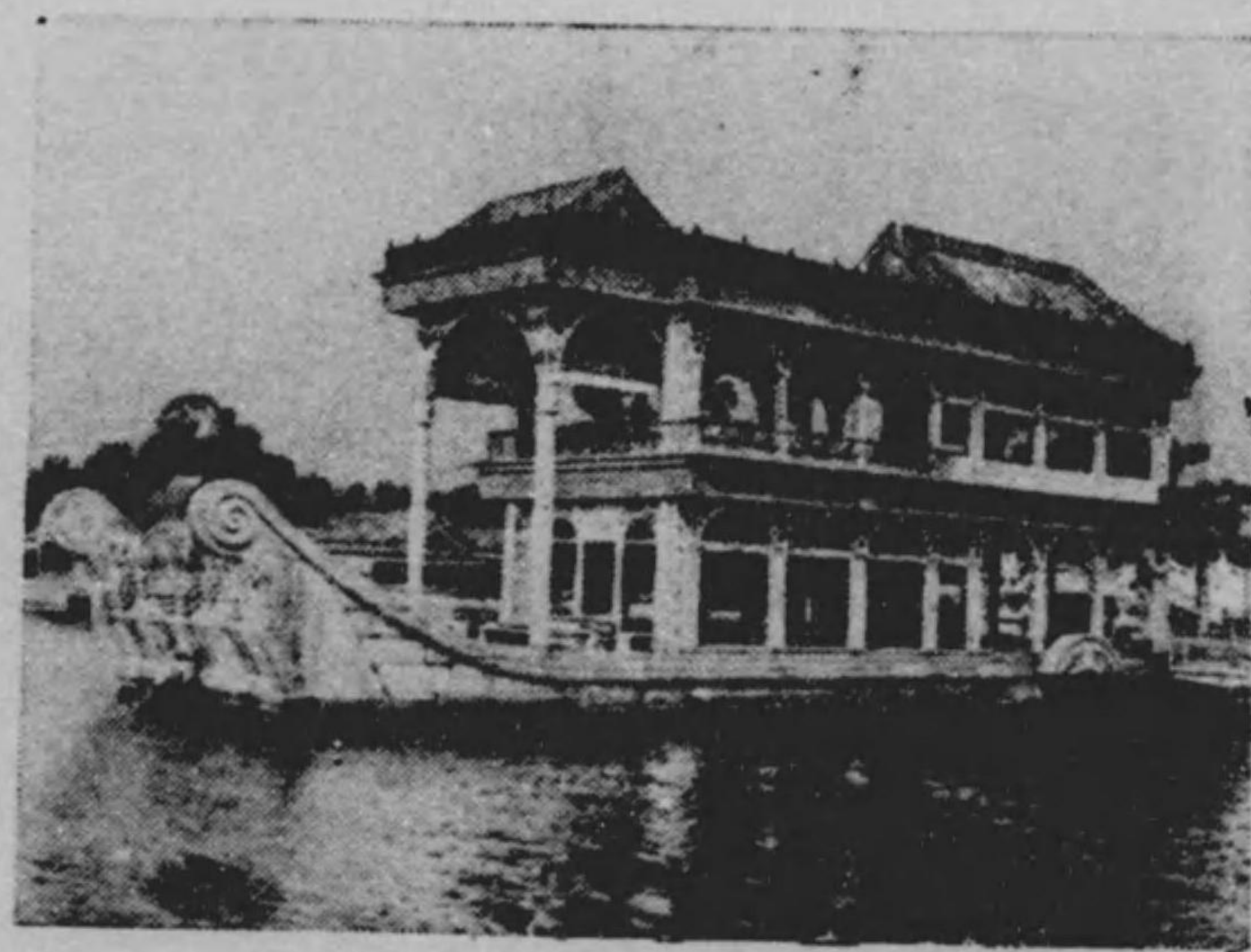
玉瀾堂を経て昆明湖畔に出づるれば蓮の湖上に水清きを賞でつゝ樂壽堂に入り翠柏の二株を眺めて後支那の二里(日本十二丁)あると云ふ夕雲凝紫の廊下に差しかゝる。抑も此所萬壽山頤和園、位置は西山の麓にあり北平を距ること三十華里(日本の五里)元は甕山と稱し乾隆十六年清游園と改めて離宮を置かれたり。歷朝機餘遊行の地となりたるも英佛聯合軍の爲に圓明園(萬壽山と北平の中間に有つたと聞く)の離宮劫灰に歸して夏宮を失ひ遂に西太后は海軍擴張費を茲に投じて萬壽山を改築し頤和園と命名され夏秋此所に萬機を總攬せしと云ふ民國三年以降入場料を徴して一般の拜觀を許すことゝなつて居る、今日予等の一行が到着せし時門外僅かに數臺の自動車ありしのみ又參觀中楠本博

士の知友の一行二三名と西洋人数名の一團外に中國人二三の參觀者を見たるのみにて園内極めて寂寥なりし、長廊下を渡りつゝ左に湖光を望み右に假山を仰ぎつゝ進む廻廊は丹碧を用ひて花鳥山水を畫きたり佛香閣前に於て記念の撮影を行ひ排雲門に到れば更に入観券を求めよと促され券を購ひて入門す各殿の畫棟梁彩、繪畫等悉く當代名士の筆に成らざるはなく殿前に龍及び鳳の香爐を眺め塵埃に汚れ疊る硝子戸を透して玉座を覗けば西太后の眞影中央に高く奉安しありて目の當り其英姿を見るの心地する、次いで乾隆帝建立の大理石の牌樓前を通り階段を昇り寶雲閣に到る、小屋皆青銅材にして些の木材を用ひざる巧妙なる建築なり



紫雲閣の透し見下廊長の里華二

しは一驚の外はない閣内には是亦青銅の角卓子あり量目幾何ありやと問へば人夫



石紡の湖明昆き如がるべ浮

八名位にて漸く地を切ることを得らるべしと答ふ、下山して湖邊に出で廻廊傳ひに西端寄瀾堂の傍らに浮べるが如き石紡の樓上に昇りて湖上を眺めつゝ休憩所の椅子を便よりて冷し「サイダー」の一杯眞に蘇生の想ひす、石紡は西太后夏涼の

殿なり石紡屋上より四方を一望すれば山には、燦然たる佛香の高閣虚空を凌ぎ伏せば波光青蓮と映じ眞に山紫水明の境と謂ふべきである、又湖を距て、前方遙に龍王廟を望めば長橋湖心に浮べるに似たり、獎に行かんとする玉泉の白塔西山一帯の連峰と共に一幅の畫中にある休憩後湖上に竿さして龍王廟に揚陸し長橋の中央に立つて萬壽山の全景を恣にし青銅製寶物大の臥牛並龍王廟を參觀終りて出門すれば多數の警護衛兵異様の眼に予等を注視す予は此時支那軍



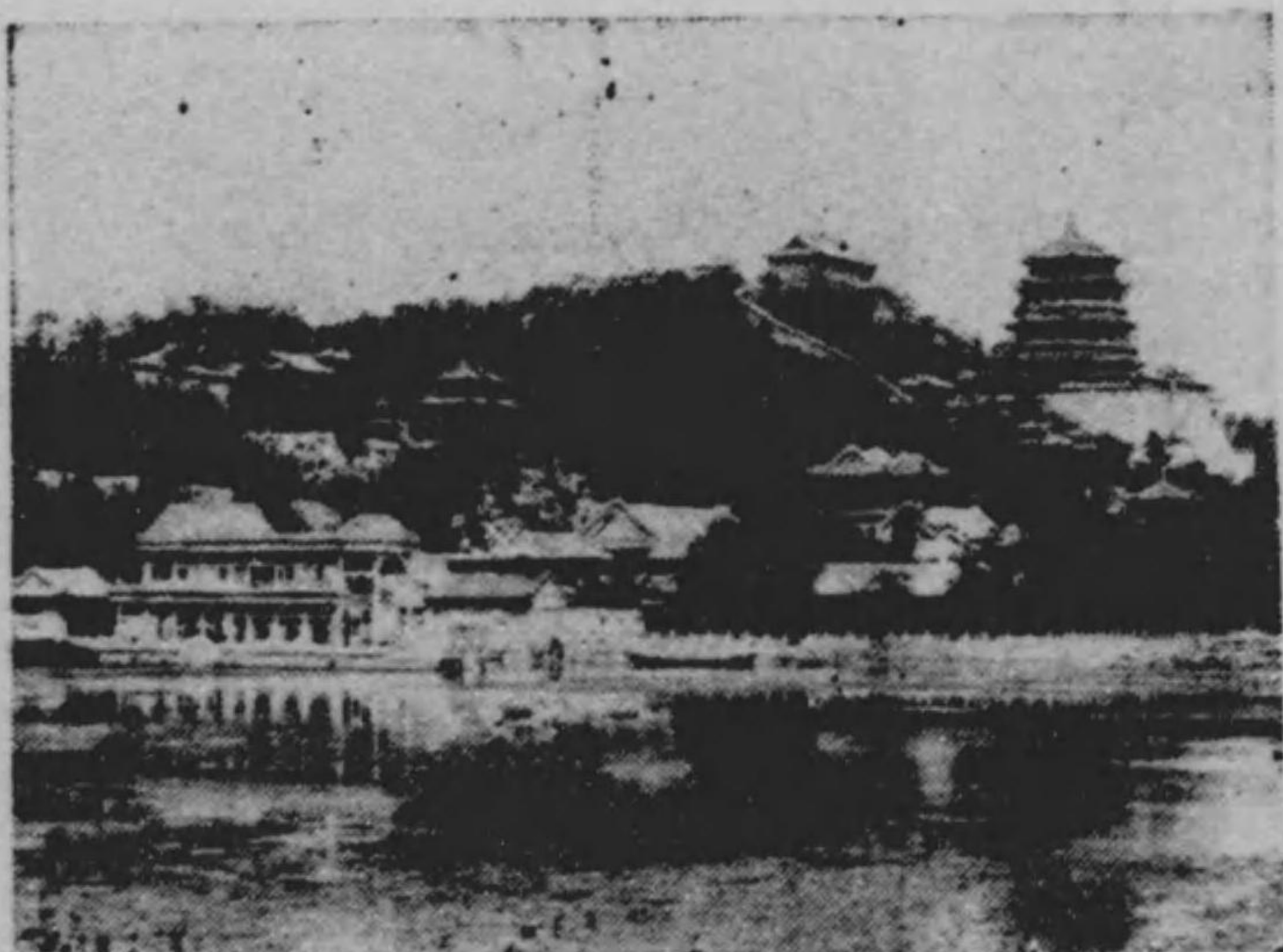
閣雲寶の銅青屋全

隊の服装並攜帶する武器は如何にと意を注げるに警護十數人の服装は略同一なる

も兵器は日本式、歐米式、露式等數種を携へ居りて頗る不整頓なるを見たり。

へ、玉泉山下に晝食を喫す

更に自動車により玉泉山に到り池畔の岩隙より滾々湧出する清水に先づ咽喉をうるほしつゝ携行の晝食を喫す、支那の旅行は日本の名所見物と違い行く先き／＼にて料亭を利用して食事をとらうとしても是は一寸困難である北平とか天津とか都會地に遊ぶ時は何の不自由も感じないが一步郊外に出るには辨當携行に限る、旅館では多年の經驗から便利な携帯食器を用意して居る、手提鞆の革を木質に直した様な式で蓋の裏側には洋食皿の三枚位と「ナイフ」



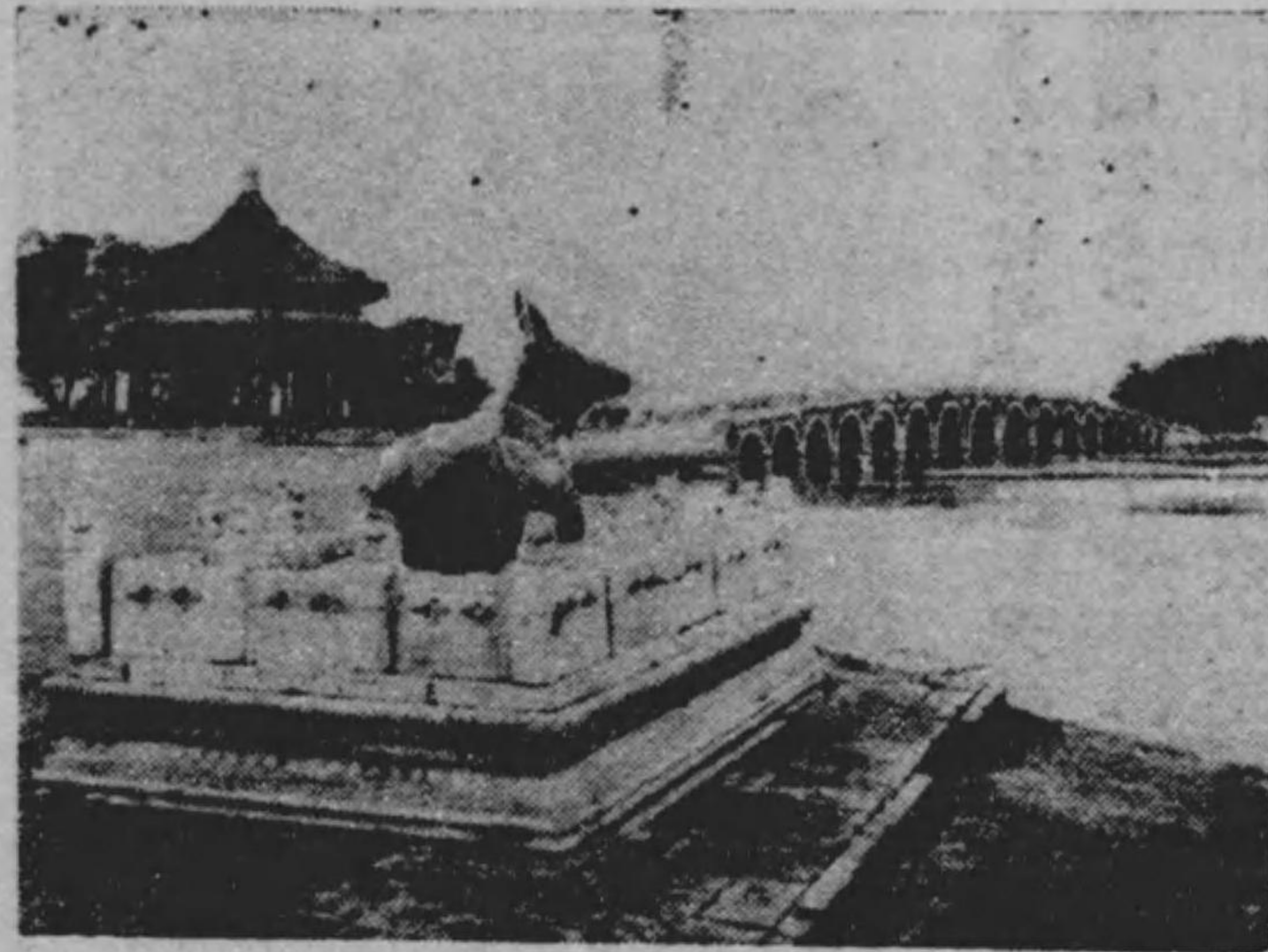
景全山壽萬るた觀りよ湖明昆

た此水は古來幾千歳絶へず洶突(湧出)し其の水質の良好なること渡支以來他に之を見ず、支那に行つて生水を呑んでは忽ち腹を痛めるからとは先覺體驗者の戒めで予も又渡支以來堅く之を守り來つたが此玉泉のみは安心

オーク「ソース」紙等を收め、深い方には紙包又は折りに入れた料理や「コップ」水、「シトロン」等を巧に詰め合せて蓋を閉ちて提げる様に出來て居る、行き馴れない言語も氣心も判らない料亭などに行くよりは遙に優る愉快な晝食であつた。

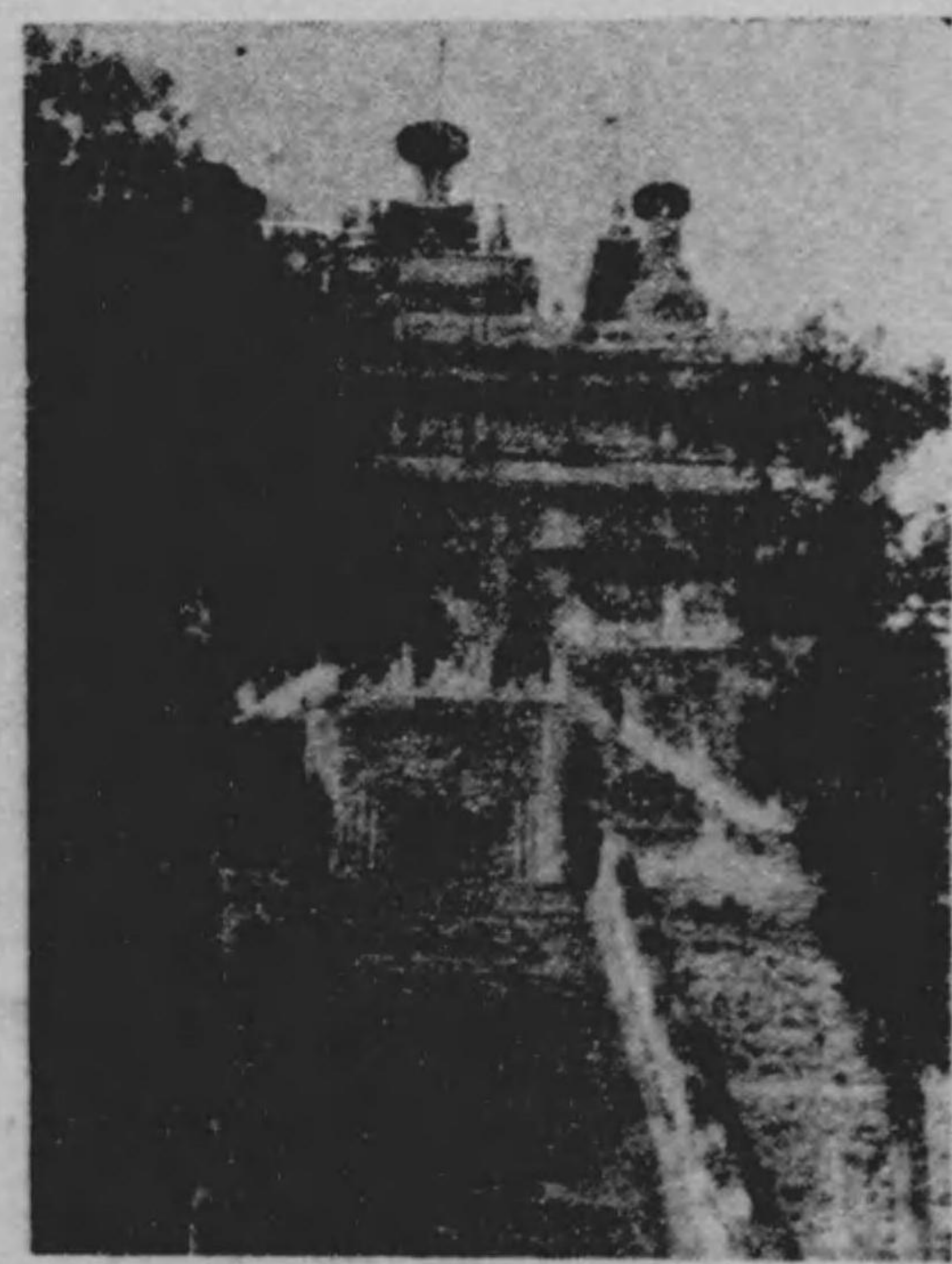
玉泉山は萬壽山の西方僅かに四華里(日本の漸く二十數丁)西山の麓にあつて康熙十九年此山に離宮を設け澄心園及び靜明園等と改稱されたとある今予等は「コップ」を右手に玉泉の味を試み

して満腹するので有つた、此清泉は東流して今朝見て来たる萬壽山下の昆明湖となり更に遠く北平太液池に注ぎ運河となり遂に白河に注ぐもので有る玉泉の水源に乾隆帝の筆になれる『玉泉趵突』の碑が有る、山上一つの緑樹なく此初夏の候猶赤禿山なるに山下此玉泉を見る甚だ奇なる感あり山上に七重の塔屹立して當山唯一の目標物であるが時間に豫猶なくして登山せず更に自動車によりて西山に向ふことせり。



昆明湖の上の橋長と物名の牛臥

ニ、西山(碧雲寺)
玉泉山下趵突の邊りに腹と涼味を養ひ英氣に充てる一行は更に餘時を利用して西山に走る北平の遙に西方連綿せる山脈を總稱して西山と云ふ此地に八大寺ありと聞くも時間なくして之を巡らず直に碧雲寺に至る碧雲寺は



碧雲寺の金剛寶座

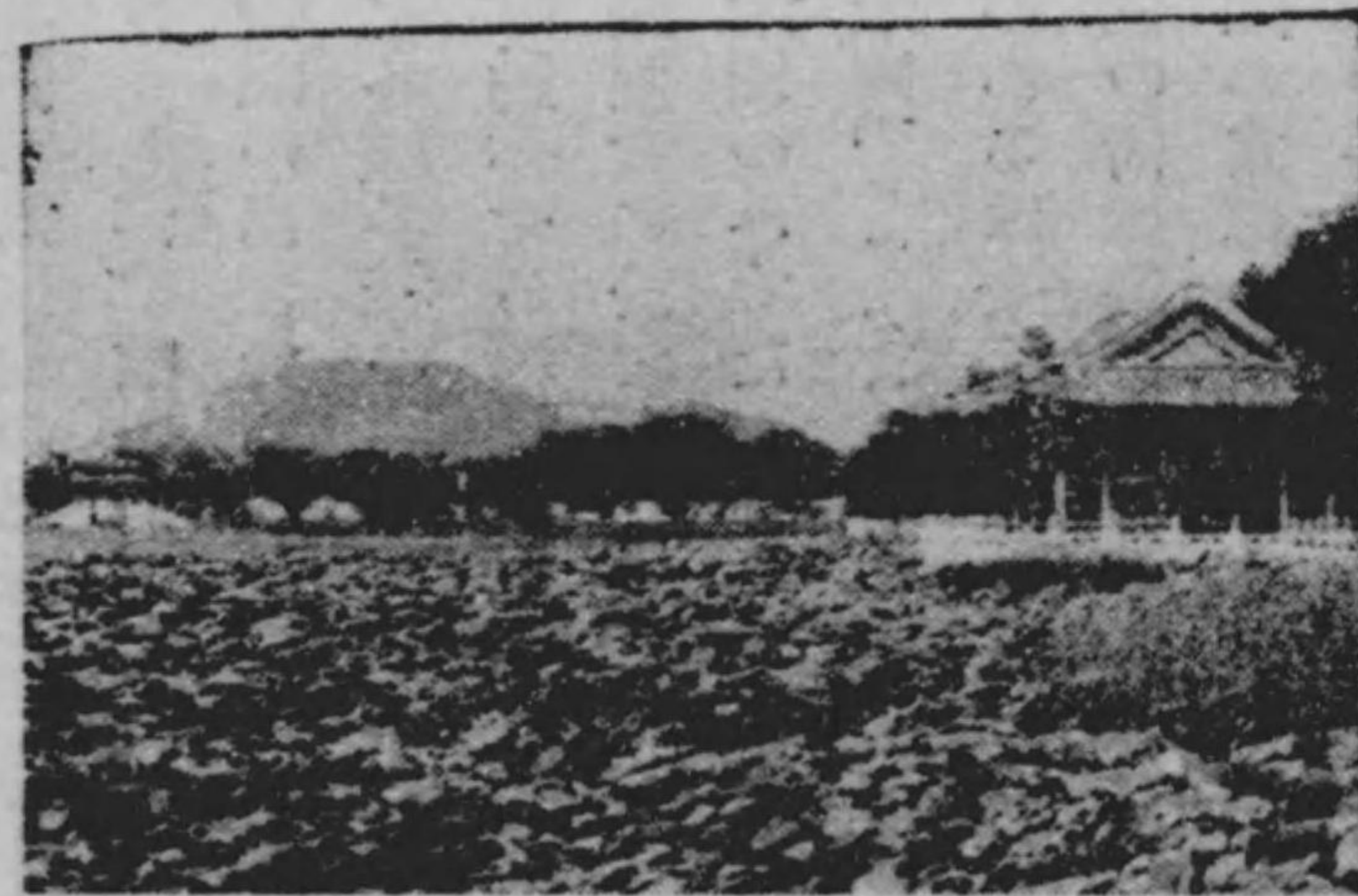
香山の北にありて明の正徳中内監千經之を拓きたりと傳ふ結構輪奐の美を極め視

模雄大である、寺中特筆すべきは羅漢堂の五百羅漢にして塑像の精緻眞に迫るものがある、本堂の後方石段を昇れば大理石の牌樓があり、其奥 乾隆帝御製に係る塔碑二基を見る其の右なるは見馴れざる蒙古の文字、左碑は漢文を以て其由来を刻す、更に又石階を昇りて金剛寶座に達す所謂妙高臺是れである、足を止めて説明を聴く、曰く乾隆十三年西藏の僧侶印度須彌山の金剛寶座の模型を携へ來りて此所に建立せるものなりと寶座は大理石にて作り背面には黒玉の佛像を安致し、莊嚴なもので有つた臺上に昇りて視線を放てば今來し玉泉山の高塔及昆明湖の青蓮波光を望み又前面の眼界烟霞濃く北平城かすかなり、境内には中山大學

の寄宿會中學校、青年會館天然療養院等あり、療養院中に目下中國人富豪の妻女肺疾になやみ久しく入院し居れりと門前の揭示に曰く、此患者を診療平癒に到らしめらるゝ醫師には特に五百元の謝禮を行ふ旨が記されてあつた。民國十四年三月十二日三民主義の大達者中山孫逸仙氏北京に於て病没後本年五月に到る迄境内本堂の奥深くに其遺骸を安置せり爲に碧雲寺の名一層天下の耳目を新にせりと本堂前の壁面には孫文の遺書大書せられて人目を引く。

ホ、臥 佛 寺

碧雲寺を出で、山麓に沿ふて東走すること約三十分臥佛寺に達す唐代よりの古閣にして王朝の代る毎に其稱を變じ兜率寺、昭孝寺、洪慶寺、永安寺等の稱へ有るも後堂に大なる臥佛の像あるを以て俗に臥佛寺と云ふ、其佛像は二丈餘ありて周圍に十二菩薩が有る臥佛の足の方に臺が据へられ中國近代の名將黎元洪、袁世凱、段祺瑞、張作霖氏等の献納に係る臥佛の皮鞋を陳列せり何等かの信仰より斯く名將の奉獻盛んなるの由来有るならんと察せらる、寺前蓮池の一隅より清水湧出す住者に乞ふて茶碗を借り楠本博士以下一行冷水を吸みて暫し休憩の上一路北平に歸城す。北平郊外の清遊は滞在の關係上此半日を以て終りしも萬



昆明湖の上より望む玉泉山の塔

事不案内なる予等をして懇篤なる東道を以て深き印象を與へられたる春名先生の御厚意を感謝し永久忘却せざるものである、北平郊外には尙ほ湯山の温泉、明の十三陵、萬里の長城等著名の古跡枚擧に遑あらず、縦には長い歴史を有し横には廣大なる國土を有す、然して上 以來幾多の茫漠たる神秘的遺話と歴世二十幾朝の起伏興亡の跡は今日僅々半日の清遊に於てさへ其感慨多きに堪へざらしめる、况んや亞細亞の大部四百三十萬平方哩の大國土を抱擁せる此地

中國の津々浦々を踏査せば學びて得る處蓋し甚大なるべし我が國諸名士の振つて此大國巡遊の行を盛ならしめられんことを切望する次第である。

(十六) 衛生展覽會を觀る
六月十八日から二十四日迄北平市中山

公園に於て衛生展覽會があると云ふので全市中は到る處限なく宣傳ビラが張り出され平素入場料を徴する公園、天壇其他北平の名所は一齊に開展中入場料を全廢して人出を呼ばんとする計畫で電車も特に割引して居る始末是れ丈け聞いても偉い力の入れ様である、寸暇を割いて一巡して見た、陳列は四棟の館に一應整頓した飾り付けであるが、内容の充實よりは玄關前の構へが大袈裟で有る、二間四方もある様な大いさの蠅を作つて竿頭に高く取り付け、其蠅が兩羽根と足を擴げ其の各足尖から長い糸が垂れて足先の下端には人の首が幾つも吊してある、即ち蠅は足先を以て食物を踏にちり傳染病菌を傳播して遂に人命を持ち去ると云ふ宣傳である、先づ此の蠅の生首吊りに一驚させられて入門したが内部の陳列は極めて幼稚にして、恰も日本の小學生が學藝品展覽會を催した程度の陳列で有つた、中て日本の島津製作所の作品に成れる人體各部の模型が陳列され極めて古い時代遅れの物では有るが非常に物珍らしく人が集つて居た日本では近來男女生殖器の模型等は風紀取締上からも公然の陳列を許されないが、此所は一向にお構ひなしで際どひ處を見れば見よがしに陳列してある見物の老幼男女人山をなして此陳列に集つて居るのは異様な感じであつた、其

他北平市衛生局の出陳としては特に筆を下す程の價値を認めざりしが、唯一つ感じたるは「ロツクフェラー」財團協和醫院の出陳である、文明洋方醫術と支那在來の漢方醫術とを各種各様の對照によつて劇的場面の如く總て人形を用ひて動作せる模様を規律整然陳列せられ有つた事は東京邊の展覽會に於ても曾て見ざる立派なもので有つた。北平には米國のみでなく日英獨佛等列國の衛生機關備はれるに獨り米國「ロツクフェラー」財團の陳列のみ此展覽會に出陳せしめあるは余等の頗る遺憾に感ずる處で有る、名は北平市主催の衛生展覽會なるも其内容は殆んど「ロツクフェラー」病院の宣傳の様に見る事も出來た。斯かる催しに對しては列國の各醫院とも共同して此舉を盛んならしめ以て中國人をして廣く衛生思想の向上を計ると共に仁術の爲に施設せられたる列國の醫院をも紹介し然して是等各醫院の後援の下に開催せられしならんには此展覽會をして一層意義あらしめた事と思料するもので有つた。市衛生局に對し一考を望む次第である。

(十七) 疾走的名所巡禮

滞在の餘日切迫せる予は中山公園の衛生展覽會視察の序を以て宮殿周圍の名所を疾走的に自動車見物を行ひお土産

話の種を漁つた。

イ、景山

宮城の北、地安門内、樂山の如き一名勝あり景山と云ひ又一つに煤山とも稱す五峰より成つて中央の峰が最も高い見ることから人工の假山である、史實によれば「元の世祖都を北京に定むるや築城に先



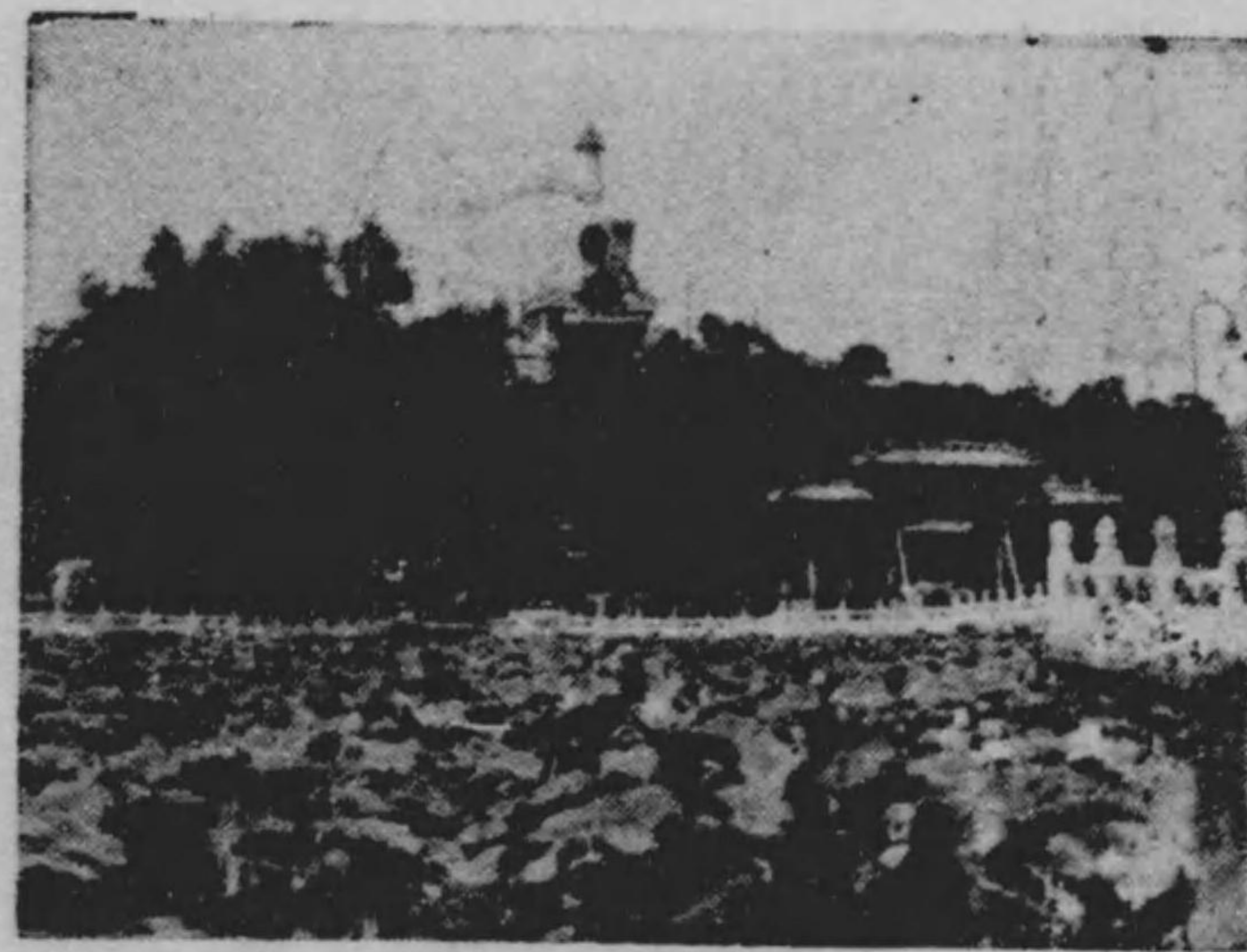
石炭埋め成るれ景山の全景

立ち敵に包圍を受けたる場合燃料の欠乏を慮り石炭を山積して籠城の備へとなし土を盛りて之を覆ひ樹木を移植して之を萬歳山と稱せり」とあり山上に燦爛たる大小五樓あり景勝の妙實に北京城内唯一の色彩である、然して景山が支那の歴史に逸す可からざる一事は明朝末期の大悲惨事にし

ロ、大液池

宮城西華門の西に苑あり之を西苑と云ひ中に大液池あり

俗に三海と稱し北海、中海、南海と別稱す、中海は最近迄大元帥張作霖氏茲に總統府(大元帥府と云へり)を置き南海に副總統府及び國務院を設け四百餘州の政令皆此池中より發せられたので有つたが今は一夕の夢と去りて一般の參觀自由となつて居る。大液池は單に宮城の勝地なりとして看過すべきにあらず、即ち北京は古來飲料水に乏しく一旦緩急の際如何にして多量の水を得んかとは築城家の頗る苦心せし處なるべく茲に於て元の世祖萬壽山昆明湖より一條



大液池の蓮と白塔

の水道を引き以て貯水せるものが此大液池にして煤山、炭海の燃料と共に、往時築城者深慮の程を推するに足るものである北海に白塔あり昇りて北平城内を指呼の内に收め暫し明日の別れを惜んだ。

ハ、鐘樓及鼓樓

自動車を馳て地安

門内鐘樓に行く目下活動寫眞常設中にて見る程のものなく樓下道路に近く往時の鐘が赤錆の儘捨てたるが如く放り出しである。

鼓樓には北平博物館あり陳列の模様を見んとて登樓せしも何等の得る處なく樓上より北平城北部一帯の風景を一瞥して退館す。

ニ、雍 和 宮

雍和宮は一名喇嘛廟と云ふ市の東北隅にあり、予は宮殿黄瓦の由来を聴くにつけ此喇嘛廟が宮殿と同じ黄瓦を用ひたるを頗る不審に感じたので訪ねて見ると雍正帝の大統を繼承せらるゝ以前の府第で有るからだと云ふことと有る、然して雍正帝登極の後、西藏及蒙古統治上の政策より自邸を喇嘛に喜捨して喇嘛の靈場とし政策的に宗教を利用し遂に今日迄西藏蒙古の統治權を掌握したもので有るゝ黄瓦の由来さこそと領かれた喇嘛廟には西藏及び内外蒙古の僧侶を併せ約三百名の多きに達すると云ふ事である、清朝時代迄は毎月一定の銀米を交付し寺境の維持に充てられたと聞くも中華民國の今日は國費多端の折り柄其補助あるや否、僧侶の服装及び予等に對し秘藏の佛像等をひそかに押し賣りせんとする態度を見るにつけ寺内の生活果して如何なる

く改良し市の風致を向上せしめつゝ有りし折柄ら偶々這般の變に遭遇して都を落ち遂に近きて飯らず心ある者此完成せる道路を歩みては張作霖氏の生前を追想する者多しと。

(十八) 飯島博士晚餐

六月十八日出發の前夜院長飯島博士は特に予の爲に院長邸宅に於て生島事務長以下事務室一同を招き晚餐會を催さる、全く水入らずの會合にして忌憚なき意見の交換を行ひ十二分の歡を盡した席上院長は終始今回の祝賀會が萬事順調に進行せし事並進るゝ本部より兩博士外予等祝典に列せしのみならず、餘興其他心盡しの努力に對し衷心感謝の意を表し且つ今後の事業發展に裨益あらしめ度しと一層各員の奮勵努力を切望せられ歡談時を移し夜更けて辭去した。

(十九) 北平出發天津に向ふ

六月十九日午前十一時楠本博士と共に北平出發天津に向ふ生島氏同行す、飯島院長夫妻、西村副院長、春名醫師夫妻、夫婦病院長夫妻並令嬢、糸川藥局長事務員多數見送りあり一句に近く此地の風物に接し尙ほ幾多の希望と研究とを未完の儘に名残り惜くも天津に向け發車す車中に湯爾和博士あり楠本博士の旅上を慰めらる。



喇嘛廟の寺と住僧

状態にあるや餘所ながら憂慮に耐へざるものがあつた予は頃日來北平宮殿に萬壽

山昆明湖に天壇に各所の名所古跡を參觀する毎に乾隆帝時代の隆昌及び西太后の驕奢等に一驚の外なし然れども國の王者一人の驕奢は此大國四億の巨民に分割される負擔は蓋し九牛の一毛だに感ぜざりしならん故に皇室の榮華と共に四億の蒼生又其の度に安んじたるものなるべく、此れに反し外觀統一を標榜しながら内面群雄割據的にして到る處首領の専横を見るが如き現時に於ては民の生計到底昔日の比にあらざるを歎ぜざるを得ない。

ホ、張作霖氏の遺物

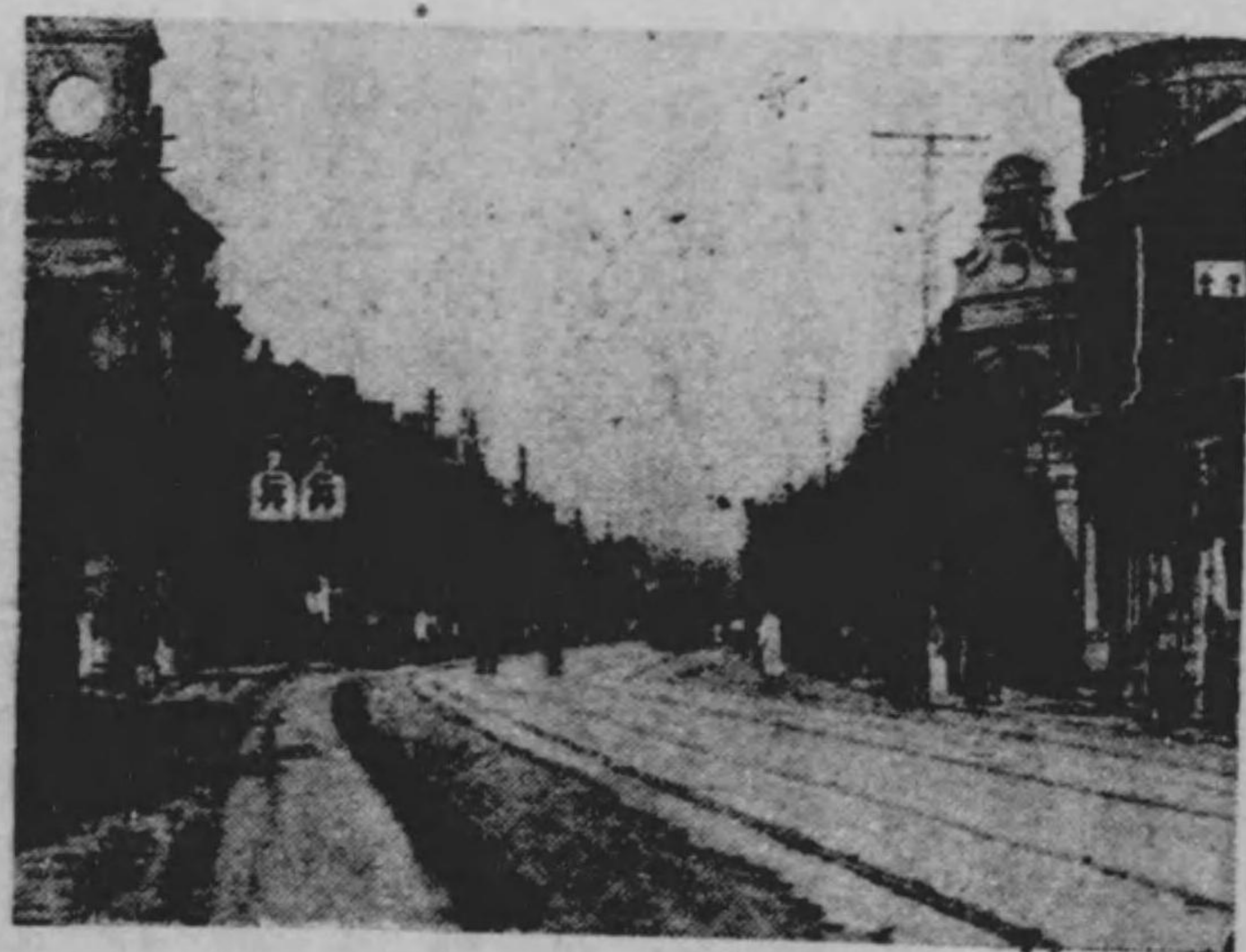
張作霖大元帥として此地を治めし以來近來の主權者が會て行はざりし市中道路の改修整頓の諸工事をして近年著し

(二十) 天津の二日間

午後三時半天津に下車直に大和「ホテル」に投宿旅装を解く間もなく天津日本總領事館に岡本總領事、田代領事其他を訪ひて挨拶す。

(一) 天津の自動車見物

天津日本總領事館の厚意により提供せられたる自動車により楠本博士と共に夕景の涼味を浴びつゝ天津市街の自動車見物を行ふ天津の古い歴史を此所に語るの暇なきも此地が外國貿易場となりしは咸豐八年(我安政五年に相當す)英佛聯合軍が北京を攻略し續いて清國政府と締結せるものが所謂天津約條で有つて以來開港せられ北支に於ける唯一の商埠地となり、逐年隆昌今日を爲して居るもので有る、北京を我東





日本大人和公園の一部

京と假定せば天津は正に横濱港に比適し大阪に對する神戸と云つた如き感じである、塘沽上陸の記事にも述べし如く近年白河の水深埋り航行の便杜絶せるは天津の發展を阻害せること甚大であると云ふ

市街は支那町と各

國租界とよりなり支那市街は銀行、商店櫛比し遊客雜沓を極め、又租界地は全く支那を離れて歐米にでも行つたかの感じがある、租界は天津車站に近く露國租界あるも目下は支那に回收せられて特別區域と稱して居る、白河に架したる橋を萬國橋と云ひ橋の左岸一帶に英佛の二租界が有り又其下流に沿ふて獨逸租界が有るも、是亦歐州大戰に支那の參戰と共に埃國租界を併せて回收し特別區制を敷いて居る又一方萬國橋の上流には伊太利租界がある。



天津支那街の鼓樓

沿ふて日本居留民團、俱樂部公會堂等宏大なる建物があつた、衛生生活の動寫も

日本租界は支那街と英、佛租界の中間に立つて形勝の位置を占めて居る、建築は殆んど洋風にして日本町へ往つた感じは一寸浮ばない唯日本人が多いのと和服姿の通行者や子供の戯れを見受けて懐しく直に留守の子供等に思ひを馳せるので有つた、日本租界は東京建物會社の建築に成れるものが多いと聞く、大和公園は日本租界にあり明治三十九年の創設に係り園内池水を穿ち樹木を移植し、音楽堂を建て、日本人唯一の慰安園である園内に日本居留民鎮守の社がある天照皇太神を祀ると聞き參詣す、異郷の地にありて鳥居をくゞり神社に詣でた時は何となく温いそして一種の力強い守護の柱に辿りついた想ひで清がくゞしい、公園に

此所に催す豫定である。

自動車は走りつゞけて競馬場の入口迄行つた時黒い顔の印度人の番人が居て棒を横に振つて見せた入場を許さぬ知らせと判つて引き返した。

支那街には市内電車も開通して居るが予等の滞在中は從業員の罷業とやらで一際運轉せず線路上所々に見窄らしい車體が追つ放り出された様に捨てられて有つた。

其他天津には「ピクトリヤ」公園、北清事變戰役者將士碑各國の租界公園李公祠（李鴻章を表彰せる建物）其他あるも時間に餘裕なくして立ち寄りず。

(2) 天津居留民會公堂に活動寫眞の映寫

予は午後六時より居留民團員今井重胤氏の晩餐に招ぜられ十年の舊交を温む氏は予と現役を共にし退職以來此地に渡り今日に到れる者である、氏は予の先輩にして久しく中日外交の爲此地にあり崇敬措く能はざるものである。

午後八時より豫て應諾せる豫定にき階上公會堂に於ける民團主催の衛生活動寫眞會に臨む、北京醫院よりは記念繪葉書雜誌等多數を携行し入場者に贈呈せり、主催側よりは岡本總領事、民團長以下各幹部日本人居留民無量七百餘名堂に溢れ、觀覽し得ずしてむなく歸る向きさへ多く非

常の盛會を呈した、午後八時半居留民團行政委員會長上野壽氏開會を宣し生島北京醫院事務長醫院の歴史と今回記念祝典の様を述べて事業の宣傳演説を終り撮影に入る、天津に於ては以前より我同仁會醫院の建設を熱望し居る折り柄各地同仁會醫院の光景は總て居留民團美望の的となり歓迎せらる、續いて腸チフス豫防の映畫は人情劇的作品にして予は是が場面に付て壇上活辯振り良しく説明を試み觀衆一同熱心に且つ絶へず拍手を以て迎へ極めて盛會裡に午後十一時半終了を告げた。

北平、天津兩地新聞は一齊に今回の催しに共鳴し二段に亘る紙面を割きて此盛況を發表し併せて時節柄公衆衛生施設の完備を促した程で有つた。

(3) 天津の醫療機關

天津には居留民團有志の共立に係る共立病院及び元陸軍々醫正田村俊治氏の經營になる東亞醫院其他個人開業の醫師多く植民地としては稀に見る醫事機關の充實せる處であるといふ、蓋し中、日兩國人は勿論各國租界のある關係上殆んど地球上の各人種を網羅し加ふるに打ち續く支那の政變動亂を避難して中國人の富豪多く此天津に集中し人口稠密となり従つて醫事機關の充足を促し來れるものならん

共立病院に於ては目下位置を變更し十數萬圓を投じて病院の改築擴張を計らんとし既に建設中でありと云ふ、予は僅々二日間の滯津中、我日本居留民一般の意向として天津に於ても北平同様大規模なる同仁會醫院の建設を熱望し居ることを聞き又要路の數氏とも面談其意の存する處を聴取した、此希望たるや決して昨今の問題にあらず在留民永年の宿望なりと云ふ惟ふに幾多の人口を抱擁せる大商業地天津に於て同仁會醫院の建設は其必要なきに非らず、殊に北京醫院との地理的關係に於て其姉妹醫院として特に然りである、唯同仁會醫院の如き大規模の醫院を此地に建設することによりて數ある既設病院、開業醫師等今後の存続如何を先づ以て一考慮に置かざる可らず、同仁會の事業目的は既に衆知の事に屬し居ると雖も此地に同仁會醫院を建設せば勢邦人醫の同士の討的現象を來さんこと火を見るよりも明なり故に如斯大病院の建設を要求せんと欲せば大小の既設病院を打つて一丸となし經營することを得ば其發展は見るべきものあらんと信するものである。

(4) 岡本總領事午餐會

六月二十日 天津總領事館に於ては楠本博士を主賓とし又衛生活動寫眞の慰勞として生島北京醫院事務長並予等

の爲に岡本總領事官邸に於て午餐會を催され主催側よりは岡本總領事、田代領事、白井副領事、上野民會長松本理事出席外に田村東亞醫院長共立醫院久松醫師等倍賓として列席あり時餘に亘り歡談午餐の後辭去す。予は夫れより生島事務長と共に天津駐屯軍司令部に石毛主計正を訪問關口氏其他舊友に面談午後二時旅館に引揚出發準備を爲す、午後六時の出發を前に三時頃より一天掻き曇り忽ち雷雨襲來旅館は一齊に雨戸を閉ちて隱氣此上なし旅装を整へ終つて入浴後の時刻を利用し到る處へ音信の走り書きは落ち付のなき旅心地であつた。天津の二日間と標題には据へたが實は正味一日と三時間計りで天津を味合ふには如何にも日子が不足で有つた、天津は北支那に於て日本との關係は最も特筆すべき歴史がある見様に依つては北平以上かも知れぬ、在留邦人の數に於ても又劃然たる居留地の存在に見るも又邦人の投資經營の事業に視るも余は此地を僅々一日ソコソコで離るゝことは遺憾に思はれたが旅行の豫定上止むなく出發することにしたが滯在約十日間の北平と同じ様に深い印象を残した、夫れは不圖も民團の依頼を請けて衛生活動寫眞の撮影に當り居留民各位の多數に知られ又余の先輩後輩の成功者方より款待を受けた事でも有つた。

九、津浦線の一夜

(1) 沿道雜觀

六月廿日午後六時天津發の夜行にて濟南に向け出發す田代領事、天津居留民團員、舊友今井重胤氏共立病院醫師の方々等十數名の見送りあり、出發前俄然の大雷雨ありて九十七八度の炎熱忽ち一變し雷雲散するに連れ一際涼しく津浦線上の夕景心地よし。豚舎から追ひ出された豚の群集が部落の空地に見へつ隠れつ跳ね廻るあり、あかしやの並木葦の叢、デコボコに見ゆる土饅頭の數々一つとして支那情緒ならざるはない、驚いたのは鐵道沿線に墳墓の土饅頭壊れて中より寢棺の曝露せるが儘に放置せる哀れさを望みては英靈長へに地下に眠らず地上に彷徨ふの感ありて氣の毒。チラ／＼と視線に轉回する部落には竹椅子を持ち出して夕涼みらしき團樂の睦も見へ、又頗る不潔相なる裸體の童が戯れて水に入るあり豚追ふあり人か家畜か見間違ふ程のきたなきも居り文字通りの豚兒なるか、甚しきは汽車の走るを眺めて悠々閑々野雪隠に餘念なき土人の數々を眺めては部落の足元頗る物騒らしい、面子を重んじ見會を張り容姿を尙ぶ民國人も寒村に入りては斯くありやと車中よりその生活の一端を視る廣漠たる原野に未だ刈り残された黄金

色の大麦、大豆、高粱の青緑と織り交せて汽車の走りに「ダングラ」の響を畫く様に見ゆる。余は常に都市を離れて郊外に旅する毎に農事を思ひ出すが支那の田舎に來ると内地の旅とは全然正反對の感想が浮ぶ即ち日本では斯かる急傾斜の土地迄も能く根氣強く耕地にして維持されて居る斯迄に不整地を利用致々として耕作するも尙食料難を叫ぶ日本に引き代へ支那に來て見ると何故にかゝる沃野を放擲同様の捨て作りをするかと思ふ程の荒作である、走れど盡きぬ平野の耕作が如何にも見すばらしい汽車から見ると何所人家がある様にも思はれぬが彼の廣い平野を悉く開墾して如何様にも作付けして居るのは大した努力では有るが廣漠たる土地に徒に耕作を仕付け辛ふじて種子の回收位する様な耕作物が幾等も見へる、是よりは耕地を狭くして優良作物で收穫の増加を圖る方が適當ならずやとさへ窺れて成らない、然しながら都市の近傍にある耕作は實に優れたもので我々日本人の取つて學ぶ可き幾多の耕作を見た。

(2) 乗り心地よい汽車

楠本博士と手荷物整理を終り休憩室に入る、日本の旅行では見ることの出来ない廣軌鐵道のゆつたりした車室に轉廻自在な安樂椅子が車窓に近く交互に据へられ中央が通

路になつて居る。乗客は思ひ／＼に腰を下して自由の姿勢で煙草を吸ふあり、讀書にふけるあり、車外の展望を撞にせるなど日本汽車の一等にても到底味合ふことの出来ざるのんびりさである、時々押つて来る「ボーイ」の手拭も渡支以來漸次馴れて顔も拭けるしお茶も呑める、汽車は進んで楊柳青、良王莊の驛を過ぎ並木を出で、並木に入ること暫らく、靜海縣の驛を過ぎて日完く没し明月東天に高し、山海は見へされど「あまの原ふりさけ見れば」と仲鷹を氣取りて大陸の月を仰ぐこと暫し。

(3) 食堂に船客と奇偶す

夕食間近になると乗客は思ひ／＼に食堂に行く米人らしい母子三人(母と令嬢二人)の姿が現れた、よく／＼見ると神戸から天津迄長城丸に同乗した四日間の船友で有つた大阪に永らく居住して親子共に日本語をよくし船の甲板でも時々談笑した記憶は未だ極めて新しい、森は言葉をかへすには居られなかつた。

先達中は大きに失禮と會釋すると。

どちら迄と聞き返す濟南へ一旦下車し近日中青島を経て日本へ歸ります彼方はと問ひ返せば。

上海に行き見物の上米本國へ歸國致します。

もう日本へはお出になりませんかと問へば。子供が成長しましたから一旦引き揚げます。

それではお機嫌よう。
實に上品な綺麗な言葉で有つた、外國人に對しては言語の一端と雖人情の上に將亦國際信義上に及ばず影響は蓋し大なるもので有らう予も今は外國にあることを忘れてはならぬ。

汽車の食堂は日本のそれと大同小異、料理は洋食と支那料理何れとも好み次第である廣軌だけに食卓も廣く片側に二人づゝ向き合つてゆつたり有る。そして料理の出来栄へが又上々で愉快においしく食べられて氣持ちよかつた注文次第で客室にも運んで居るが當世モダンの婦人連は下／＼食堂に詰めかけ盛んに語りつゝ食事をして居る車中では支那語は判らなくとも車掌、「ボーイ」共に簡單なる英語に通じ旅客は非常に便利である。

(4) 寢臺を退治す

休憩室に語ること久しく楠本博士少し休んで見ようかと椅子を立たる予も續いて寢臺に入る、博士は昇り悪い洗面臺を足場にして寢臺に昇らるお互に南京虫を想像しつゝ恐は／＼寢臺に就く、トロ／＼として眠り忽ち覺む首筋と腕

頻りに痒ゆし、スハ南京虫ござんなるかと起き返へつて身搦へたり睡眠不足の眼をキツト見張り南京虫の出没如何にと蝦蟇の姿勢よろしく固唾を呑んで窺ふ間に二重枕の間より龜の形にさも似たる極めて小なる一虫を發見し吾が身の仇思ひ知れとひねりつぶして寢につく。

翌朝目覺めて語れば楠本博士には遂に襲來せざりし由、何所迄も醫は仁術にして國境なく虫一匹の敵だになき乎。

(5) 濟南に到る



橋鐵の河黄るな大長

廣野に暮れて廣野に明け然して尙ほ廣野を走る何と支那の偉大さよ吾等は休めど汽車は休まず一夜を南下して濟南既に近かし黄河の鐵橋は這般動亂の爲に破壊せられ以來運轉不能に陥り一歳を経て最近辛ふじて開通を見たるも未だ修繕完了

せず多數の工夫を窓下に眺めつゝ最徐行にて渡橋す、廣漠たる原野に蜿々赤染める黄河の濁流無心に流れれば平坦なる一條の流れに過ぎざるも予は是を空に見逃す事は出来なかつた。不圖近松門左衛門作、國性爺合戦の一幕を車中に思ひ出させたので有つた、聞くらなく其昔、「明朝の遺臣鄭芝龍、日本の九州平戸に落ちて老一官と名を改め日本の女を後妻として一子和藤内を擧げ其成長するや親子三人連れ立ちて故國に歸り、曾て鄭芝龍が日本に亡命の際明に遣せし愛嬢錦祥女が今は時めく大將五常軍部鄭公の妃となれるを聞き之を便りて此黄河の上流に昇り親子對面の上、邯鄲公を味方として明朝再興を企てんとする花も實もある歌舞伎十八番の一幕である。錦祥女が化粧殿の庭より捨つる遣水が末は黄河に流れ入ると、親の願ひの叶ひしを化粧水の色を流して知せる場面」支那の車中に歌舞伎の一幕さながら目に見るが如し、惟ふに今の陝西省咸陽の邊りにありし阿房宮に邯鄲一族が住みしものには非らざるかさすれば錦祥女が化粧の水は黄河の支流渭水を流れて黄河に入りしものならん既に其頃にも我が日本民族が支那との交通實に如斯し吾人の大いに立たざる可からざることならん。夫れは格別として、日本人其他外國人の多くは未だ不穩なり

として天津より海路を青島に迂廻するもの有り聞きしも予等は確信を以て鐵路を試みたり予等の車中には楠本博士と外に三井の社員一名の日本人を見たのみ、日本國民が支那を研究し文化の普及と善隣の實を擧げんとする目的の爲に施設せられたる事業は相當に多く又農工商貿易等の方面より觀るも力を致し致せることを信するものなるも實際支那を旅行して餘りに日本人旅行者の僅少なるを痛嘆するものである、望むらくは今一段と日本人をして渡支の機會を多からしめ度いと思ふものである。

天津より濟南迄の行程二百二十哩十二時間の豫定なりしも約一時間半を遅延せり、聞く處に依れば徐州會議並軍隊檢閲を名として北上する蔣介石氏の先發として唐生智其他南方要路の士活動の爲に北平、天津、濟南地方は軍隊の移動繁く殊に蔣介石氏北上に對する沿道の警戒振りは可成り大規模にして宛ら戰時輸送を思はしむ程の軍隊を見受けたり、是等の結果は一夜の間に予等の列車をして時餘の遅延を生じ午前七時を過ぎて濟南に到着した。

一〇、同仁會濟南醫院

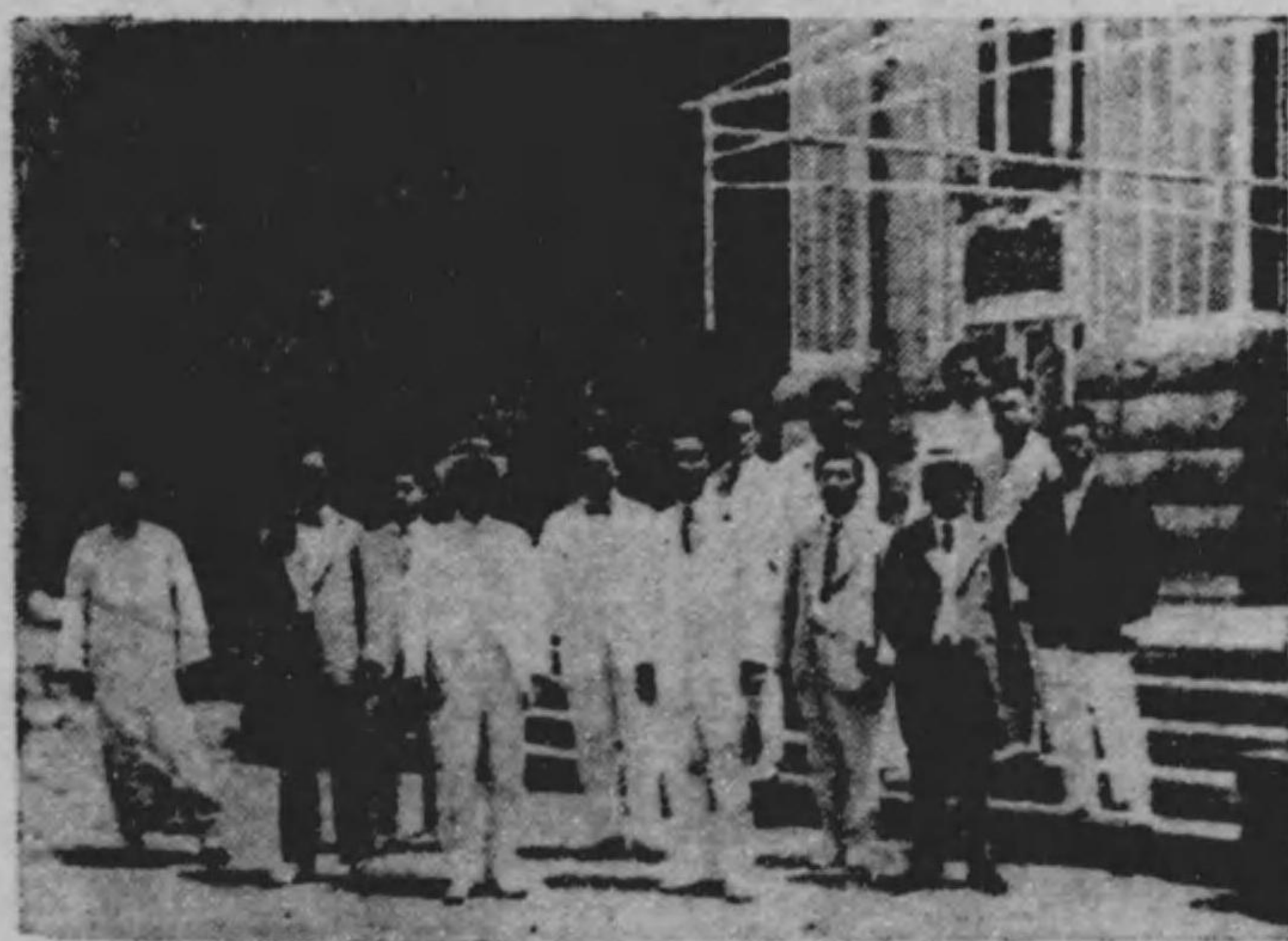
庚申俱樂部の晚餐と楠本博士離濟

六月二十一日午前七時半津浦線の濟南車站に下車す同仁

である。

我同仁會濟南醫院は濟南名所中屈指の建設物たり又最も完備せる醫療機關である殊に第一代院長牧野博士以下各幹部積年の努力は此所山東の首府に於ける邦人の代表的文化の施設として誇るに足る可く人種、國境、黨派を超越して崇拜の的となり濟南を中心として八方幾百里此濟南醫院と牧野徐兩院長の名を知らざる者なしと迄評されて居る。

綠濃き蔦の繁りに包まれたる大洋館の支關を入れれば廊下の兩壁に高く回生謝恩の意を表現せる病氣平癒者の心からなる寄贈額處狭まき迄に掲げられ院長以下の努力と其の功績を證明して餘りあるを見る各醫局は潤澤なる室を抱擁し又其内容頗る完備し廊下傳へに數個の病棟並立し二百有餘の病床を整備されて有る、殊に院内には製氷並飼牛搾乳の事業を獨立經營せる等は衛生思想の發達遅れたる此地の施設として誠に其當を得たるものと云ふ可きで有る、屋上に昇りて其外觀を見下すに二萬七百餘坪の敷地に四千七百餘坪の建築物を配列し見るからに大規模にして我が日本内地に於ても蓋し其類例少なき完備の病院たるを信するものである、這般突發せる濟南事件の際本院が皇軍並居留民の爲に盡したる功績は國民一般未だ記憶に新らたなる處である



會濟南醫院々長徐昌道博士、千田醫長初め各醫長、甲田事務長以下事務員一同に迎へられ一旦鶴屋旅館に休憩の後濟南醫院に出頭す、楠本博士は徐醫長の案内にて院内を巡視せられ晝食後玄關前に於て一同と共に記念撮影

夫れより市中を見物

せらる、其夜六時より楠本博士と共に商埠地庚申俱樂部に於ける院長以下の催しに成る晚餐會に招せられ支那料理の卓を圍みて款談時を移す、既にして午後十一時に間近く楠本博士は沖井醫員東道にて青島に向け出發せらる院長以下多數の見送りあり、予は先般北平到着以來毎日の訪問に祝賀會に講演に見物に常に随伴し多大の感化を與へられたる慈父の如き博士に名残り惜しくも茲にお別れするので有つた因に楠本博士は青島、大連、旅順の見物を終へ歸朝の豫定

二、濟南市内見物

(1) 商埠地

六月二十三日休日を利用して甲田事務長東道にて市中を見物す、濟南は山東省の中央に位置し人口約四十萬と算せられ商業中心の都會である、市街は城内と商埠地とに區別せられ我居留民の多くは此商埠地に居住し従つて總領事館、小學校、醫院、正金銀行諸會社等も又此商埠地にあり其外津浦線並膠濟鐵路兩車站の建設せらるゝ有りて城内舊市街に對し文化的新市街の感を抱かしむ。

抑も此商埠地は支那が獨逸の勢力を制する爲の一策として自から進んで開放したる貿易居留地で有つて他の居留地



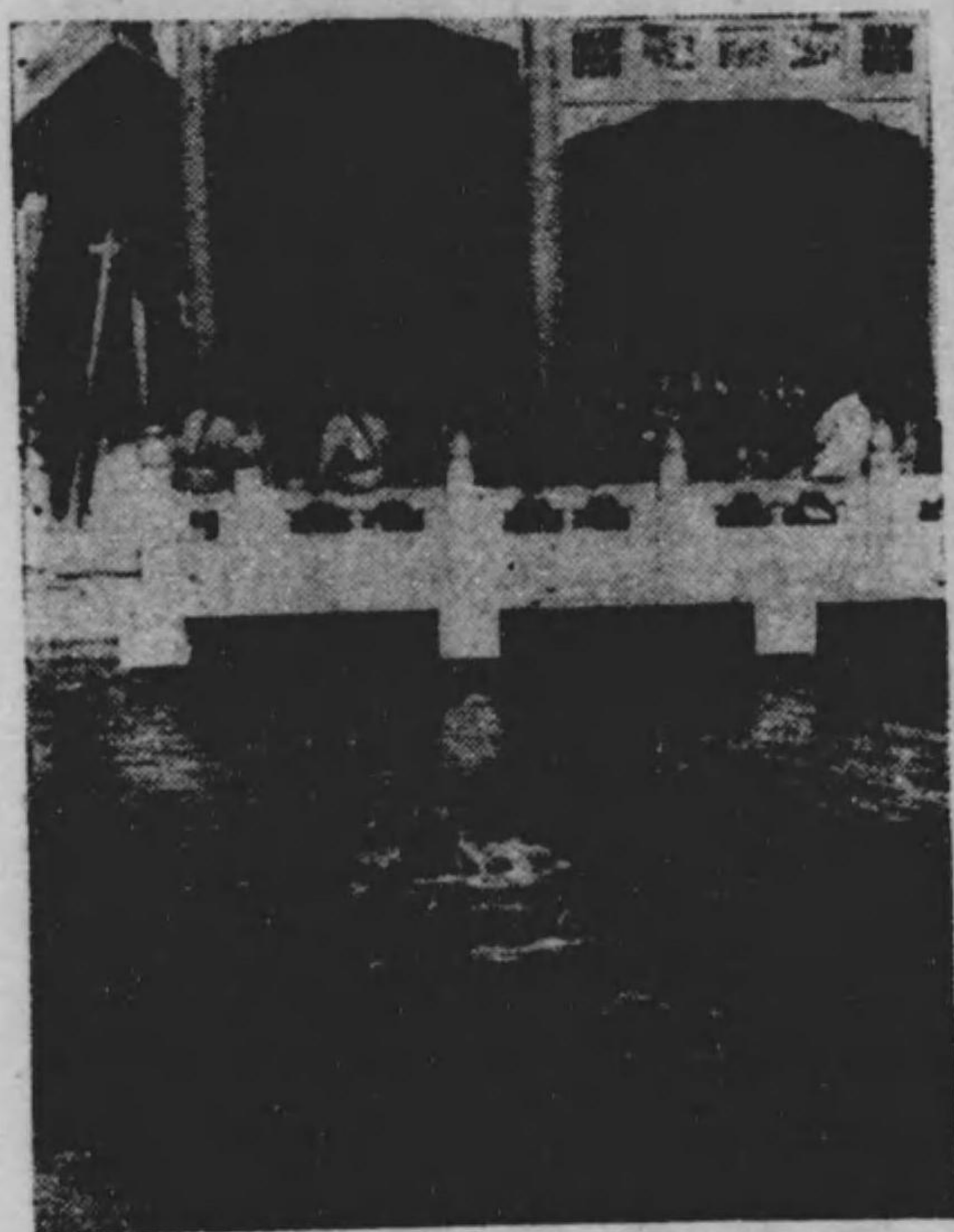
濟南南門

の開放とは全然其動機を異にして居る、北平天津等を先に觀たる予には市中特に

見る可きもの多からざるも這般濟南事件出兵當時の市街戦を想像し皇軍苦戦の程を顧み破壊された城門の下に暫し佇むので有つた、是等城門、城壁の破損箇所は悉く竹矢來繩張等を施し一般人の通行登門を許さず此附近徒らに反日宣傳貼紙の跡のみ目立つて居る、今日は朝よりの濟南晴れに風さへ少なく九十五六度を示し流汗額に瀧なす暑さであつた。

(2) 趵突泉

城内の狹隘なる市街を自動車にてウネリクネリ乗り廻して趵突泉に達す、趵突泉は城内南關呂祖廟の境内に在る湧出泉の池である一名瀑流とも呼ばれ池中の中央に三ヶ所の



濟南名所趵突泉の湧出

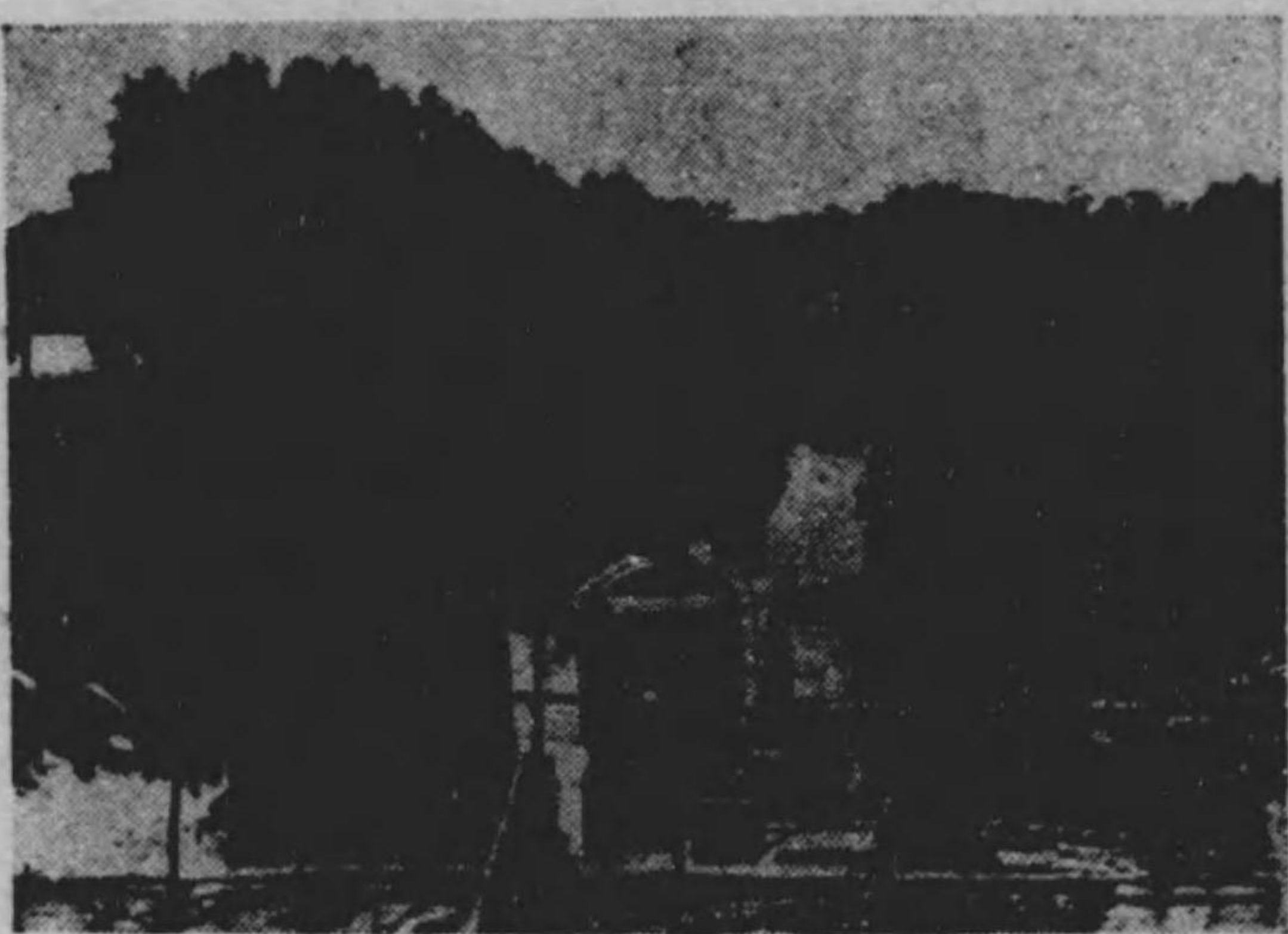
湧出泉ありて池水面上に約一尺餘り「モコリ」モコリと噴出

る其水量豊富且つ清澄なる事を誇りとし茶の良否を品評するには此水を使用すべしとされて居る、濟南商埠地一帯特に我同仁會醫院の水質は石灰分過多飲料不適の感あるに反し城内到る處此良水に恵まれたるは羨望の的である、境内無數の飲食店、市場、演藝場等あり古來濟南の一名所として遊客雜沓を極む此所にて記念撮影せしも遂に送り來らず。

(3) 大明湖

轉じて大明湖に到る大明湖は濟南第一の勝地と稱へられ城内西北隅一帯を占むる蓮池である湖は東西十八丁、南北十二丁餘、其形蜿蜒して見透すこと能はず、湖上無數の遊覽畫舫あり伴はれて乗る、畫舫は底部の廣ろい屋體船で中央に卓子を据へ椅子にて圍み周圍の硝子窓を開放して池上の涼風を迎へ一應整然たるもので有る、椅子に寄れば熱い「タオル」に水瓜の種、茶と云ふ順序にて支那料亭極付きの接待がある。

やがて畫舫は一人の船頭により岸を離れ池水青く葦と蓮の繁げ間に竿さして湖上巡りを初む大明湖に五ヶ所の名所あり歴下亭(李白杜甫詠謔之古蹟)李公祠(李鴻章の祠堂)其の他北極廟、滌泉寺、張公祠等ありて一々畫舫を横着け上陸見物するのである船つきには必らず二、三の乞食居住



して居てうるさく付き纏ひ錢兒子一文をなげつける如くに與へて畫舫に乗るので有つた湖上一週に約二時間を要し暑熱を凌ぐに好適の見物で一行満足す、湖上の小舟に支那人の釣に餘念なきを見る、大明湖には魚族多く此漁魚亦濟南名物の一

つとなつて居る。

其他濟南を中心として千佛山、泰山、曲阜等名稱多くあるも予の滞在は此見物を許さず。

一一、徐院長の招宴

六月二十五日夕刻より徐院長邸宅に於て予を主賓とせる晩餐に招かれ甲田事務長以下事務、藥局總員列席支那料理の卓を圍み和氣藪々款談に夜更けて辭去す。予等畫間市中を見物して何等不穩と感ずる事情を發見せざるも夜に入り

ては人足極めて少なく午後八時を過ぐれば各門戸を閉して人影を見ず街路には巡警並警邏兵の通行を見るのみにて幾分不氣味を感じた。

一三、見聞多き膠濟鐵路の一日

六月二十六日濟南醫院々長以下職員多數に見送られて濟南出發青島へ向つた、支那の汽車は何處で乗つても時間に遅延ある體驗を續け來りしが此汽車のみは定刻午前六時三十分を寸刻違はず發車したのは流石で有る。

(1) 驛の税關

驛のホームに這入ると廣場に先入順で携行荷物をズラリと並べさせ片端から行李其他の中味を引き繰り返して一々税關の検査がある僅かの時間に氣忙しく随分嫌やな通關で有る。予の荷物はほんのお印だけの検査で有つたが夫れでも細文けは解かされた、聞く處に依れば南京政府樹立後一層面倒になつたと云ふ。

(2) 嚴重を極めた沿道の警戒

鐵路の警戒は各線共嚴重で有るが取り分け膠濟鐵路は又一層の警戒振りである、驛々には車站警察署が設置せられ汽車には護車警察が乗り込んで居る車站警察は列車が停車すると概ね車輛一個に一人位の割合で「ホーム」に配置さ

れ執銃者と帯刀者が交つて見へた是等が皆汽車の方に向つて配列よく直立する。

一方護車警察は常に車室に乗り込み汽車の警護に任じ停車すると乗降口に出て列車を背後にし車站警察と相對向して警護の姿勢をとる畫間と雖着劍武裝のいかめしさは此國一流の大袈裟と見られた。

此いかめしい警戒に加へて更に又陸軍の警戒が一層素破荒しい這般皇軍の引き揚げに際し詰め替に來た南方の憲兵と在來の山東憲兵が混淆して各驛に屯在して居る而も之が又車站憲兵と護車憲兵とに分たれ警察同様の警戒振りを示す尙ほ此外に驛に通ずる道路には着劍の支那兵が驛の外圍を警戒し一驛毎に數名の歩哨を見受けた、憲兵、警察の服裝は總て茶褐詰襟で左の肩章には「膠濟」右が「番號」を記し護車警衛は日本の車掌の如く左腕に赤色の腕章を巻き金字を以て「護車」と書いて居る、予の車室は最後より二輛目の一等室である停車場中車窓より「ホーム」を見渡せば乗降客より多い警護の數がズラリと並んだ様は如何にも奇觀で有つた。

(3) 沿道の早魃

濟南を後にせる汽車は北岡、黃豪等蓮池多き中を縫ふて

て於て其設備に於て又其内容に於て私共日本人の誇りとする處である、尙ほ夫れよりも何よりも牧野と云へる名醫が彼の館に收まつて居ると云ふ一事である牧野先生が御自分の一身を眞から此土地の爲に將亦中國人の爲に打ち込んで働かれたと云ふ其精神があつた濟南醫院を一大名物にした以所である。

と語つた、其の濟南大名物の牧野院長は職を辭されて今は第二代徐院長の代となつて居るが希くば此名聲をしてより以上の光輝あらしめられん事を切望して止ざるものである湯川氏は話終つて周村に下車した、訣れに望みて單獨旅行者の車室に於ける携行品及び身の廻り用心に付懇に諭して去つたのは心嬉しく感じた。

(5) 進歩著しき支那の蠶業

周村を中心に山東省一帯には可なり養蠶が普及せられ日本人の投資も相當莫大なもので有ると云ふ、「あかしや」「ポフラ」並木の外に桑の高木繁茂せる様は宛ら信州甲州路の旅を思はしめて愉快であるが最近支那全國到處養蠶の發達は目覺しく我が獨專的蠶業を脅かすもので有ると車中通人の語るを聽けば。

國民政府確立後の支那蠶業の發達は著しき進歩を來し、

走ること暫らくにして早魃の平野にある周村に着す、周村は人口五萬餘日本人も多く膠濟鐵路沿線中屈指の都會である、此附近一帯近年稀れなる早魃にして農作物枯死し牛馬の脊により辛ふじて水を運び瘦せ勞れたる高粱の生命を維持するに窮々たる様は氣の毒に耐へず今頃は五、六寸に伸びる可き大豆が未だ蒔き附けさへも出來ず茲半月慈雨無くば本年の凶作思ひ半に過ぎずと同行の日本人は語つた。

斯かる早魃の平野を縫ふて走る汽車の爲に巻き起す土煙は謂ゆる黃塵萬丈の長蛇を引き車室に舞ひ込み室内の不潔さ目も當てられず「ボーイ」の「タオル」も今日丈けは何より有り難く持つて來るのを待ち遠し、感じた、十一時五分張店を過ぎ青州に着し此所にて濟南よりの護車警衛は一齊に交代と見へ混雜の間に引繼を了したとくで有つた。

(4) 評判の能き濟南醫院と院長

周村に行くとして濟南より乗車したる一日本人あり旅は道連れとて忽ち話かける九州熊本の産二十有餘年來山東を股にかけて生活せる大の山東通人湯川得一氏と云ふ目下周村に住む刺を交換すれば語を續きて曰く。

同仁會濟南醫院は山東省唯一の名物である病院の外観に

各方面より注目されて居る、そして其勢力は今や日本の蠶絲業を脅かす現實の問題と成つた點に驚嘆すべきものがある、即ち蠶種の病毒検査を實行し、養蠶組合を組織し、稚蠶共同飼育により三齡に及んで各個に配付し其後は女子指導員を附して監督せしめる是等女子指導員は何れも三民主義を體して獻身的努力を爲す態は到底我國にては見られない活躍振りで我日本の婦女子にも見せ度い程である。

改良種は日本の形式を採用し今後三ヶ年を出でずして在來種を悉く全廢し新種に代ふると云ふ意氣込みである次に支那には從來秋蠶と云ふものなく秋桑は全部羊の飼料にされ來つたのが、年は之を利用して秋蠶を行はんとし現に蠶種二十萬枚を冷蔵準備し居ると云ふことである。

製絲法も又從來上海式を一掃して是亦日本式を採用し群馬社、共榮社の使用せるが如き器械を設け煮繭、繰絲分業の域に迄進歩し米國に對する輸出數量は年五萬俵を超へ米國市場に於て我が獨占の貿易を脅かさんとして居る我國の實業家農村の青年諸氏をして一度此實情を觀光せしめ度し云々。

此話は從來奢侈に流れ遅緩し輸入品に甘んじ切つて居る我國民の以て龜鑑とすべきものであると信じた。

(6) 沿線の主義宣傳

北平、天津方面に於て盛んに見たる『打倒馮玉祥』の宣傳は全く其陰だに見ずして次の如き文字の貼付されたるを各驛に目撃す。

打倒一切帝國主義、取消不平等條約、收回一切租借地、革命成功萬歲、以て此地方の思想如何を窺知するに足る

(7) 青島に入る

女姑口驛を過ぐれば膠州灣を右に望み無數の帆船鏡面に浮み夕風の長閑さを畫く、日輪西原に低く車内に電光冴へ渡り青島の山々次第に近く滄口、四方、を経て大港に到れば巨船碇泊して黒煙を吐き市中雜沓織るが如く青島の殷盛を思はしむ斯くして午後七時四十分の定刻を違へず汽車は青島に安着す。

同仁會青島醫院よりは長澤事務長其他打ち連れて出迎はる、塘沽上陸以來既に三週余日百度に近き炎暑苦熱と戦ひ黄塵の都と部落を巡りて今日此海濱に到着せばさながら夏季冷蔵庫に入れる心地を覺へ行李の底深く收めたる下着を取り出して纏ふ等清涼の別天地に遊ぶ心地で有つた。

るを思はしめた。

廊下の患者待合より診療室、特に完備せる藥局の廣さを見て階上に昇る建物の規模大且つ堅固に掃除と修繕の行き届けるは氣持ち良し、各醫局を一寸つゝ覗き第一病舎に到る。

第一病舎には内科及産婦人科の入院患者多く個室には赤ン坊の聲も聞へて多忙を極めて居る、地下室に下りて田邊藥局長、野口氏の説明により藥物、並醫療材料の格納を見る是亦整然として恰も陸軍の物品庫當時其儘の感あらしむ夫れより各病舎、炊事、醫學校其他附屬建物を一巡す、當醫院は獨逸が三百萬『マーク』の巨費を投じて建設し膠州灣總督府病院として、誇れる時代の跡未だに瀝然たるものがある、大正十四年外務省より我同仁會に移管されて一層諸般の完備を見るに到り、第一代鈴木院長並現栗本院長以下各員の努力により内外人士の信望を集め、排日宣傳の盛なる當時にありても、日本醫師に治を請ふの信念は全く是れ等の思想宣傳を餘所にして信賴する者多き傾向にあるを悦ぶ。

余は此地に數日の滞在中種々の方面より青島を研究して同仁會醫院職員の多大なる努力に感謝するものである、余

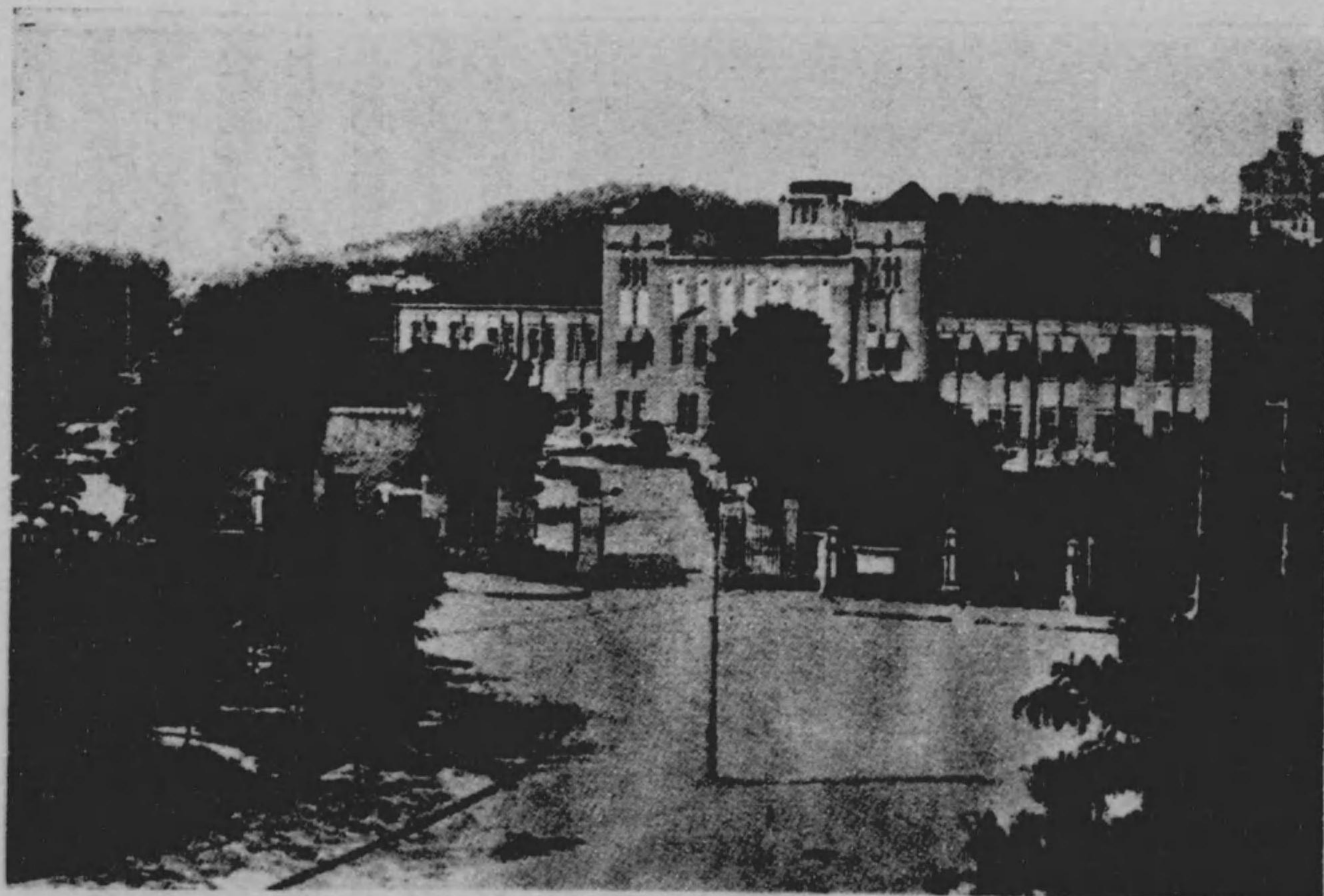
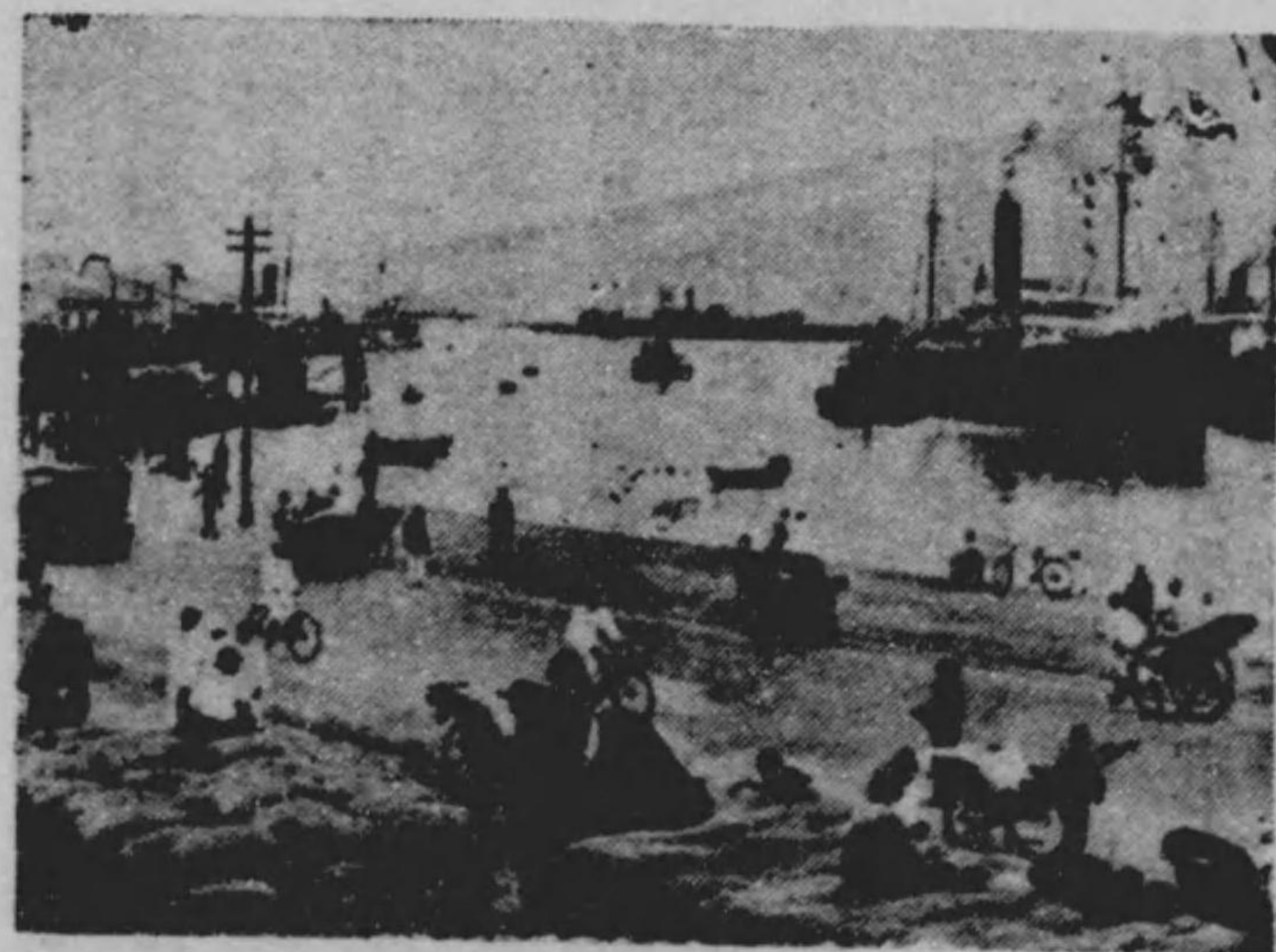
一四、同仁會青島醫院
イ、事務打合と晚餐

六月二十日長澤事務長以下事務室及田邊藥局長列席栗本院長臨場の下に終日事務打合せを行ふ 同夜は長澤事務長に導かれて日本人俱樂部の晚餐に招せられ終つて自動車により青島の銀座とも云ふ可き山東路より日本總領事館『グランドホテル』のある海岸通りを疾走し涼風を浴びて飯宿す夏の海岸通りには金髪碧眼の男女腕を組みて緩々散歩し

異國の情緒を漂はす

ロ、院内一巡

六月二十八日長澤事務長案内にて院の内外を一巡す小ざしと聞きし北京醫院も最初に觀ては左程迄に小ならざりしが續いて濟南醫院を見るに當り其の差を知り更に青島醫院に來りて愈々其の比の大な



青島醫院の正門

の見解は誤つて居るかも知れぬが斯ふ云ふ殖民地の醫院と云ふものは醫者の本分以外に日本内地で體驗することの出來ない對外的社交を要する一事であると思ふ、是は獨り此青島のみに限らず北京、濟南、漢口等皆同様ならんが取り分け此青島には日本人が多い丈に一層複雑なる關係を産むものと思はれる、日本内地の病院ではお醫者は病魔を唯一の目標にして一身不亂患者に當るを以て職として差支へ無い、處が此地では斯る單調な醫者では満足する者が無い日本内地の如く醫者の林中に在ると違ひ一舉一動人の目をひく醫者としての監視を受くる外に複雑なる社交機關として内外人の間に永年渺なからざる貢獻を捧げられて居らるゝ事を心潜に感ずると共に第一代鈴木又博士以下現在の各職員が不斷御盡碎の勞を多とするものである。

一五、青島 見物

イ、忠海、海水浴場

六月二十九日忠海海水浴脱衣場、並湛山にある牛乳搾取所を視察し序を以て途上戰跡及び名所の二、三を見物すべく自動車借りて青島醫院を出づ別所、田邊の兩氏同乗車道せらる。

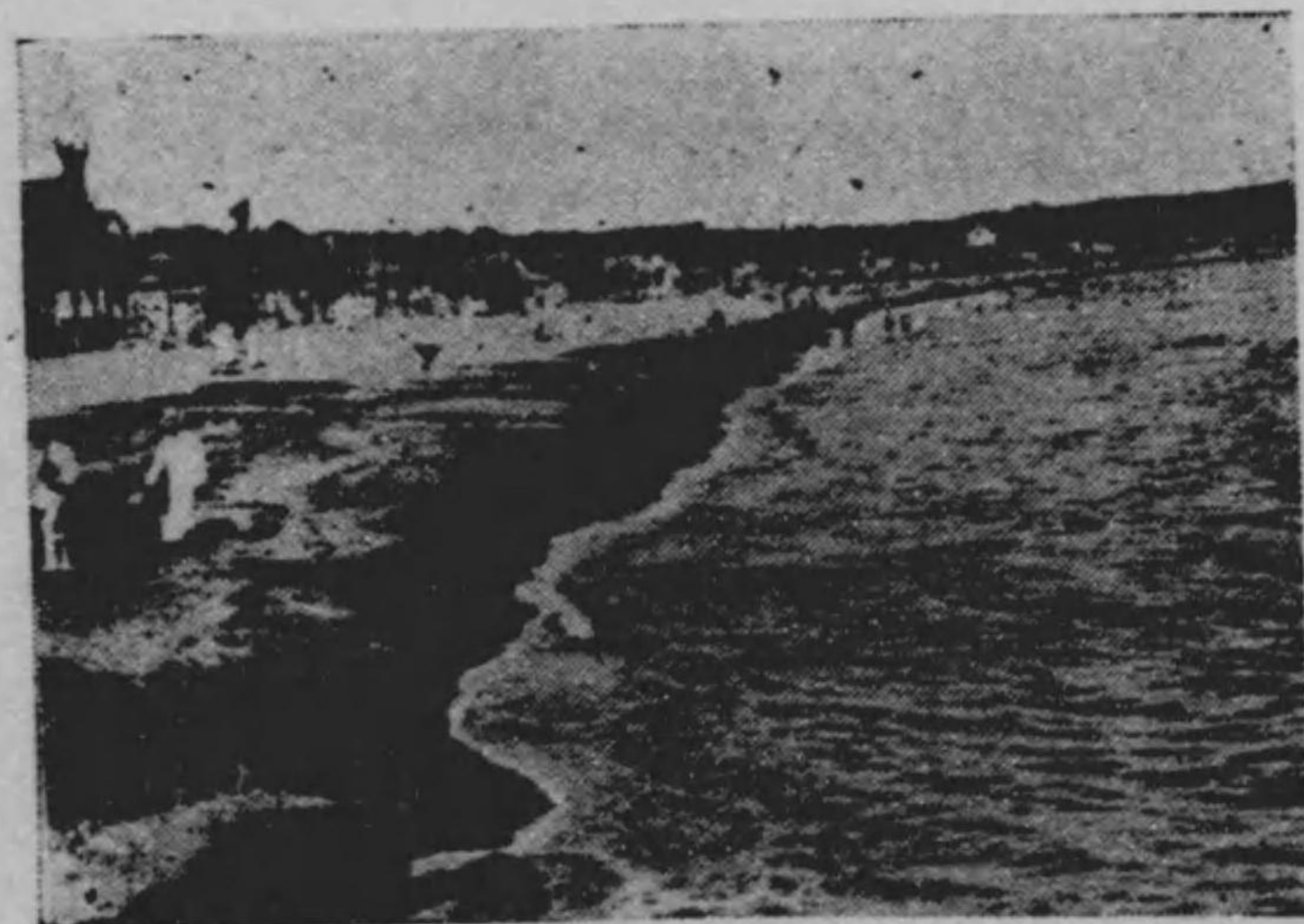
の繁榮を圖らんと策せる場所にして毎年六月乃至九月の候濟南、天津、北平、上海遠くは漢口、香港方面の歐米人が自動車携帯にて來浴すると云ふ、此所數日來めつきの暑さに各團體の脱衣場は開設の準備に忙しく同仁會醫院も近く開場の豫定で有ると聞く、海濱到る處「ビーチホール」鬮焼玩具商等の出店も見へて此所のみは獨り日本内地の氣分濃厚である。

洋人の音樂堂、競馬場、等の遊戯場完備し海水浴場と相待つて夏季の青島を景氣づくるに餘念がない特に本年始めて開設すると云ふ外人團體の海水浴場「ダンスホール」は多數の外人出入して忙し氣に見ゆ蓋し本夏は人氣の焦點ならん、因に青島の海水浴場は忠海の外大小數ヶ所ある。

ロ、會姓岬の砲臺

自動車を進めて會姓岬に下車す、三臺並列せる河岸砲臺の中央に立ち東道の別所氏襟を正して當時の戦況を語る。大正三年開戦の當初皇艦高千穂が此岬の港外に現るゝや豫てより會姓岬の暗部に潜航し居たりし獨艦ト九〇號が砲臺よりの信號を受くるや既に實測しある射距離の砲撃が忽ち皇艦に命中し高千穂は乗り組兵員と共に敢へなき最後を遂げし處であると、悲痛の聲を擧げて語る様宛ら

自動車は海岸通りより總領事館「グランドホテル」前を過ぎて忠海に向ふ、右沖合に加藤島の砲臺を眺め左方一帶新緑樹ち込めたる丘阜の青島市街は赤瓦の棟高く又低く粗に密に點々として色よく配合され宛ら洋畫の「ベルリン」を見るに似たり、程なく忠海海水浴場に達し青島醫院海水浴脱衣場の二階に昇り海上を展望しつゝ建築に付田沼氏より一應の説明を聴く、忠海海水浴場は東南に會姓岬突出して外洋を遮り衙門岬と對向して馬蹄形に灣曲せる遠淺の波靜に水清き申分なき浴場である海濱砂上には「ペンキ」に塗ら飾つた數百の脱衣場軒を並べて建ち又路を距て、後方には避暑専門の旅館「ストランドホテル」の宏壯なるを綠樹の内に望む、獨逸が青島開港に當り外人の避暑客を吸収し以て青島



東洋一の稱ある青島忠海海水浴場

當時を目撃せるの感ありし、予は砲臺の上に佇みつくゞその規模を視た砲臺の備砲は二十四加農砲二門と十五加農砲三門で昇降式探照燈臺と共に残つて居る戦争の當時は我艦隊と盛んに砲撃應酬したので砲塔掩蓋等今も尙は彈痕を留め見る者をして當時を追憶戦慄せしめる、砲臺下地下室に入れば砲兵の起居せる完全なる兵營と砲術室並青島市中より此砲臺内に武器彈藥食料等を運搬する鐵路の設備迄遺憾なく充備せられ有りて後學上大いに得る處有らしめた。

ハ、青島醫院牛乳搾取場

更に轉じて青島醫院搾乳場に到る「アカシア」の並木に涼しき山道を縫ふて走ること暫し、道路は地の利を巧に設計せられ青島郊外の風致をして一層美觀ならしむ獨逸人苦心の跡なるべし、約三十分にして湛山に達す搾乳場は基礎工事を石造とする建物にして下肥汚物の掃除、乳牛の手入れ行き届き厩舎としては蠅の少きに心持ちよし。

牛は現在二十五頭あり昨日産れたる犢の愛らしきに暫し見とれ隣室にある工作場に於て「バター」の製造を見る、厩舎の入口には種牛の年齢牛種を掲げて居る曰く牛種は、「マシーデス、ハナフジ」姓「ホルスタイン」「フリーシア」

種大正十三年二月六日生、牛舎中一際目立つ一頭が即ち是れで有つた。

二、「イルチス」砲臺に昇る

搾乳場の巡視を終へて歸路自動車は「イルチス」(日本名旭山)砲臺に昇る山を八巻なりに設計せる道路に要塞建設の苦心を偲ぶ、洋々たる青島沖と綠翠の山眺を撞にしつゝ、何時昇るとも無く自動車は既に「イルチス」砲臺下に達す車を休ませて臺上に昇れば旭山の名に背かず青島第一の標高であり四方の展望自在である、別所氏姿勢を正し、四方湛山の一帯に指さして口を開く。

大正三、四年戦役の當時左四川には歩兵第二十九旅團あり、臺東鎮には友軍英國軍隊あり、湛山方面には第十八師團の主力あり中央に異國の友軍を挟める我國軍の苦心は大抵の働きでなく此嶺壕の砲臺、そこ此所と目標を示しつゝ熱辯を振つて我軍の勇戦を物語る。

此所は標高五十八米突外海の風光と青島背面の景色が一眸に集まる要害の地である、此所に砲臺を設けたる獨逸軍は眼下に帯の如く見ゆる土壘の線上に延長六千八百米突の鐵條網を張り巡らし保壘と共に陸上より攻めよせる日本軍を憫ました、又日本軍の砲撃も此所に集中されたことは當

然のことなるべく山腹より此砲臺にかけて蜂の巢の如く砲彈を受け現在にても直徑數間深さ一丈餘の彈痕が隨所に見へ澤山の巨砲は總て破壊せられ、唯一門のみは其儘存置されて有つた「コンクリート」の砲臺内の入口に一人の支那人有りて蠟燭を點じて吾れノ遊覽者を案内せんと頻りに推めしが其必要もなかつた。

山上より展望すれば萬年山(ピスマルク)砲臺及び若鶴山(モルトケ)砲臺等何れも指呼の間にあり「イルチス」砲臺と共に三大砲臺に數へられ各山麓には萬年兵營、若鶴兵營等あり何れも七十萬マークを投じたる堅固の建築なりと聞きしも時間に餘裕なくして巡覽せず。

今日は満天晴れて四界の展望撞なり近頃珍しいと云ふ。北方遙に嶗山の連峰を臨みて先年青島醫院を根據として活動せる東京帝國大學生の泰嶗同筭會一行の紀行を回想し又眼下に周村、臺東鎮、大港、無線電信所等諸所を指して説明を聞き下山す。

水、忠魂碑に詣す

大正三、四年戦役中國家の犠牲となれる我忠勇將卒一千餘名の遺骨を納めたる忠魂碑に詣て靈前に跪きて暫し黙禱を捧ぐ碑は全部、花崗石にて作られ高さ七丈八尺五寸有る

命名しあるは面白く又宏大なる神社演藝場を建設せる等の置土産を一々巡覽す。

ト、八幡山と測候所に昇る

青島神社を下りて更に八幡山及測候所に昇る、八幡山は當今は其絶頂迄殆んど人家にして其間に松の木立ちを見る中間に栗本青島院長の邸宅がある、測候所は同仁會青島醫院の裏山の頂上にあり樓内五十幾段の石段を踏みしめ屋上天文臺に昇り全市中を平面的に見下せば目覺むる計りの鮮かさにして眞に名家の一幅である。

以上遊覽せるもの、外公園、學校、電信所、官公衙等の見る可きもの數あるも是を省き寸暇を割きて半日の見物其の儘を記録せる次第である。

六、栗本院長晩餐招宴

同夜院長栗本先生自宅に予を招じ長澤事務長、田邊藥局長並事務室、藥局一同參席支那料理の晩餐を饗せらる、事務員藥局員の諸氏とは全然初對面にして此機會に於て大いに懇談將來の交誼を誓ひたるは誠に好都合なりし懇切なる院長の饗應に一同十二分の歡を盡し夜陰おそく辭去す。

七、霧中の九水に遊ぶ

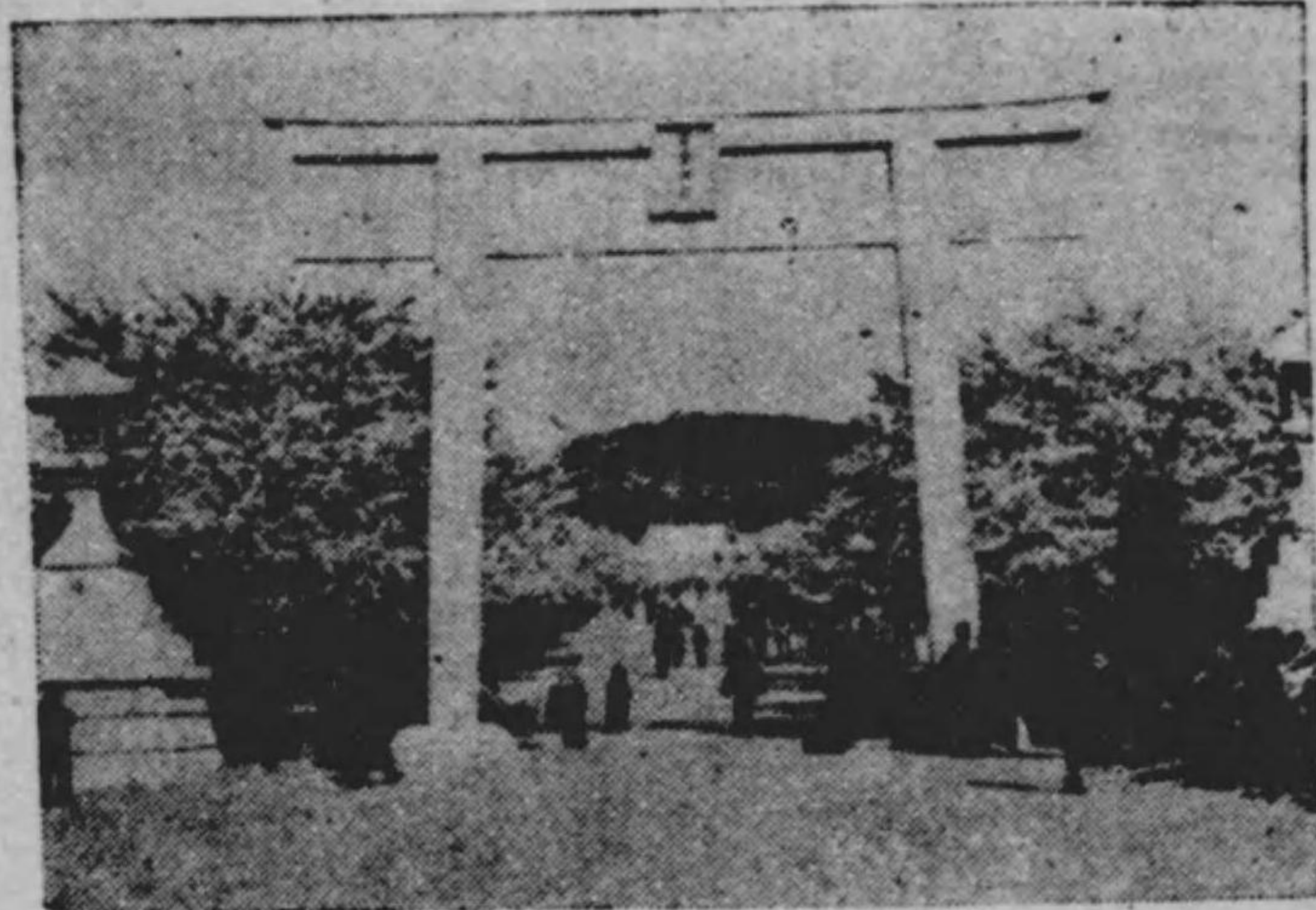
六月三十日明日の出帆を前に今日の日曜は朝から青島名

と云ふ、碑石に深く刻まれたる「忠魂碑」の三字は當時の軍司令官神尾大將の筆になり大正五年十一月竣工したもので有る、其後守備軍の撤退に當りて將來他國人の爲に遺骨を侮辱せらるゝが如き障害あらんことを願ひ遺骨は全部他に移葬せられたりと聞くも今尙ほ毎年春秋二季に於て盛大なる招魂祭を営まれると云ふ。

へ、青島神社に參詣す

青島神社は若鶴山の中腹に在りて天照皇太神、大己貴命

明治天皇の三神を奉祀せらる、參道の兩側並神苑には櫻の古木並木を爲し日本人唯一の守護神であり又日本人唯一の公園である、園内には這般濟南事件の爲派遣されたる第三師團の豊橋工兵隊の手に依つて池水を堀りて橋梁を架し、「豊橋」と



青島神社

物の濃霧に襲はれ雨さへ加りて明日の乗船を氣遣いつゝ旅装に取りかゝる。

正午近く長澤氏來訪雨もやみ霧も稍晴れたれば半日を九水に遊ばんと進めに任せ同行す、自動車にて市街を離れ部落に入れば雲霧愈々深く眼界を遮断す、途中未だ纏足せる婦人の往來を見、又美装の妻女を驢馬に打ち乗せ主人公自ら馬の口を捕り悠々旅する田舎の風俗を味合い或は行列美々しき大葬列に出逢いてお祭りと間違へたる等支那の都鄙懸隔の様々を研究し得る處多かりし。

序に支那の都會と田舎に於ける風俗の對照を掲げて讀者の參考にする。

我國にても維新の當時に於ける男子斷髮の模様を聞くと隨分面白い話があったと云ふ、日本の斷髮も先づ都會人士から先に決行し漸次近傍より邊鄙の地に及ぼされたものらしく遅そきは明治の晩年に到るも大切に尙ほチヨン髷を頂いて居る姿を往々目にしたものである、チヨン髷斷髮の初代に於ては愈々切らねばならぬと覺悟して居てもいざ鎌倉となると大の男がワイ／＼と聲を立て、泣き伏したと云ふ、それから命がけて水盃迄して切り落したチヨン髷を手に取り上げて羨めし想に打ち眺め髷と別れの悲しき一幕を

演じた悲話は決して少くない。是から考へると最近支那革命の制令せる女子斷髮令の成績は實に振つたもので有る。

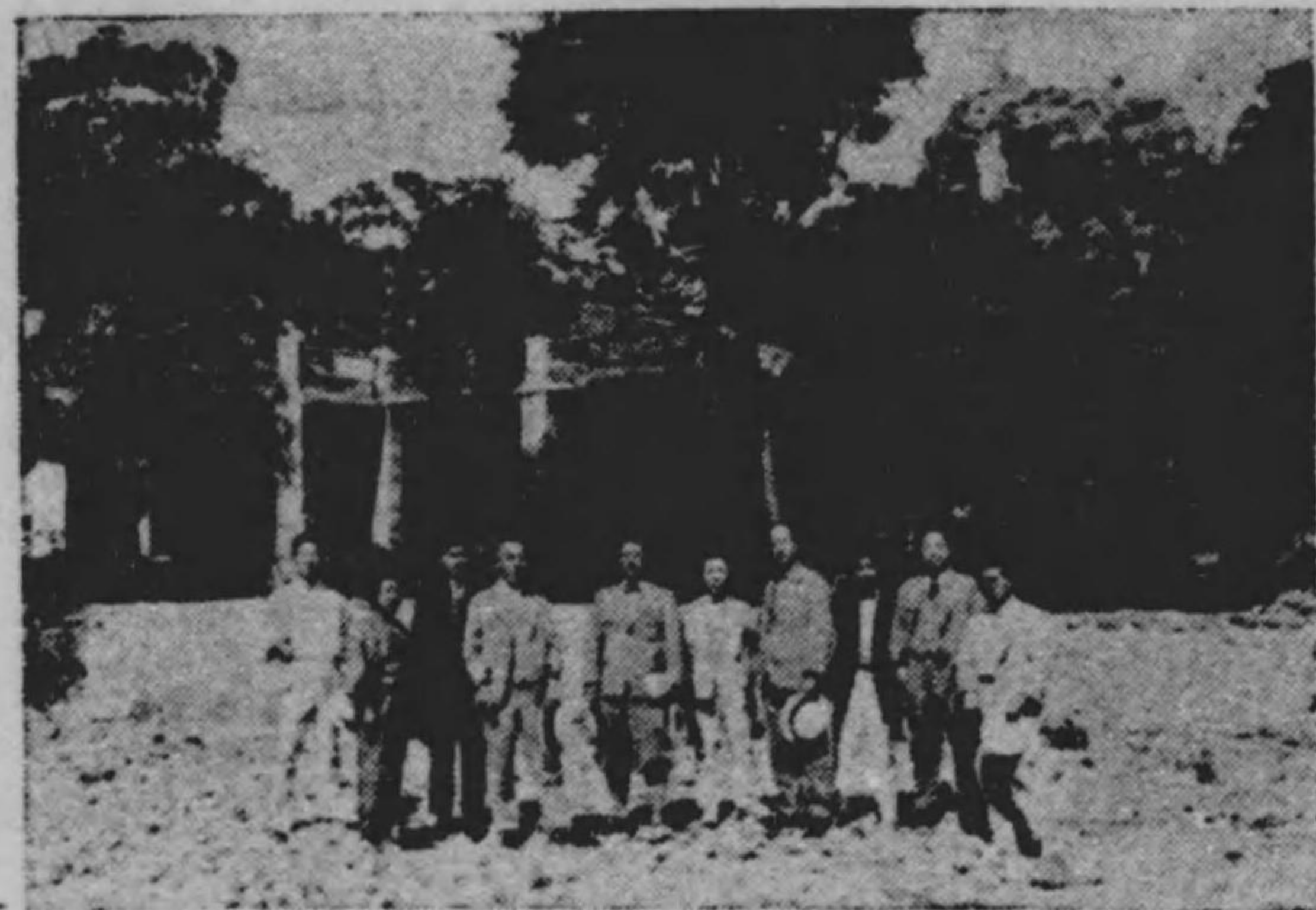
北平は日本で云へば京都の如き古風味のする都會であると聞いて居た、日本の京都は昔から京の着道樂とか云つて今尙古雅として懐古的に女子の髷形等も日本の古風を失はぬ處に床し味がある、夫れと同じ意味に考へて居た北平に今度行つて見た時其の鬼魅さに聊か面喰らつた感じの有つた、即ち一朝斷髮令の聲を聞くや突進的に我勝ちにと斷髮



人婦の舎田と人婦那支代現

を決行し輕快な支那服姿で明るい艶々した生活に變つて居る然して夫れが若い者計りでなく老幼貴賤の別なく主婦も下女も一所である、此一事を見て現代支那人の思想の一端と支那の總てが急進的なるを窺ふことが出来る、抑も／＼支那の

革命は全く古今に類例を見ざる最大革命で有つて即ち經濟革命、政治革命、思想革命、社會革命、風俗革命と同時的に亦連續的に勃發せるを見る状態なるが如し翻つて今日此所山東の九水に遊んで見たとき前述せる日本のチヨン髷時代を思はざるを得なかつた。此所に寫せる風俗は頗る毛斷の北平美人と山東省の僻地より旅する昔ながらの風俗を未だ脱せざる土人の姿との對照である。



亭島數家軒一人邦るあにく深奥の水九

程なく九水に達す、九水の山容水態は日本内地の風光に見馴れたる予等には特筆すべき眺めには非らざるも奇嶽重疊の懸崖は正に雄大にして九水の誇りである、山麓に沿ふて猪窩川の流れるも當時山東一帶の早魃にて河水枯れ徒らに河床の亂石を見るのみなるは物足らざるも崖下路傍の古木奇趣

に富み驢馬の旅行を見添へて一幅の南畫に均し、今は杏の成熟期にして椀きたての味亦格別なりき、お土産として一籠を贈られたるも船中僅々三日神戸に到らざるに悉く變質し東京へは籠のみ持ち歸へつた、九水の分水嶺に近く支那人の籠あり進めたるも霧深くして昇りて益なく中途より引き返す、此山深き九水路に物珍らしくも敷島樓と稱する邦人女將の料亭あり青島戰役以來此地に永住すると云ふ階上の一室に衣を脱して休養し名物の山東牛のすき焼の饗に満腹して歸途につく料亭の階下に數人の中國人卓を圍みて麻雀に餘念なきを見る。

二八、青島より神戸へ

(1) 埠頭ノ混雜

七月一日旅装を整へ醫院各室を巡りてお別れの辭を交はし院長室に暫し休憩十時となるや送りの自動車に伴はれ大港に向ふ栗本院長、田邊藥局長、長澤事務長其他船室に見送られ十一時出帆す埠頭狭き迄押し寄せたる見送りの群集と乗客とを繋ぐ赤青紫白の色こぎ交ぜたる無數の「テープ」次第に延び「リン」と張つてポツリと切れて下る後は帽と半巾を打ち振りつゝ見へずなる迄埠頭を離れぬ見送者多くH邊藥局長最後に帽を脱して右手に振り上げ地上高く跳

ね上つて歸路に向ふた宛ら『セルロイド』人形の躍つた形
何時迄も眼に残つてなつかしい。

(2) 沖より觀たる青島の全景

内海の大港を出帆せる本船原田丸は半島をぐるり一週し
て外港に出で青島の全景を一眸せしむ、海上より觀たる青
島の偉觀は亦格別である船の走るに従い小さき目標より漸
次其姿を没す、海岸發電所の二本煙突、測候所の高樓、信
號所の標柱等約一時間の長きに互り遠望し得られ盡きぬ思
ひに青島の空を眺やりぬ。

(3) 歸路の難船

青島を出て、約三時間三々島の燈臺を過ぎ船は全く大洋
に出づれば激浪高く甲板を洗い乗客の大部分死人の如く起
きて箸取る者極めて少なし、無電の情報に依れば九州方面
の暴風北上の餘波なりと、一同頭痛八巻寝るに如かずと毛
布に潜る往路の極樂航海に比べて是は亦生き地獄の感があ
る此分にては玄海の一を思ひやられ取り越し苦勞に船客
は自己醉に酔つ拂つて居る。

(4) 船客慰安の餘興

第二夜目の玄海灘は突したる程にもなく波靜まり船にて
は疲勞の船客に慰安とあつて三等室の廣場に舞臺を設らへ

夕食後船員の餘興がある絶食に青ざめ切つた船客も交りて
六、七十人の見物が揃ふ餘興は活動寫眞、落語、手藝、踊
り、奇術數番最後に喜劇二幕と云ふ盛んな催しで有る、前
夜來激浪に揉まれ切つた船客を慰むるには好適の施設で有
つた何れも素人離れして好評喝采を博し寸志の寄附金も盆
にうづ高く投げ込まれた。

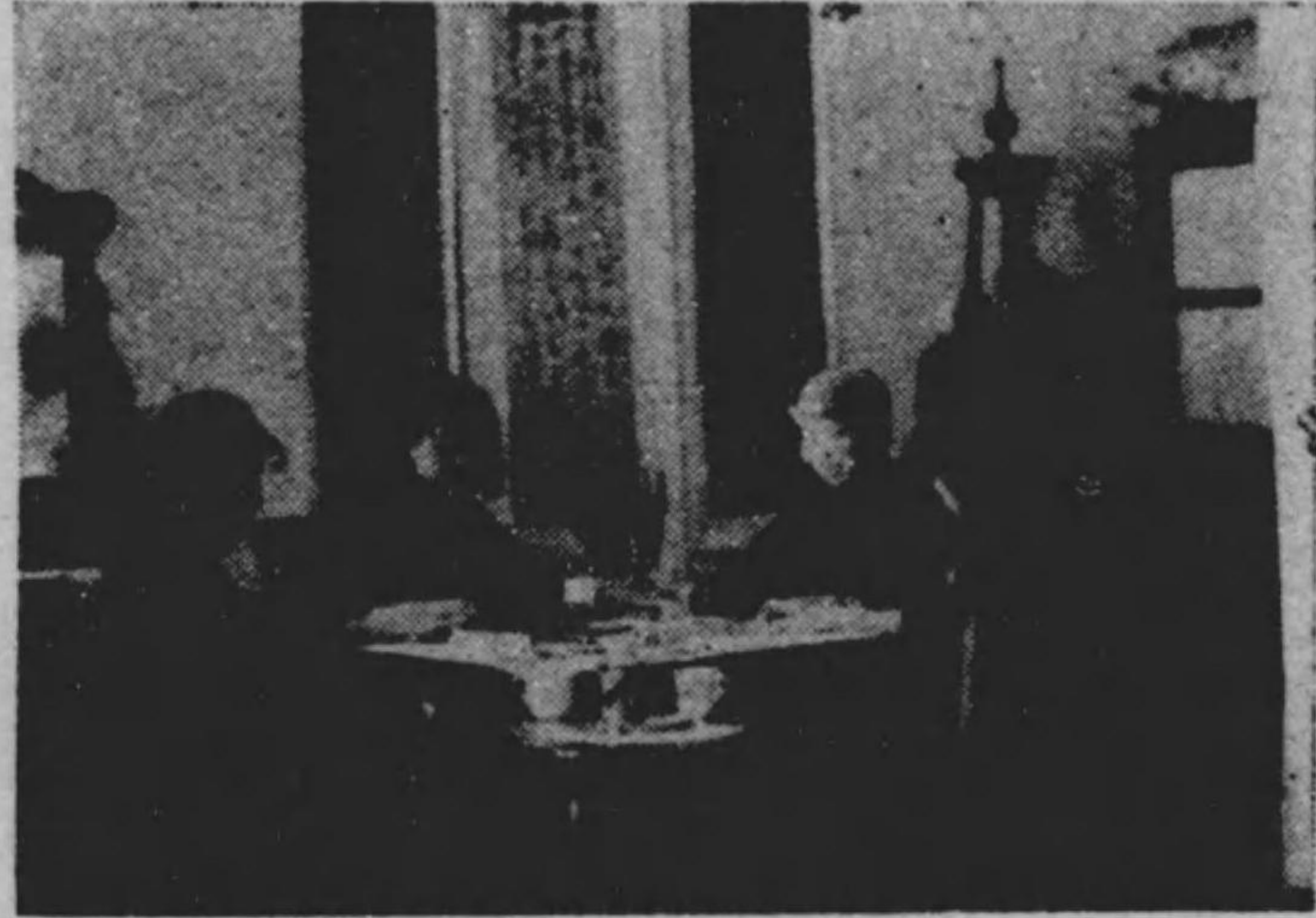
(5) 嚴島神社參詣

七月三日豫定に遅るゝこと約二時間午前十時門司に寄
港午後一時出帆雨中の瀬戸内海靜かに船客一同青島以來の
勞を休め蘇生の思ひしつゝ安樂な睡眠を過して翌朝宇品に
寄港す。

一夜の安眠に元氣恢復せる船客は期せずして嚴島神社參
詣の動議成り原田丸船員の案内に一行三十名小蒸汽に打ち
乗り初夏の綠濃き嚴島に上陸神社に參詣一路平安歸國を奏
し境内を巡覽記念撮影し午後二時歸船直に出帆す。

(6) 船中の麻雀

多數の乗客中には船に強い連中も有つて青島以來神戸迄
四日四晩麻雀の卓に日も是れ足らざる熱狂連の居るを見
た、麻雀は支那獨特の娛樂具で有るが歐米に流行して以來
我が日本にも到る處麻雀俱樂部の設置を見るに到り閑人の



支那那上流家庭林氏宅の麻雀遊戯

時間潰しに持映やさ
れる様に成つた此娛
樂は深入りするに従
い寢食も顧みないと
聞くが麻雀に凝れば
船にも酔はないと見
へる麻雀の遊戯は支
那到る處流行し邦人
居留民にも大の通人
あり又狂人的熱中者
も随分見受けた是が
結果は日支人社交界

の連鎖ともなつて善用すれば得る處も有らんが又一方には
種々考慮すべき事情の伴ふもので有ると信ずる。

一九、歸京

七月四日、去る六月五日此所神戸港を解纜して正に一ヶ
月再び元の突堤に上陸内地の人となつた、三宮神社に詣で
恙なき歸國の禮參を終りて直に特急列車により雨烟る東海
道を一途に午後七時半東京に着す中村部長以下同仁會職員
家族知友の出迎へ多く茲に一路の旅を閉ぢた。

以上は短日間に於ける素通りの旅行にして事毎に細を穿
つて研究せるものもなく極めて薄弱なる見聞を羅列せし



嚴島と森

に過ぎざるも百聞一見に如かず今回の旅行にて支那近情の一端を學び未知の土地に幾分の理解を得たるを幸とするものである。

我同仁會に於ては夙に邦人の支那視察を獎勵し特に日華兩國の青年學生をして相互に彼我の國情に精通せしむべく年々若十の補助を出費して支那旅行を觀誘し又一方中華民國より我國の觀光に渡來する民國學生に對しては我國醫學生との間に成る可く懇談の期を多からしめ中日醫學談話會等の機關を組織して兩國學生の親交を推めつゝあるものなるが廣く彼我官民の力を擧げて今一段兩國民が文化の交換並經濟上の取引きをして頻繁ならしめ度いと念するものである。

二〇、特筆すべき旅行中の感想

(一) 勤績永き同胞の功勞

此度北京、濟南、青島各醫院を視察して特に欣快に覺へたるは何れの醫院にも十年、十五年と一地に永年勤績せられたる我同胞の居らるゝ一事である即ち北京醫院には馬養八駝介氏十五ヶ年以上を勤績し濟南醫院に於ては看護婦長秋山善女十三年の勤績により常に若き看護婦連の慈母となり永年一日の如く醫院の爲に貢獻し居らるゝは誠に賞賛に

其實况是所至囑

如斯にして中國人の此宣言を見ること恰も我々國民が勅語を謹讀するが如く尊崇し居る有様である。去りながら政變常なき支那に於て此宣言が何時迄尊敬せらるゝやは疑問とせねばならぬが現在の處此孫文の意志は種々なる國民思想となつて現れ租界並殖民地回收、不平等條約の撤退等と叫び我日本に對しても反日會の宣傳、日貨排斥、經濟絶交を稱へる等誇大の宣傳を繰り返して支各國人の安住を慮げて居るは甚しく遺憾に感ずると共に一日も速に此惡宣傳を絶滅せしめ兩國親善の術を擧げ度いと思ふものである。

(二) 憐れなる廢帝の末路

内にありては清朝廢帝後に於ける宣統帝及び皇統御一族に對する虐待は亦目も當てられざる仕打にして廢帝當時は年々國費を以て御一族餘世の生活費を奉獻する規程を定めたりしが國費多端の今日は是を一顧する者さへなく聞くに憫然の限りである。往昔より孔孟の流れを汲む此國人の所爲としては寧ろ不審と云ふ可きの感あらしむ。

(四) 支那古建築物の廢退

國民革命の進行と共に反孔子教の立場から各地の聖廟を官公衙公署に充當し甚しきは兵營に代用し時に破壊潰滅等

値するものである。海外に於て事業を經營する我同仁會の如きは特に右兩氏の如き勤績者の多きことを特に囑望するものであるが身邊種々の事情より近來兎角勤務者の水續に乏しきを遺憾とす、一地に繼續十數年と云へば人生旺盛時の半を此所に勤績するものにして右兩氏の如きは眞に其功勞者として尊敬の念を禁じ得ざると共に斯の如き後繼者の愈々多からんことを切望して止まざるものである。

(二) 死後の餘光多き孫文氏

孫逸仙氏死後の餘榮は我等が日本に於て想像せる以上である、彼が夫れ程迄に偉人なりしか又後繼者が是を偉人たらしめたるかは暫く措きて今は全土に互り支那革命の守り本尊となり、其遺文は特に慎重大書して以て官公衙、兵營は勿論、學校寺院公園車站等荷も人跡繁き場所には悉く是を掲げざるは無く實に徹底的である因に其全文を記す。

余致力國民革命凡四十年其目的在求中國之自由平等積四十年之經驗深知欲達到此目的必須喚起民衆及聯合世界上以平等待我之民族共同奮闘

現在革命尙未成功凡我同志務須依照余所著建國方略建國大綱三民主義及第一次全國代表大會宣言繼續努力以求貫徹最近主張開國民會議及廢除不平等條約尤須於最短期間促

の事さへあり。又元明清三代の帝都として宮殿その他保護を要すべき古建築物數多ある北平に於てさへ往々是等の破壞を耳にしたことは東洋文化將來の爲に頗る遺憾とする所である。北平に於ける古建築物、書畫骨董等の陳列所は到る處相當高價なる入場料を徴して一般の觀覽研究に供し其收入を以て修繕及其維持に充當せんとしつゝあるも是れは唯年々荒廢し行く程度をして多少緩ならしむるにしか足らずと云ふ、文明諸國の古物保護施設とは同日の比にあらずるものである、况んや支那に於ける官吏僧侶の腐敗は自己が責任を以て保護の掌にある書畫骨董をひそかに盜賣せる如き事など殆んど公然の秘密とせられ居る處尠少ならず、今にして是れが保護の絶對確實を期せざれば東洋の古美術を誇る北平の前途も亦悲感せざるを得ない。

(五) 中國人はよろしく日支關係を尊重せよ

日本は對獨戰の聲明に基き青島を中國に還附したれども青島に於ける在留邦人の事業は益々發展し其の勢力は日に増し伸張して居る、支那は青島接收日支條約に依つて日本の山東に於ける權益を確認したれ共其の實行は中々容易ならずそこに問題絶ゆるなく遂に這般の如き濟南事件てふ不祥事を惹起し日支の國交に兩國の經濟上に不尠不利を與へ

たることを遺憾とする。

過去の統計に見るも青島の對外貿易は日本を主とし邦人の投資せる商工業の總ては壓倒的數字を示して居る、日支兩國の關係を説く者必らず山東に論及し又邦人の支那を視察する者又必らず青島を訪ひ濟南を視察するが例である、中華民國人にして一日も早く眞に日支の關係を理解尊重し誠意と實力とを以て親交を重ねるに到らば出兵の如き不祥事の起るなく兩國の福祉と平和親善の實を擧ぐることに火を見るよりも明白のことである。

(六) 日本人にも亦支那を紹介するの要切なり

近來世界各國人が日本を目指して觀光に旅する者年と共に増加の傾向を示し國際親交上に及ぼす効果は蓋し甚大なるものあるを喜ぶものである、百聞一見に如かずの古語にもれず一偏の見學は山本の書籍を繕くにも増して學ぶ處多し故に予は我國人が進んで外國を觀光し子弟を教養し以て其見聞を廣からしめんことを切望するものである、斯かる見知の下に我同仁會は年々我國醫藥學生の夏季休暇を利用して支那の觀光を觀誘し其の旅立つ輩を後援し出先同仁會各醫院をして支那視察の爲に一偏の世話を惜まざると共に又一方日本に留學中の支那學生に對しては日本學生との間

に親交を結ばしめ又親しく我日本の家庭を紹介し日本生活様式の馴致に迄力を致しつゝ有るものなるも未だ此程度にては予等が欲する目的の一毛だにも達せざるものである、中國人をして我日本を識らしめんと欲せば先づ我れ進んで支那を學ぶの要切なるものである、是が爲には廣く日本人一般に對し中國の状況を紹介すべく日本に於ては近代の支那事情を、又支那に於ては日本の現代を紹介するに足るべき展覽會等の開催を試み中華民國の上下をして現代の支那と日本をお互に了解せしめ國際親交並海外發展の志望を喚起し日支親善の助けを策せんことの徒事ならざるを痛感するものである。

(七) 日本商人の奮起を望む

支那には到る處に世界文明諸外國人の移住發展し居る者不計、然して各々自國の文化を中華民國に注入すべく山本の犠牲を惜まざるものがある、支那と我國とは特に國境を接し地理的關係上相當に我國産品の支那に輸入せられ居るは認むる處なるも予は此度支那を巡遊して諸外國人が中國に向つて如何にも自國の宣傳に意を注げるかを目撃し其の躍助たるものあるに感賞すると同時に我日本商人が一見進出的氣分の稀薄なるを非觀するものである。

近來反日會又は經濟絶交等の惡宣傳盛なるに不係日本人

製品の品位に對する批評は左程不良ならず歐米諸外國産品に比し寧ろ信用を博し居る物も無しとせず、予は職掌柄特に醫藥並醫療器械材料品の状況に付て意を用ひたるが北京醫院滞在約旬日中に於て北平は元より天津、上海、香港、廣東其他より外國人並中國人商店の郵送し來る商品見本説明書、型録は實に其の數多く毎日尠くも數通を受理せるに不拘、日本人經營の我醫院に對し日本人商人の發せる廣告は花王石鹼其他二、三の藥品廣告を見たるのみ實に微少にして眞に藥にする程しか姿を見ざる状況にある、况んや中國人及び諸外國人經營の醫院學校に向つてはおそらく廣告の配布など絶無と推して誤りなからんと悲感するものである。

又支那を鐵道旅行すれば沿道には種々の路上廣告を目撃するも我日本産物の廣告としては森下博士の經營に係る、「仁丹」あるのみ、予は森下氏を以て支那に於ける日本人藥商の代表として茲に敬意を表するものである、最近支那南方にある親日醫界人士の説を聴取せるに曰く、

日本の三共、鹽の義、武長、第一製藥、日本製藥會社等一流製藥所の製品中には歐米品に比較し遙に優秀なるものも

澤山ある、然るに日本商人は内國人共喰的商事に窮々として海外發展を計策するもの尠きは惜しき事である、今一段の努力を以て海外の宣傳に努力せんことを切望する云々と

予は是を眞によい教訓として特に手記せざるを得ざりし前にも述べし如く津浦線一夜の汽車旅行に於て驚く勿れ日本人の旅行者は楠本博士、及び予の外三井物産の社員一名ありしのみ、是に反し歐米人の遊客は相當に多く食堂に到つて見るも中國人に次いで歐米人なること一目して認め得られ日本人は僅に三名で有つた國の接壤とか同文同種など、中日親善を叫ぶも恥しき程に寂寥たるものである。

予は我同仁會各醫院が日常消費する醫療用藥品諸材料を始めとし器具機械事務用品の一切を全然我國産品を以て充足し其の良醫と良藥を以て中國の難病疾苦を救済し日新醫學の威力を普及せんことを熱望して止まざるものである、希ば我國業界の諸氏一段の奮起あらんことを。

(八) 海外に移住せらるゝ諸士の爲に

凡そ母國を離れて外國へ移住せらるゝ諸士が自己を利せんと欲するならば先づ以て其の移住地の國土と其土着住民の福利増進を念として其の國土の民より尊敬せられ信用を

博することを第一要件とせねば我身に終局の幸福は得られまひと思ふ。短い年月の間に少し纏つた臍くり金子でも出来様ものなら行李を纏めて腰の屈まぬ内にサツサと母國へ引き揚げたいとのみを念とする如き島國人根性では到底移住先の土人より山大の信用はおるか其の日／＼の交際もおぼつかないと思料せざるを得ない。中華民國人も日本人の事を様々に評して居る、つい先達余が支那から歸朝して間もない時青島醫學校から日本觀光に來た中華の人々に逢ふて種々の話を聞いて見た、曰く「日本へ始めて來て日本が氣に入りました日本内地に居らるゝ日本人は何故に斯んなに心切で有るのか知らんそして支那に居らるゝ日本人は何故にあんなに違つて居るのか云々」是は學生一行が支那の田舎から青島に出來て來て永い間の學生生活中幾多の日本人とも交際して日本人の氣心も十分呑み込んで居たものが偶々日本觀光に來て卒直に感じた偽らざる告白、純真なる感想であると思はれる、斯く言ふと如何にも海外に居らるゝ同胞諸君を彼れ是れと非難する様に見ゆるかも知れぬが決して左様な意味ではない余は此度の旅行中にて支那の人々や移住の日本人より随分氣持ちのよい親交的な話も聞かされた、支那人以上に信頼を受けて居られる日本人も決して少

くはない、元の濟南醫院の牧野博士、青島醫院の鈴木又博士等が積年の功勞、中國人に對し打ち込んでの仁術心から顯れた聞くも涙ぐましい美談は決して二つや三つではなかつた又是と反對に出稼き邦人の振舞ひを遺憾と思ふ事柄も相當聞かされたり、目撃した事實も有つた、凡て良い事は中々普及せられず悪い事は直に流布せらるゝもので僅かの行違ひも外國の人には可成り感情を痛めるもので有ることを忘れてはならぬと思ふ。日清戰役直後から支那に永住して居る老練家の話を聞くと「支那に來たら國籍も何も考へないで支那人に成つた心持ちで先づ支那の爲に働く事を精神として進むことが一番切で是がやがては我身に報いられるのである」と話されたが全く金言であると思ふ。諸賢の既に知らるゝ如く英國人が彼の大上海を開發するに當り先づ忠實に土着地主の利權擁護の爲に力を盡して先づ絶大の信用を得て後着手した永遠の施設振りは流石に大英國人の度量として感服せざるを得ない、吾れ／＼日本國民は英國人が地球上の到る處に於て何故に如斯實勢力を得て居るか。又中華民國人が如何なる國土の津々浦々に迄浸入し幾多の虐待と困苦とを忍びても移住地に永住して子孫の繁榮に成功しつゝあるか。此堅忍不拔の兩國國民を對照す

るとき又は等兩國人の仲間入りをして中華民國に移住せられんとするとき大なる覺悟と決心とを要するもので有ると思ふ。

(九) 頻繁に招かれた支那のお料理

予は今回一ヶ月に亘る旅行中到處に於て屢々盛宴に招せられ其地、名物の支那料理を饗應されたことは旅行印象中著しいものゝ一つである、予の如き食料學に淺薄なる者より見ては總てが同じ様な支那料理に見ゆるけれ共北京料理、南京料理、廣東料理等處變れば品も變り同時に名稱を異にし材料、調理法にも夫れ／＼差違あることを聞き又其二、三變化せる名物をも御馳走になつたが宴席に招かれて客分として料理の研究もならず、其以外には打込んで支那料理の研究を行ふ餘暇を得ずして支那の地を離れることに成り終つた爲自然茲に取り纏めて書く丈けの材料に乏しい次第であるが我國の人口食糧問題、無駄廢除、緊縮を絶叫せんとする際支那人の料理精神とも云ふ可きものにして吾人の大いに鑑とすに足るべき一、二の着眼を掲げてお土産とするものである。

(一) 支那料理と油 凡そ料理は工藝美術と同じく一民族の趣味嗜好を調理したもので支那料理は北寒帯の地域よ

り南熱帯の域に亘り廣大なる面積を占むる國だけに前述せる如く各種の名稱を附したる様々の料理あることは當然のことにして我日本の如き小島國內に有りてさへ江戸料理大阪酢志等と相違あると同じ事情に有ること勿論である、支那料理としての特長は何物にも大方油を用ひると云ふことが一つの特長と云い得るで有らう、油は豚脂、牛脂、牛酪羊酪、菜種油、豆油、胡麻油、等有るが中にも取り分け豚脂は南北を通して使用せられて居る、然して此豚脂は豚の肚あぶらみを溶解したもので他の部分の脂肪を交ぜない故に西洋料理で用ゆる「ラード」の匂とは變つた匂ひ謂ゆる支那料理の臭がするのである。

此油を用ゆる事によつて材料を強度の熱にかけて逸速く材料に火を通して時間と燃料を節し且つ消毒を完全にし又材料より發する直接の強い匂を避ける爲豕油で炒り付けたる上、葱生姜の類を以て薬味を施しそして稀薄なる澱粉と水とによつて融和せる調理法は、實に進歩せる此國獨特の料理であると思ふ。

(二) 材料を粗末にせぬ。支那料理は猷立の種類に於ては世界第一の評を受けて居るが予の見るところでは決してそうは感じない材料は大抵極つて居て一般には豚、鶏、家鴨、

青魚、桂魚、蟹、小蝦、玉子の類で國が廣く交通機關不備の國土に發達した料理なるが爲めか乾魚乾物野菜を使用することが甚だ多い様である乾魚として著名なものは鮑、海參、貝柱、鱧の鱠等其重なるもので又野菜としては筍、白菜、蘆、ほうれん草、韭、胡瓜、冬瓜、くわい、葱、蒜、胡椒、椎茸「きくらげ」などである。

右様の材料を巧に部分的に分けて種別を多くし調味と庖丁の作用によつて一々献立の名稱を變へて如何にも豊富にように見えるが調理の實體を詳に解剖して見ると種々の料理へ同じ材料が部分を異にし形を代へ巧に調味色澤を變化して混淆されそして献立の名稱が變つて現れて居るものが多い是れと日本料理とを對照して見るに山海の生物、乾物、漬物、罐詰等を自由に煮焼させる日本料理の方が遙に其種類の廣汎なることを思はしめた、唯日本人は變形、變味配合等に料理の手續を省き今一つは器物によりて體裁を整ふことに念頭し調理其ものの實體に體裁を施す觀念が支那人に比べて適色有りはせぬかと思ふ。

新鮮にして上等の材料を用ひ献立の名稱又立派に出來ながら調理の出來榮へに到つては結局同じ様な合多煮込の料理に終るのが日本の家庭や集團炊事には今尚ほ往々見る處

である。

次に材料の利用に付て一例を掲げんに支那では豚一疋の内では膝から下の脚肉を一番賞味して居る、其脚一本の内から肉は勿論、脂肪質、膠質軟骨、線、筋、の類迄も珍重して部分毎に分け夫れ／＼の料理に仕組むのである、そして支那人が珍重する材料の内には日本人なれば平氣で棄てる處が幾等もある従つて支那料理で珍重せるヌル／＼、ブル／＼した處が或は日本人では見るから嫌になる人も有るならんが是等は食事が身體の根元をなすと云ふ見知から研究せば直に好物になるものが多いと思ふ、要するに材料を粗末にせない原則として

- (1) 材料の惡臭を防ぎ完全消毒の爲に油炒りして藥味を配し味を良化する。
- (2) 大國の奥地交通不便の地へは火にかけて早く煮熟し易き部分を選出したる材料の乾物を製造して送る（主に海産物）
- (3) 滋養に富んだ消化し易き部分を覘つて撰出する。
- (4) 苟も材料を手に使えば全體主義を根本として廢棄量無からしめ、其利用を巧にする。

等の精神が深く／＼支那料理社會に刻み込まれて今日世界

的料理として銘打つに到つたものと思料せられる。

(一〇) 支那の事業には宣傳を必要とす

是を要するに予の觀たる中華民國の當分は萬事宣傳萬能の時代であることを深く信ずると同時に我同仁會事業の普及にも固定せる醫院の外に更に進んで奥地の巡回診療に又恰も赤十字社救護班的出勤事業に尙進んで要所／＼に衛生展覽會並衛生活動寫眞の如きを催し間斷なく本事業の印象を與ふ可く奥地への宣傳に力を致すの必要切なるを感ずるものである。

我日本にありては都會と地方とに文化の差違多からず特

支那を觀る終り

に田舎廻り宣傳の必要を認めざるも中國の實況は都鄙の懸隔甚だしきものあり従て宣傳の效果一層顯著なるべしと思料せらる、百聞一見に如かず去る大正十三年我濟南、青島兩醫院にありては院内に衛生展覽會を催し病院を開放して公衆の縦覽に供し僅々三日間の催しに無慮一萬人の入場を見、事業宣傳上得る處多かりし實例を體驗し居り時期致らば之が再開をも躊躇せざるものゝ如くである、今回の北京醫院創立十五週年記念祝賀會の舉たるや北支一帶に亘り事業普及上相當なる効果をもたらし其後著しく患者の増加を來せるの實況にあるとの報道を得て居る。

昭和六年六月三日印刷
昭和六年六月八日發行

支那を觀る

定價 金七拾錢

著者 森 悅 五 郎

東京市神田區北神保町二〇

發行者 財團 同 仁 會

東京市本所區林町二ノ三

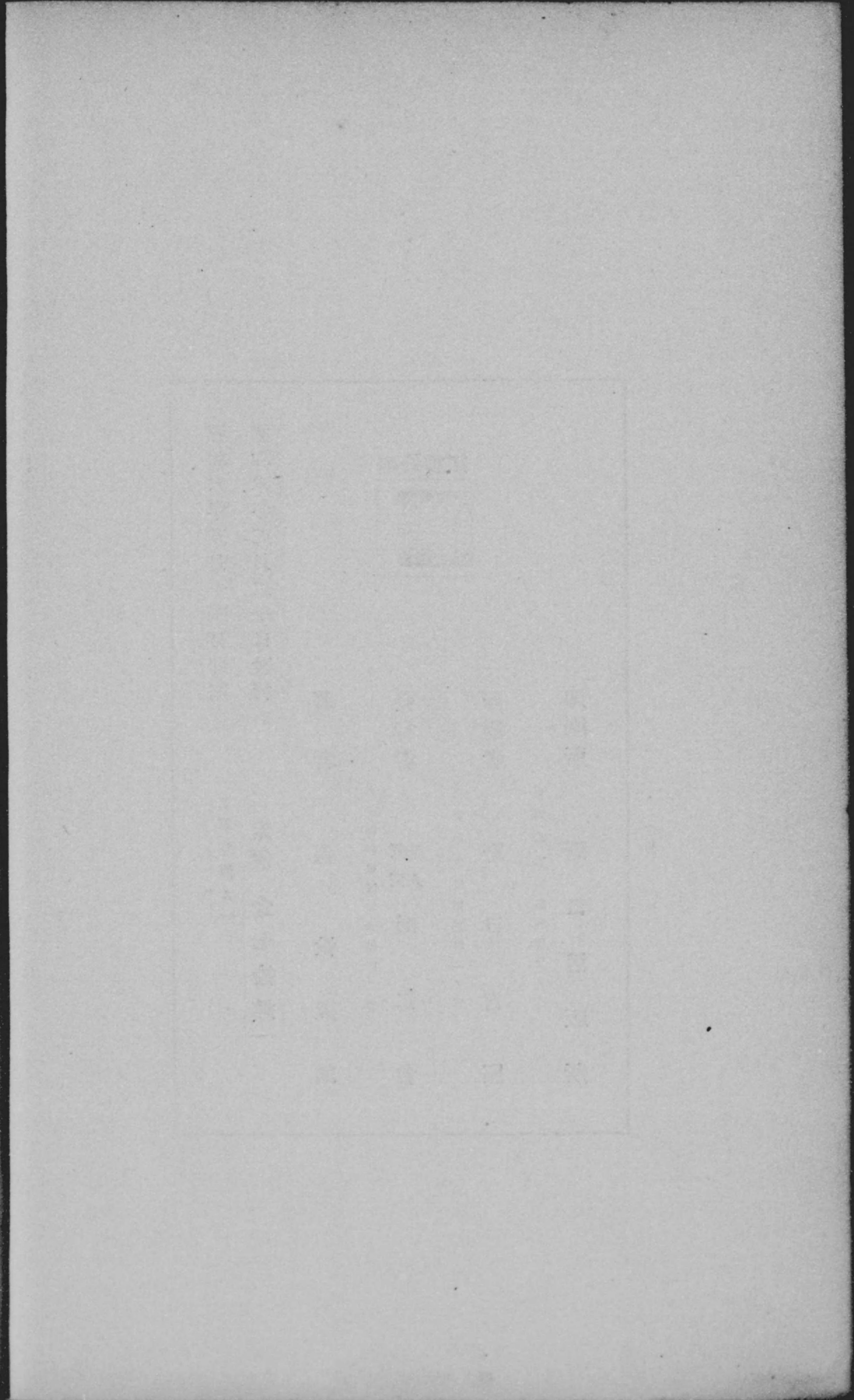
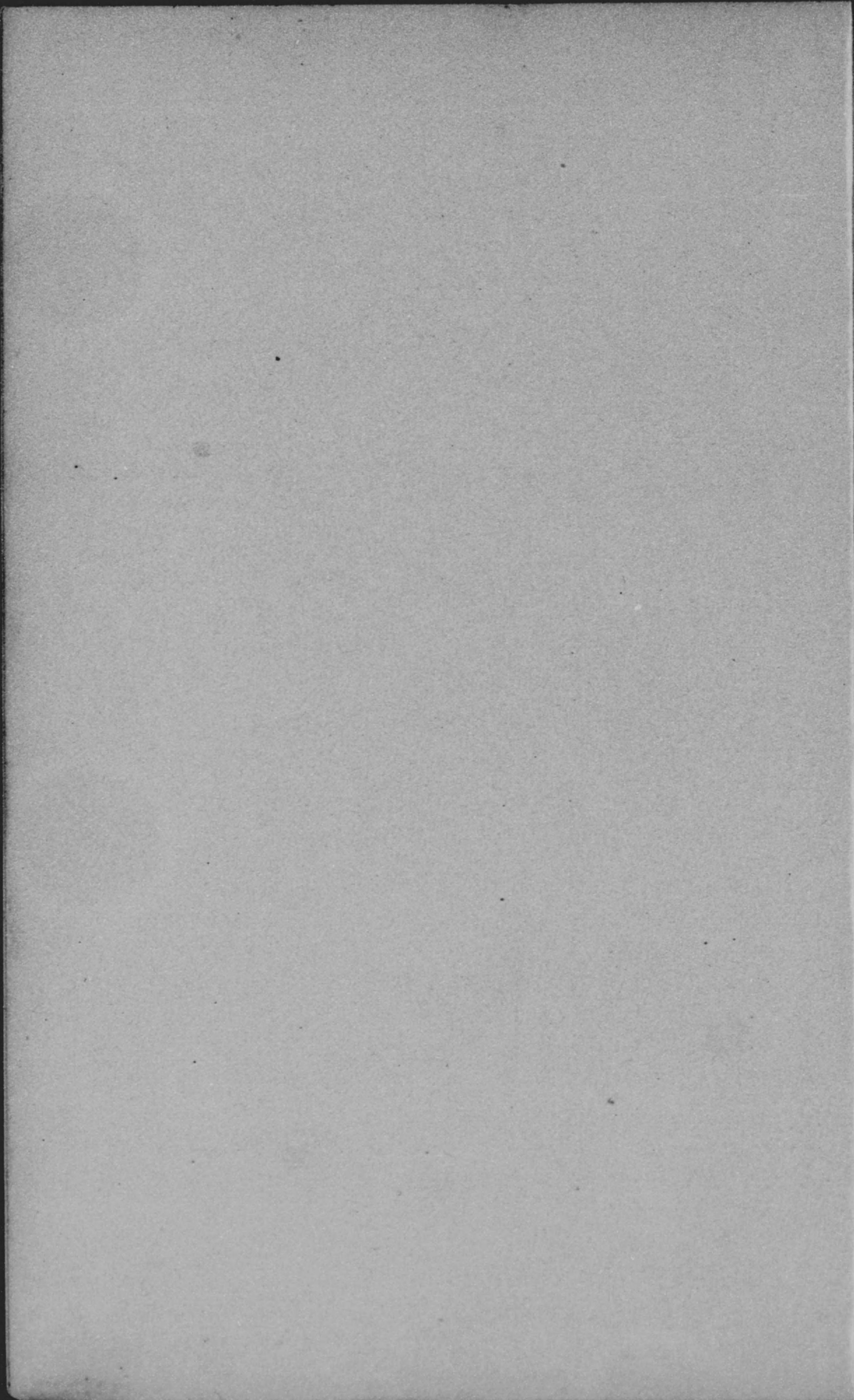
印刷者 野 口 吉 照

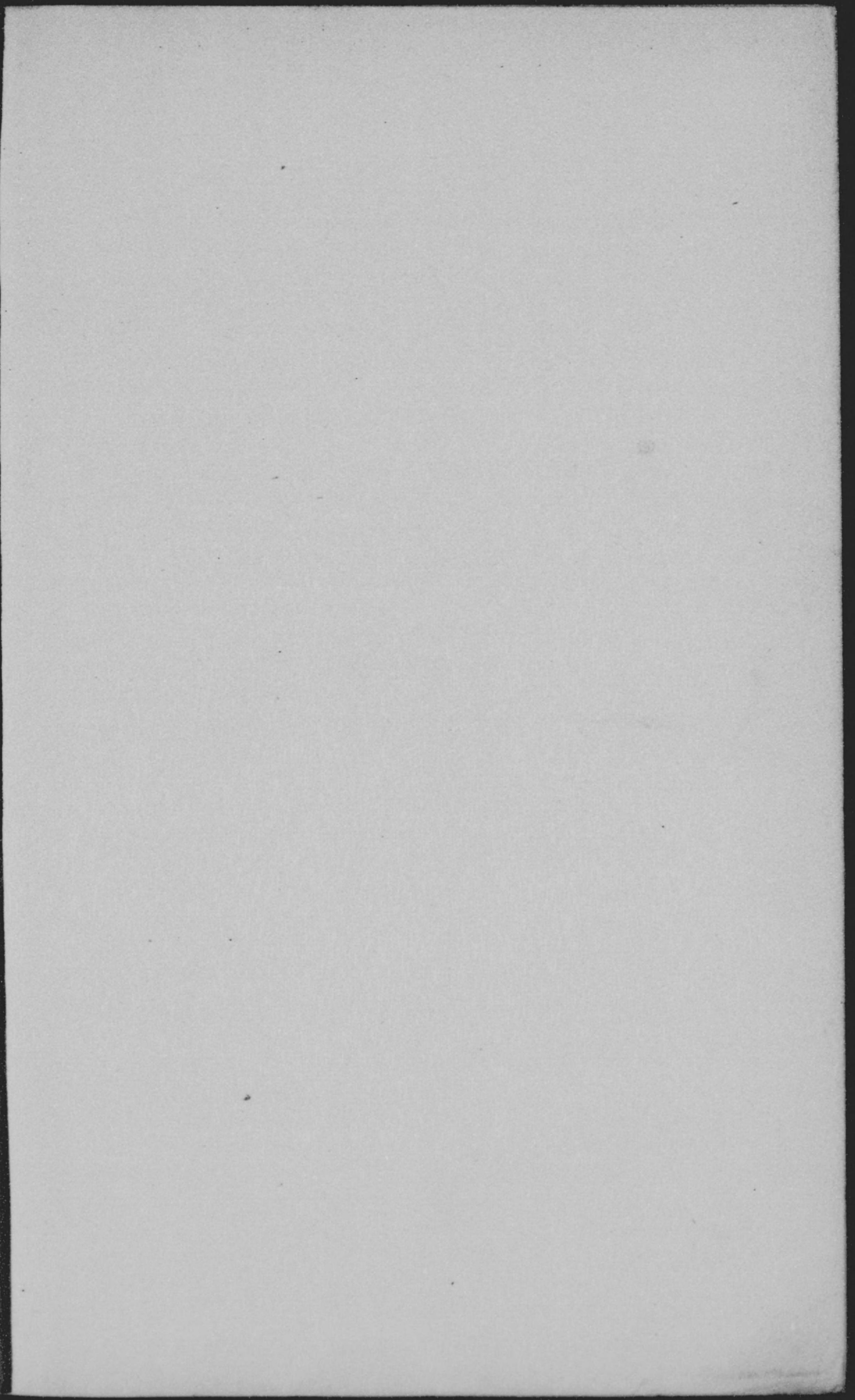
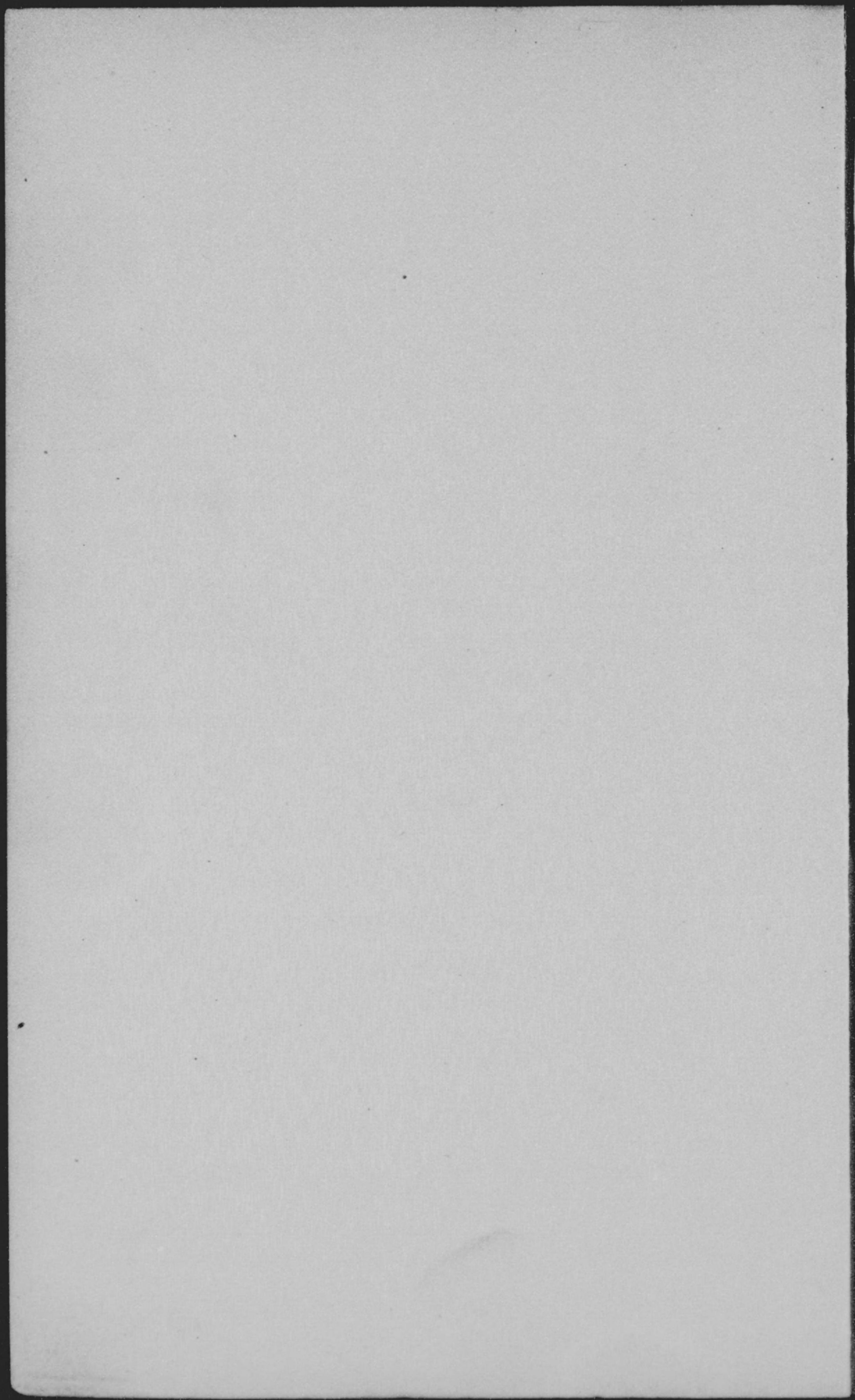
東京市本所區林町二ノ三

印刷所 野 口 活 版 所

不許複製







504
520

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thick
851(菊倍)	30. cm. x	22.5cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. " x	18.5 " x	1 "
853(菊)	22.5 " x	15. " x	1 "
854(四六)	18.5 " x	12.5 " x	1 "
855(特)	24. " x	15. " x	1 "

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

